我樂多誌

三

昭和十年四月上浣起筆

特別
14
1919
466

176721

我楽多誌　昭和十年四月中浣起筆

巻三

○太宰治氏が強しいられて洪水を生じ、遠い自分から一年半者が何となく自分の死期を急くないやうな気がする。死と角をあらそひ種々の仕事をせねばならぬまいと、投げやり主義の自分も流石に氣ぜつて、前月来一二の事を片へけた。自分の書籍の借金問題は、自分かゝるつてあるうちの文の書籍の借金が、自分の個人保証で三万借金があり、自分一人責任を負ふべきものゝ現在遠藤帯刀氏の無力であるが、大限い今年中に、北借金を弱し根抵当

魚沿友老　目木逕画

38- 9252

して居るが、直接借金を責任が無い、自分丈で全部の責任をかぶることとなることゝ、全財産を投げ出して家分配をなすべきものとなるべき筈、ひどく氣に病んだが、漸ぜ紙幣を得れば、三萬圓の内一萬圓を自分から拂くべき筈、大限も責任を負うて、自分は前月を萬圓を拂うべき筈、其紙幣を交つて、自分は迷惑をかけまいと拵て立げ出した。よんの日活印刷は退職辭令を自分の出活費として大切のものであるのに、そんを拂ふことは出来を得なかった。

他に片附けなければならぬことは、亭の病者の仕事である。自分の死後を仕末することゝ、家族中に理解のあるものへ、人を任かしてならばよいが、然今

標原製

分あるので、是非自分の自からの仕事を仕終へなければならぬと考へた。自分の花吉中ゝ書書を受印してよいことを迄させることのとかがある。高書書を受つてよいことを越させることもある。そこで紙を合つて、或る部分は自分の病を受持のこと、却人の二手に渡したいと考へた。長い間関係があつても、夢の生活間を顧みなかつた無い事の義務を回つた所、快らく譲したので、古任、古文書、手間、名家自業本を老萬圓と自から拵備し、印數を五千圓と話候し、書画は三十點拵を二千五百圓とした。其の内いろいろ田と成すことゝした。其の内の流れを大家に唯れ目録のみを見た。主の仕事をとるのは、実に古方紙

大学寮、印刷局などもむしろ学問のほうへ近づいてあるのに、こんど引受けて来たのは、言葉の仕合せであったらしんが片つけばあとの仕事の決して難事でもないのだ、一ト安心をしたと自分の存命中一出版したいと思ってある随筆が二書あるが、一は物産に関するもので、一昨年来作方の雑話会にもらすべく既に一冊を出来あがるの原稿の繰まってある他は随筆早稲田と題するものでいくらか書き足す一冊程の原稿の既に繰まってあるどしかし出させたいと思ってあると、秀湖君の今村隆かやって来て是非二冊共出版したいと実行するのだ既その目次を示して話まることスーに出来上ってあの原稿を整理して引渡す、秋はまれて出版

横原製

さうでもあるとうの、こんも関心の一ひとつであるが事の方法が生んだ。

○自分の生前と身代けれどと思ふ財産は義金であるが別産地だが今の地価がかつてのみるから、溜りに貯り難い或は自分の死後と仕事するとこの事の頼りにならぬ信托会社などに任せるとつもりはなかなか自分とこの方法とも言ふことを実験したいと思ふ。

○沼津三千あるから、地価が上れば一家の財産生計費特とする為に富士の麓上金と次つて生計費を低下なかなかんが、夏前に丸を片付けたいと思ふ。

歌を出版を如何ともいが数十年新

葉が長持ちする。此頃から十冊二十冊
宛り出して淺草へ見られる。然く揃るべき材料もあるのだ。
それに淺草の絵葉書紙は大目次を書き記すこと
一寸と限って三四十冊をのがれくるとした。尚ほ進んで全
部を淺草へ入れたいと思ふが、どれ丈揃つてゐるか、次第
に揃つてゐる一二冊の絵葉書、ところ得るものもあれば、
見て命一度紙とうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
嬉しいことが片付いたら、三四百冊の絵葉書を一ト目で
目を通したいと思ふ。

四月一日 山路生

雑想

聽く
なざしで
この頃の事

幼で何もわからぬ者であつたが、その頃は十五才
と大人の仲間入りをした余風がまだあつた頃だから
思に自ら國士として任じて氣位ばかり高かつたもの

へ
が行つてから相當に發展して發行部數はその頃すで
へ、これは新潟縣が富裕で、智識階級が比較的多か
つて新潟へ輸じ

べきことであつた。

×

松村氏のつぎに山口龍三郎氏が第二代議長となつたが、これは頑固な人だつたので、私の書記長の席をまた下へ下げてしまつたので私は指導者の席を下げるは怪しからぬと直ちに議會は辭してしまつた、當時の議事録は全部私が書いたものであるが「以下議論聞くにたへず」など書いてあるといふことをその後新潟へ行つた時議員の人から聞いて笑つたことがあります。

×

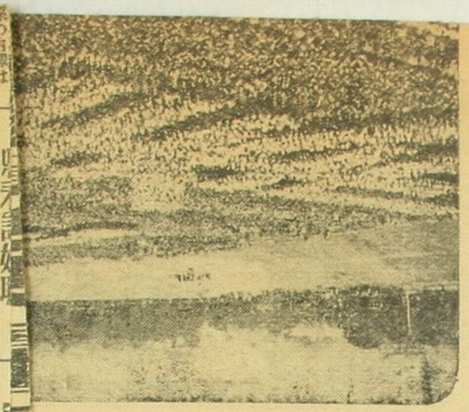
後に新潟新聞を引受けた坂口仁一郎君は私の行つた頃はまだ新聞社には關係はなかつた、東京を出る前に私は新文詩などで坂口五峰の詩を見、森槃濤門下の逸才として知り、新潟へ行つたらこの人に詩を直して貰はうと思つて行つた、そして新潟へ行つて會つたところが相當の老人と思つてゐた五峰君が私と同じ年の青年で、しかも年よりもずつと若く見える眞に紅顏の美少年だつたのは吃驚してしまつた、それから坂口五峰を中心として私達は一酔一吟社といふものを作り心酔へば必ず詩ふべしとして大いに飲み、大いに詩を作つたものでした。

×

その頃大山酒といふ強い酒を盛んに飲しましたが、今も大山酒

正米
双方見送
保合
清算の滑く下落の姿も依然生氣ない有樣に買方はなほ見送りの態度を改めぬが一方賣手も穂米簿は再び元値に戻るは必至と想造して居る爲めに場面は續いて閑散を呈してあり唱ひも大体前日同樣保合を

號百八十六第



奉迎の人々で一杯

新潟縣知事の歓迎會は九日午後一時より官邸で開かれた（写真は知事一行の官邸に入る）

合協會總會
新潟縣産業組合協會の本年度總會は十日午後二時より新潟市白山公園偕樂館で開催されたが池田縣知事、本間新潟警察部長等の來賓あり
會長岡田識太郎氏外松永（長岡）荒井（新潟）山岸（長岡）村上（同）
係の内訳は五千萬圓以上
萬圓
本金五千萬圓
關係 約五千

一 二 三 四 五 六 七 八 九

三期取組高【十日帳入】
賣 中先 二六 世川 先 中 買
二一八 内川 二六 二六九 一
四二六 幸田 二六 三三三 三
三二六 羽巻 二六 三三三 三
本玉 二七、九〇 二七、六八 二七、四八
米三等 二七、八五（前場二〇） 五等
本玉 二七、六二

創刊當時の主筆

尾崎咢堂氏に想ひ出を聴く

感慨無量のまなざしで語るその頃の事

翠風柔かな湖南逗子の海畔、披露山の風雲閣に咢堂尾崎行雄先生を訪れる。先生は明治十二年から十四年八月迄我社の主筆として新潟で活躍された我らの大先輩である、我社の創業六十周年記念號を出すについて、その頃の想ひ出を聞かんためである。

×

創業六十年ですか、もうそんなになりましたか成る程私が參りましてから五十七八年になりますね。初期議會より幾多の政變に風雪の間に戦ひ來つた老闘士は白髯を撫して感慨無量の眼ざしである。

×

その當時の社長は鈴木久藏氏だつたと想ひます、私の働仕者の古渡寛秀といふ人がやはり慶應出身でしたが一年半ばかりでコレラ病のために死亡した、そのあとへ福澤先生の申付けで私が參つたのですが、その時私にいはれたことは新潟新聞の主筆たること、もう一つは富岡出來たばかりの議會が議事の仕方も何もわからないから指導せよと二つの使命を帶びて私は新潟へ行つた、まだ學校を出たばかりの二十才の子供で何もわからぬ者であつたが、その頃は十五才になれば元服して大人の仲間入りをした余風がまだあつた頃だから何も知らぬでも既に自ら國士として任じて氣位ばかり高かつたものです。

×

新潟新聞は私が行つてから相當に發展して發行部數はその頃すでに三千部であつた、これは新潟縣が富裕で、智識階級が比較的多かつたによるもので、私は明治十四年に新潟を去つて報知新聞へ轉じたが、その時の報知が二千部だつた、東京でも其頃は五千を出るものはなく新潟新聞の勢力は全國にもあまり匹敵するものは少かつた。

×

私の行つた年に丁度新潟縣會が始めて開かれ、議長は松村文治郎といふ温厚なる人格者で衆望におされて議長になつた、私が議場へ行つてみると私の席即ち書記長の席が議長より一段低い所にあるそれで私はいつた「これはいけぬ」と、そしてとう〳〵議長と同席を上げさした。

×

今から見れば實に滑稽な話だが子供で何もわからぬものだから、そうした事も自分のおもふまゝにし、さて議事が始まると、實は何も知らぬくせに、常識だけで、盛んに議長を指揮したものだ、私があまり出しやばるので一時議場がやかましく大勢が議長に喰つてかかつたので私はしきりに松村議長に早く散會しなさいといふけれども議長が躊躇して宜しないので、書記長たる私が遂に立ち上がつて「散會」と叫び、さつさと退場して皆もこれに從つたなど實に笑ふべきことであつた。

×

松村氏のつぎに山口權三郎氏が第二代議長となつたが、これは剛腹な人だつたので、私の書記長の席をまた下へ下げてしまつたので私は指導者の席を下げるは怪しからぬと直ちに縣會は辞してしまつた、當時の議事録は全部私が書いたものであるが、「以下略論聞くにたへず」など〻書いてあるといふことをその後新潟へ行つた時縣會の人から聞いて笑つたことがあります。

×

後に新潟新聞を引受けた坂口仁一郎君は私の行つた頃はまだ新聞社には關係はなかつた、東京を出る前に私は新文詩などで坂口五峰の詩を見、森春濤門下の逸才として知り、新潟へ行つたらこの人に詩を直してもらうと思つて行つた、そして新潟へ行つて會つたところが相當の老人と思つてゐた五峰君が私と同じ年の青年で、しかも年よりもずつと若く見える眞に紅顏の美少年だつたのは驚嘆してしまつた、それから坂口五峰を中心として私達は一醉一吟社といふものを作り心酔へば必ず詩ふべしとして大いに飲み、大いに詩を作つたものでした。

×

その頃大山酒といふ強い酒を盛んに飲みましたが、今も大山酒はありますか、あれで強くなつたものだから、その後東京へ來ても東京あたりの酒では一向に酔はなくなつてしまひましたよ〻〻〻

×

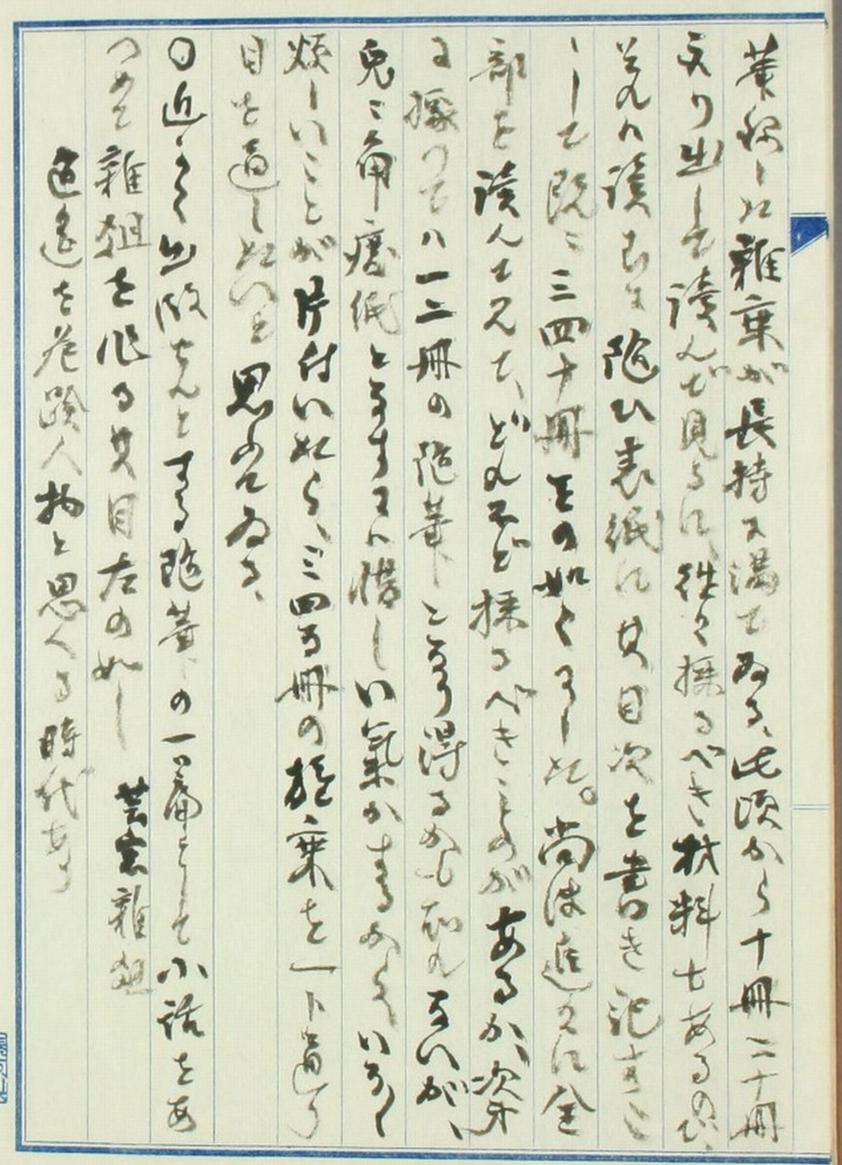
當時私が新潟新聞を中心として大いに努力したことは何といつても國力の發展のもとは商工業の發達に在りとして、そのことに力をそゝいだものです、後に商業會議所となつたものゝ前身である商工會といふものを作り、この商工會がもとで私立商業學校が出來、これが後に縣立のものとなつた。

×

それよりこゝに六十年、今や滿洲國に於して重要なる要衝となつて各般の商工業は興り、面目一新せる現在の新潟は眞に隔世の感ありといふべきであるが、この間幾多の人々が、新潟新聞の繁榮に當つて心血を注ぎ、今日の文化の發達にまで導かれた所勞は誠に多としなければなりません。

×

私は今後も新潟新聞の諸君がますゝ奮勵して國家の爲めにしかしてまた縣民のために盡瘁せられん事を願つてやまない。



業績ハ雜業ガ長持スル為ニ
又リ出シテ淺ク見ラレ
ヌ様ニ
絶ヘ間ナク
ハ三四十冊ヲ
部ヲ淺ク
ハ一二冊ノ
ハ惜シイ氣ガ
目ヲ通シ
日迄ニ
つを雜組ヲ
色色ヲ危險人物ト思ハル時代ナリ

芸宝雜組

昭和十年四月十二日　（第三種郵便物認可）

祝創業

創刊當時の主筆

尾崎咢堂氏に想ひ出を聽く

感慨無量のまなざしで語るその頃の事

春風柔かな湘南逗子の海邊、披露山の風雲閣に咢堂尾崎行雄先生を訪れる、先生は明治十二年から十四年八月迄我社の主筆として新潟で活躍された我らの大先輩である、我社の創業六十周年記念號を出すについて、その頃の想ひ出を聞かんためである。

×

創業六十年ですか、もうそんなになりましたかね。

或る時私が參りましてから五十七八年になりますね。初期議會より幾多の政變に風塵の間に戰ひ來つた老闘士は白髯を撫して感慨無量の眼ざしである。

×

その當時の社長は錦木久藏氏だつたと思ひます、私の御仕者の古渡資平といふ人がやはり國會出身でしたが一年半ばかりでコレラ病のために死亡した、そのあとへ福澤先生の申付けで私が參つたのですが、その時私にはれたことは新潟新聞の主筆たること、もう一つは當時出來たばかりの議會が議事の仕方も何もわからないから指導せよと二つの使命を帶びて私は新潟へ行つた、まだ學校を出たばかりの二十才の子供で何もわからぬ者であつたが、その頃は十五才になれば元服して大人の仲間入りをした余風がまだあつた頃だから何も知らぬでも既に自ら國士として任じて氣位ばかり高かつたものです。

×

新潟新聞は私が行つてから相當に發展して發行部數はその頃すでに三千部であつた、これは新潟縣が富裕で、實業階級が比較的多かつたによるもので、私は明治十四年に新潟を去つて報知新聞へ轉じたが、その時の報知が二千部だつた、東京でも其頃は五千を出るものはなく新潟新聞の勢力は全國にもあまり匹敵するものは少かつた

×

私の行つた年に丁度新潟縣議會が始めて開かれた、議長は砂村文治郎といふ淳厚なる人格者で衆望におされて議長になつた、私が議場へ行つてみると私の席は議員席の直ぐ後で議長より一段低い所にあるそれで私はいつた「これはいけぬ」と、そしてとうく議長とおなじ高さに席を上げさせた。

×

今から見れば實に滑稽な話だが子供で何もわからぬものだから、そうした事も自分のおもふまゝにし、さて議事が始まると、實は所も知らぬくせに、常識だけで、盛んに議長を指揮したものだ、私があまり出しやばるので一時議場がやかましく大勢が議長に喰つてかかつたので私はしきりに砂村議長に早く散會しなさいといふけれども議長が躊躇して宜しないので、幹部長たる私が蹶起ち上がつて「散會」と叫び、さつさと退場して皆もこれに從つたなど實に笑ふべきことであつた。

×

砂村氏のつぎに山口權三郎氏が第二代議長になつたが、山口氏は剛毅な人だつたので、私の書記長の席をまもつた、私は指導者の席を下げるは怪しからぬと云つて、當時の議事録は全部私が書いたものだ、たゞ「ずー」などゝ書いてあるといふことを人から聞いて笑つたことがあります。

×

後に新潟新聞を引受けた坂口仁一郎君が第二代の社長には關係はなかつた、東京を出る前に、私は指導者の席を下げるは怪しからぬと云つて、當時の議事録は全部私が書いたものだ、たゞ「ずー」などゝ書いてあるといふことを人から聞いて笑つたことがあります。

×

後に新潟新聞を引受けた坂口仁一郎君が第二代の社長には關係はなかつた、東京を出る前に、の詩を見、森春濤門下の逸才として知り詩を直して貰はうと思つて行つた、そしてろが相當の老人と思つてゐた五峰君が私年よりもずつと若く見える眞に紅顏の美まつた、それから坂口五峰を中心として のを作り心酔へば必ず詩ふべしとして たものでした。

×

その頃大山酒といふ強い酒を盛んに はありますか、あれで強くなつたものが 東京あたりの酒では一向に酔はなくな

×

當時、私が新潟新聞を中心として大い も國力の發展のもとは商工業の發達に そゝいだものです、後に商業會議所と 會といふものを作り、この商工會が もれが後に縣立のものとなつた。

×

それよりこゝに六十年、今や讀者は て各縣の商工業は興り、面目一新せる りといふべきであるが、この驚異多の つて心血を注ぎ、今日の文化の發達 しなければなりません。

×

私は今後も新潟新聞の諸君がまた してまた縣民のために盡瘁せられ

業創祝

黄昏ゆくに雜業が長持ち湯もみる、此頃から十四
文り出しも淺んで見られ、後く探るべき材料も
美人淺ちゃ 飽ひ表紙に女目次を書き
いしも既に三四十冊をのがくるした。尚ほ近
部を淺人をえも、どんそど探つべきものがあ
る探つて ハ一二冊の飽黄ところ得るあ
兎ご角一度紙とうるうん惜しい氣かまるあ
炎いことが片付いれば、三四百冊の雜業を一
日も早しれへを思ふ。
日迄くも山阪ちゃとする飽黄の一部をもて小
つを雜組を心の女目右のめ　芸宝雜組
色を迄を危険人物と思くる時代

政宗の「ナポレオン、エンド
遠藤の「別荘」と賞賛
雨中の支那芸生
擬産
純真の恋人
黒白内障
泣かぬ蛍
文人の戒名
国士とは
漢詩家国朝の奇才
ニゴー一生苦んだ倫快
川柳ちと見なる芋虫の花

五月人形と柏餅
菓子の名もゴブラン

榛原製

芋虫の雪月花
犬の戒名
平沢専蔵と不動尊
元禄の大名の釣
英国の保守的高貴
山東京伝の無性
石橋内生の借金とは
鶯目鄉
野金同北一戦
同情の後押
国士の銅像
江戸の長谷

遺産相続の判決

榛原製

榛原製

筆墨紙

作境雅閑録

日本段味一班

孤獨生活

養人の心境

乞兒の心境

郷土愛

鐘　聲

聲の法濁

行歌ぶき　禪解書

田園生活

死實の思ひ出

他の渇水初

[illegible]

図書抜味

○古任抜味ム　小流初頭の[illegible]図顧

[illegible]　道中先の一杯

書物蒐集

書物界の文游

書物の集散　[illegible]　東京上図書

[illegible]

日本仏書一斑　猫書眼補

外国と書販さん[illegible]日本関係仏書

[illegible]　埃及蒐漫游

紙[illegible]記を読む

馬[illegible]百人を読む

書談

書簡漫談

書と手紙

偽筆物語

[illegible]文動書談

[illegible]

葉山英集後

[illegible]之友録

[illegible] 東洋山人[illegible]

紅葉山人

書簡[illegible]紅葉山人

紅葉山人拾遺

追悼[illegible]

追悼[illegible]

追悼[illegible]

追悼[illegible]

[illegible]追悼

和田恒吐[illegible]

和田萬吉[illegible]

[illegible]

山水美の思慕

伊賀山の旅記

月瀬梅渓を訪ねの記

終焉地[illegible]

下田港[illegible]

[illegible]の首[illegible]

森林[illegible]

[illegible]

飲食雜

新塩
東京湾の魚
酒と勤王
天鳥漫筆

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○ 此の書きたる墨池叢書の稿を修めつゝあり既刊の随筆に送し此余の紀行游記の如き数の舊稿を掘つて稿をなすべきものが数多あり

下田怪談記、月渚游記、終古遺稿記、久里濱三崎を経るの記、長崎游記、城の記、石の記、

和の記がなんぴあるる。四方部歌に古往今来を稿

一冊を加く、其雑録と是し小伝三十件を

一冊とし此こんなを大略一巻の稿が成つた。

○ 早稲田大学を忠とし金が早稲田関係の墨叢ハ

みなくなる、まんを経めて墨叢早稲田を出版せ

んと如一つ、今のまゝ大略一冊とする得る迄

迄が三つ此から、春海堂の色と仕かも、墨叢と

藤原製

随筆「早稲田」

目次

田園時代の早稲田

早稲田大学の起源（本八篇）

芳義漫歩（四篇）

早稲田の故人物語（本篇）

東洋小説時代を偲ぶ

浪花物語（本篇）

大隈侯と早稲田（本篇）

合祀と、真砂記念碑と、早稲田の関係

名の所の長崎加藤、曾て春海堂厳谷を先

師とし長崎加藤、早稲田厳谷志郎、早稲

田の関するものも実は田殿録中のものであるが、また別
に早稲田叢書のものある限り一冊とする方がよい。

維新初頃の田殿

新潟の田殿

余が関係する仰田家文書の田殿

明治初頃の二宮尊徳流

明治文化財の田殿

明治戊辰の田殿

明治初頃の新潟

山野相馬を伝ふ

右に係る目次は田殿志料の大略であるが、北海
明治初頃の新潟の新潟を指摘する時代の新潟とも

複原製

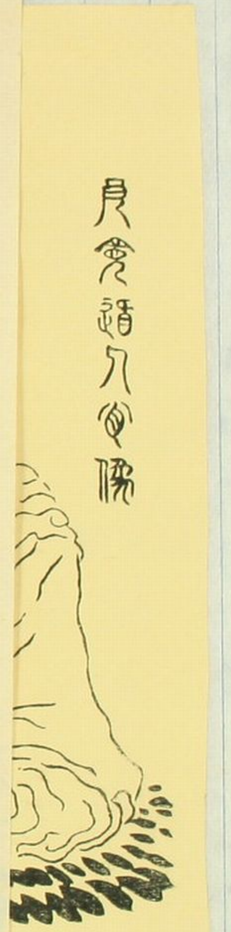
載せ難き事柄もあることとし、尊皇攘夷の志士、君を伝
ふる余が講演は絶筆早稲田に入れることとした。
尚は新潟古板の蔵書、夢浜、仰星の漢文部、紅葉館
の記、余の故郷生涯、その他も田殿録中のものの如く北
海の代辞、余の書に附載した。
○良寛禅師の書を刻して拓本を分布してある及
所業を、訪ひ求めて、余が蒐集した推將来
文を収めたパンフレットを特長、并に明治天
皇の御詠の二句を掲げ、之を表題刻した
ものを、もんぜん化した。なお左の拓本の通りに言葉く
書の上来のものである。又、君看復眼看
不復似無憂の拓本をも、もんぜん化した。尚

東京にあつては春城、市島謙吉先生、故菊地惺堂先生等の特別の御配慮に預りしことを厚く感謝してやまぬ次第であります。

春城　市島謙吉

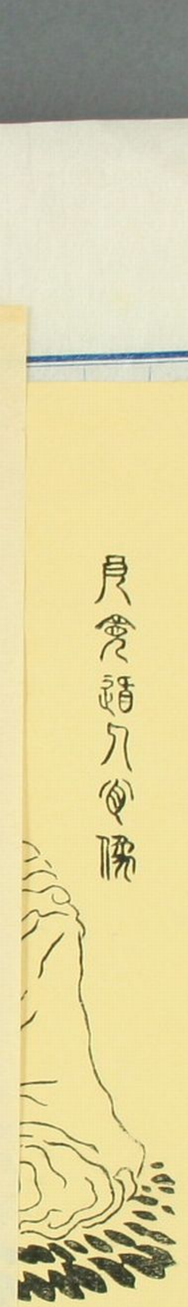
書はよく其人の氣格を現はすと云ふが良寛禪師の書は其好適例であらう、禪師は名門の出であるから虱の巣くふ弊衣を着てゐても爭ひ難い品位があつた、書に於ても風格が如何にも高ひ、禪師は佛徒でありなが

ら其書も其詩も其歌も坊頭臭くない、禪師は世俗に超越して囚はるゝ所なく無邪氣に小兒と游戯を共にしたが其書も筆の赴くに任かして飄逸を極めてゐる、一切世に求むる所がなく賣らんとする氣が微塵もないそれが詩書に現はれてゐるから禪師の書に對すると其風格を髣髴することが出來る、但だ其書の氣格が餘りに高く俗衆に解し兼ねたが書聖懷素の壘を摩するの妙があつて禪師の歿後時が隔たれば隔たるほど其幽光を發して世の賞讃を博しつゝある、自分は往年我國諸名家の拓本法帖をしきりに蒐めて見たことがあ



るが禪師の書は一點も得ることの出來なかつたことを甚だ遺憾とした。而るに今は禪師と鄉土を同ふする反町氏が禪師の名品を精査し特に優品を選んで原紙大に刻してしきりに拓本を作り既に十數種の功を終るに至つた。氏は禪師の書に鑑識があるのみならず自から刻するの技能があり刻拓共に精を極めてゐるのを見て自分も感服してゐるが禪師を崇敬することと氏の如くにして好拓本を作り得るものと思ふ、氏は自分から禪師に舊緣ある備中圓通寺の石碑守りを以て任じてゐる人だ自拓の禪師の遺墨を世に頒たんと

良寛禪師像



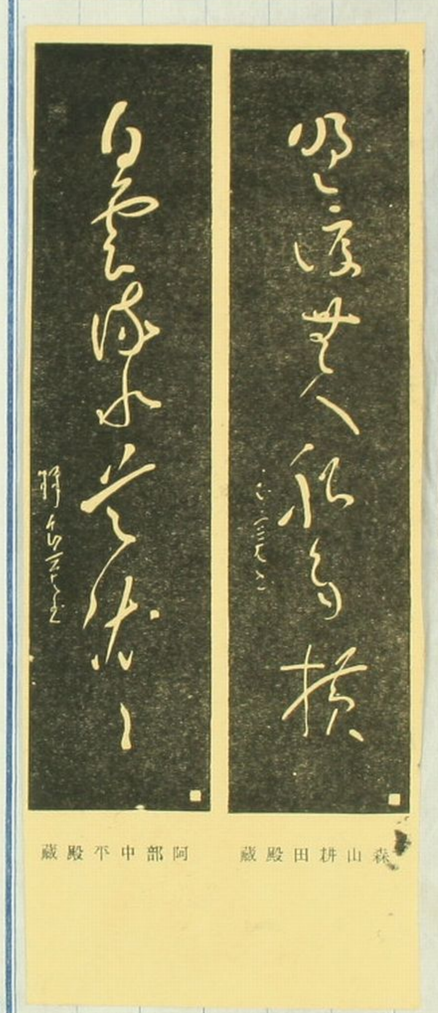
することを聽き躊躇なく世に推奬せんとする。

拓本發行に寄せて一言

京都洛寓舍にて　大宮　謙齋

反町榮吉君は新潟縣人にて、幼少の頃より良寛禪師の話や、書に就て親しむの機會が多かつた上、同君は禪師の敬慕者であり、且亦彫刻の技に長ぜらる今より六、七年前予が畏友田代亮介翁が全力を獻げて備中玉島圓通寺の庭園に良寛禪師修行の遺跡とし

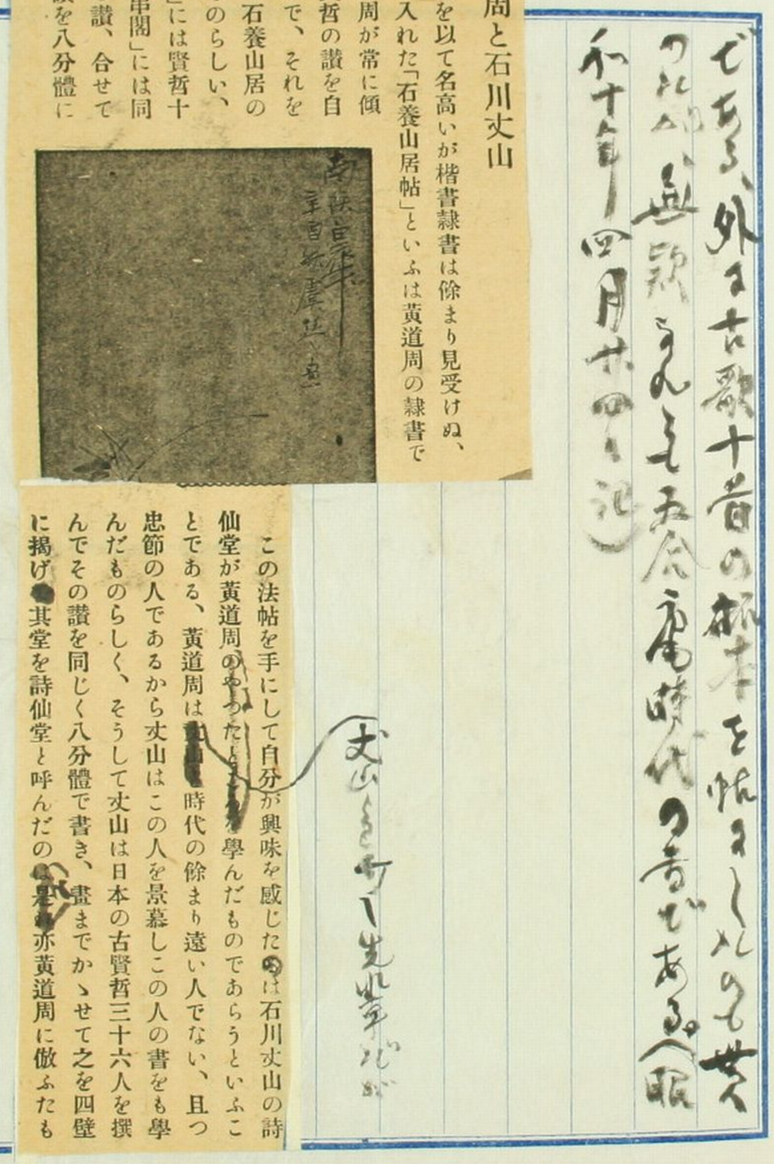
幅九寸　丈ケ三尺三寸五分　双幅



森山耕田殿蔵　　阿部中平殿蔵

黄道周と石川丈山

黄道周は草書を以て名高いが楷書隷書は餘まり見受けぬ、然るに近頃手に入れた「石養山居帖」といふは黄道周の隷書である、之は黄道周が常に傾慕して居る古賢哲の讃を自から書いたもので、それを自分の住所なる石養山居の壁上へ掲げたものらしい、それで「十朋軒」には賢哲十四人の讃、「九串閣」には同じく三十二人の讃、合せて四十六賢哲の讃を八分體に書いて居る。



この法帖を手にして自分が興味を感じたのは石川丈山の詩仙堂が黄道周のやうだとも學んだものであらうといふことである、黄道周は[illegible]時代の餘まり遠い人でない、且つ忠節の人であるから丈山はこの人を景慕しこの人の書をも學んだものらしく、そうして丈山は日本の古賢哲三十六人を撰んでその讃を同じく八分體で書き、畫までかゝせて之を四壁に掲げ[illegible]其堂を詩仙堂と呼んだの[illegible]亦黄道周に倣ふたも

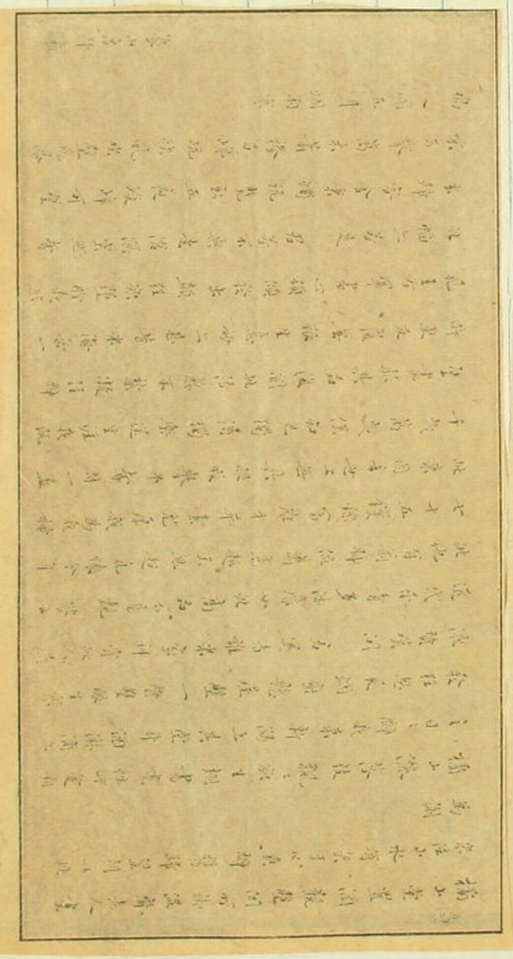
佐久間象山と石川侃齋

予が故郷に南畫をかき始めた人は石川侃齋である、この人の時代は早い、龜田鵬齋、釧雲泉と同時代であるその當時は加納家や四條派の流行時代である、その時に侃齋が南畫をやつたのであるから俗人の眼には入らぬ、後に至り南畫流行の世となつて茲に始めて侃齋の畫も下には置けぬと漸く人々の目を付くるところとなつたのである、

侃齋の閲歴は寺門靜軒の撰んだ碑文で明かであるが、名は元輅、通稱龍助、新潟の人で世襲の幕吏であつた、而して若い時分から宋元の畫を學び、

江戸へ出て長崎に遊び、大坂にては畫法を兼葭堂に問ひ、鄕にあつては詩文を鵬齋に學んだ、釧雲泉が越後に來た時は侃齋は自作の畫を携へて雲泉を訪ひ、それを示し且つ畫法を學ばんことを乞ふた、雲泉は輕々に許さざる人であつたが、是程の畫をかく人ならば友人として互に畫法を研究せんとまで推許し、且つ侃齋の畫は渲染の法に於て未だ盡さゞるところありとて指授するを惜まなかつた、時には雲泉は侃齋と合作などを試みるといふ風であつて、侃齋の畫は一層進境に入つたのであるが、七十七歳で歿した。

佐久間象山が嘗つて越後に遊んだことがある、その頃新潟に大倉勝庵といふ醫者があつて文人墨客を喜び常にこれを歡迎した、ソコで象山も亦橘山堂(大倉勝庵)の居を訪ひ酒の饗應に預かつたが、その時象山は床の間に掛けてあつた一幅の山水畫に痛く感服した、而してその筆者の侃齋といふ人であることや現にその人



は新潟に居ることなどを聞き、いよ〳〵その畫のほしさに堪へ切れなくなつて、象山竟に借りまへらせをやる、斯くて旅舍に歸り深更に至るまで畫幅に對して長篇の詩を作り、翌朝それを勝庵の許に贈つた、象山自筆のその長篇は今自分の手にあるが、象山は書を能くし六法にも通じた人である、斯くまで侃齋に傾倒した詩を作るに至つては、この一首侃齋をして九鼎大呂よりも重からしめた、この逸事は世人の餘まり知らぬところである、故に象山の詩を玆に掲ぐ。

橋山堂置酒。觀壁間所掛侃齋老人畫米法山水。有契于心。乘醉携歸。翌朝以此爲謝。

橋山灑落致。飄飄欲生翅。書畫性所愛。對之日日醉。我來新瀉上其屋壁。一瞥雙眼生寒液。贊嘆問君寫者誰。米家神骨此人得。近代丹青多淫靡。如此高品不易覯。答云此地有翁號侃齋。高致天然超凡懷。今年七十五。矍鑠富雄才。平素尤厚我。爲我掃此來。因言世上無具眼。毀譽與奪付一盃。千歲萬歲俟知己。獨得獨樂送生涯。我既望畫服其品。復聞此語感不禁。凝注醉眸更反覆。無限生意妙亦甚。昔米海岳一見右軍書。心頓傾發出顛狂欲墜舲。我於此幅亦若是。君若不與走滄溟。突然奪去歸客舍。秉燭玩覽到五夜。峻嶂可望不可攀。萬木蕭槮石巉屹。快風吹壁飛瀑鳴。人間五月烟雨寒。象山敬拜

橋原製

一の[illegible]

○貝合の本年の一月三日の放送高の嘴と赤び[illegible]味淡
[illegible]左義長の年中行事[illegible]一夕試みたが、又此共
日[illegible]苦しの[illegible]生々浜」とうの[illegible]び論浜を嘴さん
無雜心と謂し[illegible]自分も苦コンナ[illegible]び話を
するやうなまつたと思ふのと丸んなうこうも考を感じさ
るを得ない。貝合の[illegible]が寺小屋もかつてある家庭
教育の味はひもあるが、漢学塾の教育も[illegible]
又此苦しの教育とうくび次上が徳川時の教育の
形式を変るか[illegible]るが、[illegible]寺を今[illegible]
[illegible]若し無味を甚くうい[illegible]。[illegible]十年
西南戦争の[illegible]東京特大学の[illegible]

つれば進んで大学の入学の比率の学生生活の一端を決る
ものが藤井氏の武断の威風を慕つてゐるかもしれぬと思はれる
明治十年から十四年までとをくらべて可なり異つた所がある
様の学生生活を活き〳〵と今時の学制がうらやむ位
もつてゐた。其時の学校教育の今のやうな学制がうらやむ
有かたい〳〵学校をおしたのは、明治工部省の工学
寮がある。司法省の法律学校がある。陸軍の士官学校
の前身である農学校がある。やうに、銘々勝手な教育
をやつてゐる。各々に特色があるから出た人物も
特徴がある。四に殊に教育が自由で、校長も教師も
官吏でなくてもよいまで官吏のひとりかく自然に
学問の人物が出た。

教育制度が文部一統一方式の教授法を官吏と
なつたのは獨逸の型を倣はれたものであらうが官人の
子弟の子弟生が多く出て来る傾向の人と見るべき必定統
一制と官僚教育の然らしむる所であらう。一時は学生が
騒ぐばかりで一向学問はうつらず学生ばかりの
しかつたのは慶応の政府に教員と官僚とは別のものであらう
えるまで取締の行いに一得一失があり学生の
気風に影響を軟化して来たのは明治十年前後からである
お達の達風が加はつたのと、漢学の盛衰の
風も加いつて、学生の気風に別種の風
潮が革命後間もない時であるから学生は活潑の風
を持き活した武士の人物や国学と漢学に熱心な

こんなわけで、新文化(の人物の)居ける時、[illegible]から、その生れ変りで東京に忍ち将来の宰相たるべき資格のことを夢想したのであるが、拘今事実を現出した時代がかくて大体気宇が大きかつた。其代り豪放気宇アラヒである乱暴ひもあつた。

寄宿舎の新と旧新代かあつた。醜行ある上級生と親しかつた。級一同が服従せずして退学させられた。悪行ある学生を(罪)動機なくして退学せしめたこともあつた。

運動せしめ私刑を行つたこともあつた。幹事に生意気なことをいつて、学生が幹事の前で小便を垂んしたことがあつた。その後の学生が明中の幹事をどろぼう、いたれ法理とある教授のみを尊敬した。其代の立り教授の大学生の自者を奨励して行つた。完全大びらつた。学生に乱暴ひあつた。仲士学生体面を重んじ人格を重ずるやうなことを慎んだ。

(前頁に続き)

こんなの乱れ出すこと小年物あるものがアワリスつオードは立てしかつた時、日本の学生と法の乱暴状態を誇つた。彼等が市中の酒屋で悪戯をやつて金銭を踏み倒すこと、市中の酒屋が日で或る時のテーの大河の巷を焼いたり、泥酔した婦人を戯弄したりすること、ハリスの乱暴もやつた。保しプレジデントは記事を尊を法ふるものの反対もやつた。擬音を行つて昇文殺したのである。巷を焼いた時、消防署も大いに悔いも望和を栄け授の着手したことあり、乱校に入つたのるものの抵抗

市毛の子孫だなくらいこんなことも出来るが、日本でいい土産
ものだことだ。永井氏のとんちゃくこと笑ひの生
は、アンブロサクソン族であるから野蛮性とあきれて
居られたことがあつても、私ども信ずるに笑へてゐるひどく似
たことが英国にもあるた、笑ひ時代の学者達が不分
明井氏の説をつくりもあつたと笑つたことと憶ひ出す。
自分共の、アフを云ふ信仰と吉時の四枚子がなくなつたから、天
機を漏らすが最早四悪と相満先陰とうつて
もこの女心はなくなる。当時は全くの無邪気でもう人をつれて
旅行城の中御城士は市時時憲び肝油を飲んでゐるきい
様時行世の汁粉十二月を平げて居れを貰つてきたこと
がある。なるべくが他のも焼き入つてゐるもう健味あるから

くいつぶしやつ四谷の三河屋と四宮なをやの比時十二人の生徒
で五十人前の牛肉を平げたその日出席者のうちの七十
年輩の人であつた。一人で五人前ずつ食べるから、そのうち
いうまでもなく。此頃(明治四年)は思ひ出すが、ある人が書
生気質なるものいてゐる此下谷の某寺で十二時(午前)すぎで
飯文、表に出てみると午前の二時であるから、ちゃんと通行人
のかゝる家はみな牛肉屋をうのけつ
日本橋好生堂(行き)行きとなるとうけ行きとなるとうけ
こ上つたが、そうして夜が明けるまで行きとなるとうけ九郎
場内の不穏況の下の学生こ想のとうそん戦争前後も
ちゃんと眠り目を覚まして見ると、多くの人がなくなる
を知るとあるのを驚くことがある。

北陸の学生の金融策を語る一異話、隨分高利貸に借りたこともあるが、最も評判よく伝と称したのは、[illegible]
つた。その人は神社仏閣の約を果さいと気が済まぬ人で、[illegible]
返金と言ふ[illegible]。等自の[illegible]人に大きな[illegible]井ブスタ[illegible]
興ちとも[illegible]一つ持つ[illegible]の有[illegible]の間から二四位の牛肉代を借り
れるのだ。[illegible]ある時に友山四一[illegible]と品川[illegible]
こ飲んで喜義中が足りないので、山四へ自分もとこと尚めて金策
を[illegible]場へ戻つた。自分の内[illegible]山四[illegible]金策が出来[illegible]
不[illegible]だ足つたが、其内元[illegible]
出あるから、これの[illegible]
金の[illegible]ろとどうしても金融を同つれてゆくと、其方法
は[illegible]出うけて尚事を二[illegible]校の[illegible]

こまも、学の[illegible]金を[illegible]
[illegible]から三十四位の金[illegible]
中休[illegible]宅給の寝具[illegible]
のでいくらもあるが、つの出入[illegible]
七大臣[illegible]川番を[illegible]
つた。

五々の在校時代は給費の制度があつて月六四の支給を受け
ないで[illegible]費用を[illegible]後[illegible]分[illegible]一四を減し
て[illegible]分[illegible]支給を受けるは[illegible]
をやめ[illegible]二校で一四を支給することにのんだが、[illegible]
がつて其権利を抛擲してゆくことが多かつた。そこで金融策

分一ツ生んだ比、宴会あるごとに困るのと、方々の権利を奪られ集
めた味噌を何十枚も書く、勿論谷子の生が捺印のものを譲り
まるのだから、唯だ何んでも構いすなを列挙するまでし、それを今
計へ持参し、美くの詩求寺を出すと、今廿日位迄
云へすれ経料を渡すべしといふ事の
思ひがあるこ。アノ涙の大の字の寛大なるへしと。

以上のやうな意味の話を思ひ出すが、いろ〳〵あるが、大体話の
氏の書生氣質があるの話の書生を描したものである。あの字
宮の話が出た比時、文化教授の大本当福沢先生の機関
紙時事新報が若者を「雅癖」とつけ、大学の二年生
なる云いうしろものが、「我心なき」とか「新」
なるものを「ぞとうつれ

ばかりもいふ者をも泥棒ともいふ事人の
が泥棒をまるまるとの云のんきいと荷物を序つけれること
がありの話。それもまるでのいふ。それ程に書生
氣質を取味とすること、女人物の相手氣すい意が多く
もある。いつもや部屋の人の肝前が集社会俳優を宴
会席と称し、美と書生氣質の式を新会をやらせれ
ることがあつた。美は俳優の不城でもあつた女姿作者も
関係の人物も出席をみれの話が出演し方の似て似つかの
ものとなれと■ものく氣品が全く落ちるのが最も失
る面白味を感じることが■多つた。
要するに氏の話の出来と今の学生■とを比較すると可
きの相違がある。今の学生のおとなしくつて比較利巧

る場合は[illegible]

高山彦九郎の正像現はる

勤王の士高山彦九郎の正像が現れた、中學校教科書にも載つてゐた渡邊崋山雄の水戸市の老儒立原翠軒の正像が卅年來彦九郎の像と市で誤り傳へられてゐたのだ、それが名古屋在住の井手蕉雨氏が篤志七ヶ年間各種の文獻により研究の結果自信ある肖像が完成した、處でこの正像を高山精神即ち日本精神涵調のために國粋會を組織し全國小學校に配付する事となつた（寫眞（上）は井手蕉雨氏作高山彦九郎の正像と（下）今迄誤り傳へられてゐた渡邊崋山の筆翠軒の像）

優渥なる御言葉

司令長官に賜ふ

【海軍省發電】二十五日午前九時三十分比叡艦長發、二十四日皇帝陛下より高橋聯合艦隊司令長官に對して賜はりたる御言葉（譯文）左の通り

今回貴國ヲ訪問スルニ方リ途中貴聯合艦隊ノ艦上運動ヲ閲覽深ク愉快ト爲ス東京ニ到リテ後天皇陛下及ヒ政府ノ殷勤ナル御歡待ト書夜熱烈ナル歡迎ヲ受ケ眷深ク滿足シ感激ニ堪エス尚此

青年學生の夕

第二放送
七時十分

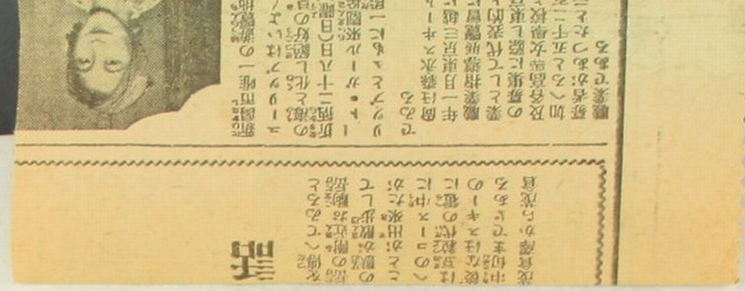
昔の學生生活

市島春城

市島氏は早大名譽理事にして古い東京大學の出身、書圖骨董の趣味廣く隨筆の著多し。

學校の出來る迄の漢學塾は勿論學校設立の當初も維新の影響をうけて塾生、學生、教師すべてが自由の氣に滿ちくて塾生や學生は未來に大きな希望を抱き明日にでも大臣になるといふ氣慨を示してゐた。又それだけにその行動は粗暴に亘ることもしばくで教師に反抗したり、市中で暴れたり色々な事を行つたものだがその半面に守るところには嚴格たる限度を持つてゐて禮をつくすべきところにはこれを怠らなかつた。私は塾生から學校創設當初の學生のそうした生活を具體的に面白く話したいと思ひます（寫眞は市島氏）

○極石庵竹内保平氏は直菴「茶道」と號られ
中れ往々紹介すべきことがある。
手洗鉢に就ては左のごとくである。
茶庭の中心素朴な手洗鉢がある、茶室に入る人が手洗鉢の前に
立つとまづ蹲踞をつくすべき
最初の所作として、まづ手あをつかうことである。
次に茶庭として手洗鉢に童謡を彼(豆)と上に
めてある南坊流のごとく童謡をとる者も
さうである
愛知県の亭主の如きその仕方は水を用ひ客
も初めての所作として手あをつかふ



和びたる光景と見て自分の吾妻の風に触れんが為の吾生の活き若しい美のあることを物語べて四谷生活人の参考に供する

○極石庭竹内保平氏は直著「茶道」を物られ中に仕立て絞り置くべきことがある。

手洗鉢に乾せん左のごとくである

茶庭の中で重宝なのは手洗鉢である、茶室に入る人が手洗鉢を見ひとすることとなる。茶も茶人は一と通り前に最初の所作として、まづ手あをつかひあらひ初めて茶庭とし手洗鉢に童蒙を使(用)を占めて南坊流のこと童蒙手とし者を設さなければならない

霞ひとすじ亭主の如のその仕あひあと(用)び客も初めての所作と手あをつかふ

こん霊地は、堺の大徳寺の一院、聚光院と号し、近頃、
人、互に世塵の穢れをすゝぐ為めの手水鉢也。
中古、堺の豪商、いとけなき頃、茶道を習ひ、昔、
法師を借しまうす時、奉行の一言、何のいんぐわ
を知らんや、心よろこび、客の目の前にて、
是を切り、入れたりとぞ云へり。
茶屋なりし主人が、切腹せんとする自らを、
みことの人に、知らせざる、非常なる儀礼と、敬意を
表する意味なり。
これは、予が妻を得たる一節なり。
千利休の遺愛の茶碗、三角が利休自刃
の片身を、えんを大切にし、軍旅の時

七日、堺を離さず、すること、えんを自家の
墓とし、古今の名人の墓のやうに、路中の塵と
なんぬるのがこれなり。墓の宗都大徳寺の寺相国
なり。これ、「杉向後三角家主居士」の法號が
刻まれたる、三角の利休が豊公の勘気を
受け自刃、まうすが、原因、豊公が、利休の
茶道を、自分の師とせんとのこと、北
政所の、心腹の、なりとぞ。
「此上」と、脇差で、心腹を、起こすこと、
こんを、大徳寺に、存したるが、利休の肖像、
描いたるもの、宗旦の男、名が、北の掛物、
十年の間、何も書かざる、無を標す、

別ち毎」が孫々思ひつき孫の奥方を設けられしもあるう。北国寒い雪毎の慰として義敦もあるが、雪毎いわゆる不味ものを食べるが先輩ものがどうしてもコンナ味をば一度は比べ居人の奥近のものも脱俗で方ある。

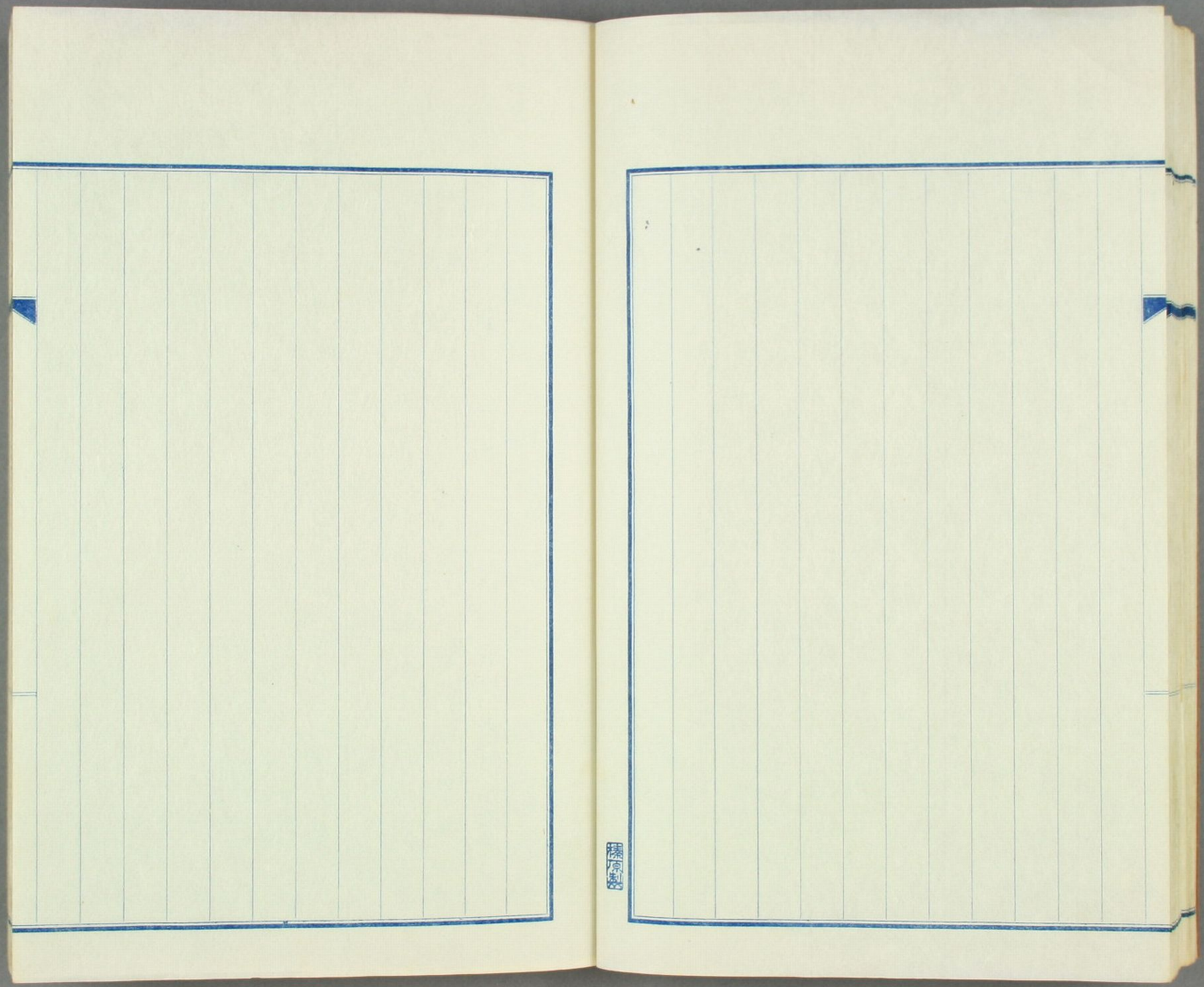
地位の高い気儘であっても、大体謙虚で多く拘泥せぬ所を捉すこと比較、あつたもの同志的なること、のんきい貴族の雅趣的庭園に入つて、銘々の借設してもみる者もあるが、多くは其人のもつ趣のものであつた。その中に、当時の名物の懐石料理のあるものが法外や地味で多くの人の中に北海の産中心料理の別と称味があつたり或ることく汚少新鮮で没頭し、或ることく無味寡味や義務や清潔をつき終に堂に入つたものもあつた。素朴な五月雨の毎日大きな笠を冠つて肩を怒らせ

歩兵隊等に出されたが、若干を高級が抜けて、国動揺でサーベルを抜き強故つて叱咤した。
中の方西洋小説を読み耽つの比冊乙馬鹿がおれ。
北時分校内を学生の国体が三四あつて互ひに非論を
繰つた比、中の方達弁の方の方が今考へること出
の方は弁舌い今を穀へつと無学問であつた銘々学
務を怠つて、やつと淡淡の真剣をした比、流石拙者
あの比の比の淡況の単独が今二三冊知つて居れしか
単独の国方論に対しあるる筆比が其の方の業者
い抵抗代日後生とされて面白比が、ある時の同宮合を
於て（無論業者が偉さうであるから）自分が席上で、
始末の淡況の考をやつと云ふ部分を所淡

1、幾哄笑を博したことがある。
北等り国体が互ひに抗することのうち、動もすると喧
嘩もやつたが、北の国体は同年級ひよんが多く一
同とうれのむちゃ。銘々の性格の異同と出身地方
などで、おのつから所属が両つに分れ、ぬうことうち関西
出身者の多かつた国体の他の宿舎と称するものが
関東側地方出の出身者は非常に少数で、二学業の後は
少四がハツキリして自然宿舎の国体の大部分
創立を共にした。
当時の教師と親しく聊か思出を語ること、山川健次郎
男は拘泥者の受持であつた。ちう人は謹厚の人であつ
たが、書生時代四五の日高と性格すること大きな差違

を出し五本流利を使はせて自分から面をしてサア飲めと云
はれるが恐縮したのでカテーと云ふ外四人の人身病地
を捨てて時を移さずやつて見せたのある時間
を出して人間が合ひ和を撰取してから排出するまでの経
路を云へと云ふのん獄し高田徐士の答がある時の問
答の通り出た。まへ聞る間答をもつて先つ合格を出す
んで遠で噛み碎き、それを咀嚼するを腸を入る、それから
あと腸を住まして終を肛門から排出すると考へれば
先生の云ふまへ通りの通りの腸を入つてからの住処
のかすー間答るとの通りかと実なんれこしがあつて
黒川真頼と云ふ人の源氏物語の講釈を聞て
ち戦やかい点を悉雲分釈ちく真面目を説かれ

れたのが板内の呼物とうつて、此り講義の時ちい事毎不の左中
まれも講堂を聴文を来れまであつた。悔士の死から閏三合の外
から取を見ずしてあるかの如く宮宝的に講したのが宝ち天
下一の呼びあつた。ち一程の講義で人を立てられる位天性を
が文章規範を講じれが点もするも未熟義を講釈
講を談したこともあつて文方が受けがよめつた。江木高義と云
ふ人が源氏物語講釈を聞いて軌を
おして[illegible]自家の政治論を演説したがんかなきまで
つた。



○唐[illegible]勤王家[illegible]文[illegible]若[illegible]菜山集[illegible]
[illegible]菜山子[illegible]者[illegible]余[illegible]者[illegible]今[illegible]乃[illegible]
[illegible]

菜山子傳

菜山子者、[illegible]人也、其先則葉人、善張疑兵劫敵北保氏之圍柳公金別山、葉人、卒其族、被甲、衣外城下、城兵從其後、盡殺賊立石金人、柳氏既微、葉人久不用於世、赤松氏之叛宝可、據白旗山之險、遂滅赤松氏、其後或用於戰國、其隱歌歌者、乃為菜山子、菜山子、不甲、不仗、戴笠、穿蓑、恂恂如農人之狀、時天下既平、相走方勸農

菜、而戶口歲減、荒墟廢邱、皆鞏鄰、而獨甚烏獸之害禾黍也、則詩菜山子、菜山子、性固喜弧弓挾矢、是以善為民威烏獸、烏獸無敢近民田民皆大喜曰、菜山子之能勝鳴子、鳴子者、世不知其名氏、但以其鳴號驅鳥雀故稱焉、然鳴子派有所憑恃、無以鳴號、鳴號派有所山子、菜山子能作人、[illegible]人[illegible]雖汚淖深泥人所惡、無不奔而往、果未敢、深淵之表、皆所不辭、[illegible]雷霆霹靂、衆皆失色而菜山子獨瓦然不移也、余嘗過菜山子于野矣、菜山子、野服[illegible]、挾矢于四間、有古農夫之貴風也、因謂菜山子曰、以武勇世、而今武時矣、吾觀世所

閑甲斐之曾素、麻衣而素養、不復知世農之艱何哉、
嗟乎、此等あまの子之風、宜愧死、而世反安之、以為南
然、而栗山子猶不立於世、世亦以是易之也、然栗山子
竟默而不言云、

○茶乃「の香」の香りこと云し

井伊大老の茶を好まること一生一代と心得たることあるい
武士の新神と此を用ひ、弓を射る時、矢い一本し
かなきものと思ふ、日一日、一本の矢に全
力を新心めとなるが弓道の極意ひあると日し
こと也、

默茶と一味を為す時、眠を催ること、移さめことを香
一とすること一味に徹底せざることひある。湯を沸

もとさい湯に徹底し、炭をつがば炭に徹底し、
茶をたてる時は默することに徹底するこ
とめ、其の他のことの心も皆此ことひあるこ、一心
不乱と云ふことなるが、
其の心持と客の心持がピッタリ振合するが肝
要ひあるの碧巌録に南山北山下雨と
言の様がある、主客の振合の必要なる振合べき
なり、

宇治の上林弗庵が利休を招き夜会を催したる
其の姿しさの新り、手えるへて茶物は八棗
から廣き茶筅に廣き物は、えを立しも
七ぶ、蹲きを利休の前と茶筅をそし出した。

利休の人々に与える目と相と天命とこれを失敗と
又は利休の流儀まのんとそなわる。
日本一のお手前式、さてもえ抵でこさつれと
謂へり。
手の振いれのび心をこめれことがてうる、性れ心の駆いれ
のい道道の人びそうれこうれ
茶席の狭い躙り口を乗てそうれ。
この国の内の別世界び海浪界、眺す、武つ倍
の具を捨さも、履脱れて房みこの入口手を付る
形の貴賤倍倍の差あるそ、別世界く生ん出る
形そて侯、この口のせまきの人倫の田の脱角そも出る
関うて世俗分未の部恐を侯ち、生ん出る心を

以つてそうそと
実生活を於てもにり口があうて往く歌をおうことも
この自由彼手の実生活を許さそいことを思うと
四畳半そうれ人口そうそ深い宮寺があるそうも思えん。
石の侯味と就て云く
石そい程その閑寂と結法と静かさと、こんま体ん
神秘性が高そ、冷氏とも感情を表現しそいけん
そも法動ひあそ、そこそこそ一行の孤味がある。法動
ひあのそーかも法動ーそうの所れ孤味と美味の根
拠をもつてみる、而るお打ん凡ゆさらさん、太閤
の焼ん物そ永久と寂氏そうそ侯る、孤家ひハ生
稽の例そん石を置くことがある、寂氏なる無心

の花れいやかんぶ春のひかり
花の飾りかるく、ちるこうまつ。人工が加へられる。
い。天然そのものである。一分も何物の低徊かなしい。
いつまでもいつまでもといふこの形容、未来永劫と約束し
たもの、一抱の花れ無限の生命が有つてゐる
左の歌は私も初めて知つた所である
元代特産 宋代が有る年の末頃霜山と名乗つた
清盛つる橋花と兵衛といふ寵愛が特産と称
する金屏風を飾り、桃花の香を焚いたもの
が特産の品番と称(とな)る。そこに特産は紅者を金
名香を焚するこの特産は楊貴妃
他人から焚つた香と薫も聞かすと、弁疏(べんそ)した

シユバレのこと

シユバレといふのは、瓢箪形をした一種のおさるであつて、馬に跨るやうにして用をたす處から出た言葉である。

日本から始めて來た人は、一瞥、これは何に使用するものだらうか、と不審に思はない人はないのである。

訊いて見て、始めて、『いやあ、さうかあはツは……』てなことになるのである。

ホテルならば大低湯殿に（それも便所と一緒に）設置されてある。普通湯殿のない家でも寢室には必らず置かれてある要は一件を洗ふ爲のものなんである。

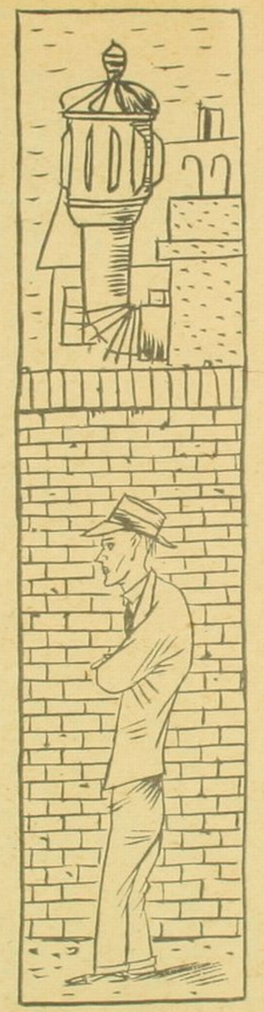
一件……といふことだけを考へると、いやに何か、こう、變に思はれるが、それは別にして、餘り風呂に入らない代りに、毎晩、身體の上下をふく、と、その中間の部分をよく洗ひたくなるのは必然の理である。と同時に兩足もよく洗ふのである。指と指との間に魚の

市京橋區寶町一丁目
味の素ビルディング八階
電話 京橋(56) 二三四六番(御客様用)
六四六六番(事務専用)

市北區中之島三丁目
朝日ビル十階
電話 本局四五〇〇番

市東區三丁目四五
電話 本局二九一八番 二九一九番

北海の北京の西洋旅館
で知つたのである。今
日まで其名を知らな
人々からこゝに切り
ぬきを残しておく。



探偵小説の筋を實地に

數萬圓を詐取した大嘘つき男

山村長男

一

「……で、つまり、どうも野におちぬところがあるものですから、ごく内密で調査して戴いたらと思ふのです。まあ考へておかうと二應ことわつたところ、中井が去つて三十分も經たぬころ、當時京都に滯在中だつた三井男爵から電話がかかつて、中井君の紹介で、六萬圓の詐取被害者ところが懷中無一文といふのんきさで、およそ金の匂ひなどどこを探いても出て來なかつた。

すゝめるので、まあ考へておかうと二應ことわつたところ、中井が去つて三十分も經たぬころ、當時京都に滯在中だつた三井男爵から電話がかかつて、中井君の紹介で、六萬圓の詐取被害者ところが懷中無一文といふのんきさで、およそ金の匂ひなどどこを探いても出て來なかつた。

「……で、つまり、どうも野におちぬところがあるものですから、ごく内密で調査して戴いたらと思ふのです。まあ考へておかうと二應ことわつたところ、中井が去つて三十分も經たぬころ、當時京都に滯在中だつた三井男爵から電話がかかつて、中井君の紹介で、六萬圓の詐取被害者ところが懷中無一文といふのんきさで、およそ金の匂ひなどどこを探いても出て來なかつた。

トニン原料で時價三千五拆紙をつけられた。

ところが間もなくこれといふことが判り大阪地方裁判所で無罪となつたためいろ〳〵奔走した三井高精男や貴族院議員次氏らが援助してくれるり、正常な手續きを踏んだ一流の製藥會社エイチゲル商會に實習する約束で現在名古屋の三井物産會社にされてゐる。ついては、專門家を捜してゐたのでにも君に逢つたので一緒にらひたい、但し、その報酬は君の名譽に賣製約書は君の名譽に

——といふのだつた。

六千圓が三千五萬圓に中井は身内をそく〳〵立ちどころに承諾した。

「だが、これはよほど

ごまかした手腕は凄いんもんだぜ君のその大膽さを見込んでひとつ相談があるんだがどうだ、君は確か藥劑師の中井君だらう」

「……」

藤原製紙

春城會遠征記

紫安新九郎

……春城會は春城先生市島謙吉翁の生誕を記念し、翁を壽ぐために毎年その生誕の日に開かれる會で、翁の還曆より始まつて七十六の今日に及んでゐる、その會員には政治家あり、醫師あり、新聞記者あり、學校職員あり、會社重役あり、縣議士あり、いづれも翁の管轄を被つたものである。

いつも市内の旗亭で毎會その場所を換へて開かれるのであるが、本年は幹事が趣向を凝へて熱海に遠征することになつた。

春城翁の青春時代より今日まで辿り來つた跡を見ると、隨分さまざまの經歷を有つてゐる、帝大に學び、改進黨に入り、憲度か帝國議會に出でゝ一方の領袖となり、讀賣新聞主筆になりその間に郷國越後において、筆禍のために罰錢の辱めを受けたこともある、また他の一面、大隈老侯の知遇を得て早稻田の創立にも參加した、この時代の翁は二足の草鞋を穿いてゐた。

その後半生はフツつと政界を思ひ切りて、一身を早稻田に投じて轟々ならぬ苦勞をなした、早稻田の今日あるは、老侯はもとよりのこと、高田先生等の一代の心血を瀝がれたるに胚胎することはいふまでもなきことであるが、翁の致せる功績もまた少からずである。翁は最近十年間ほどは、明窓淨几、博鼎を側にして隨筆を認むることを日課のやうにしてゐる、翁の隨筆の單行本として世に出でたるものは少くないが、最も世に喧傳せられたものは「隨筆鄰山陽」である。

翁が山陽に就て、造詣深く恩愛多からしめたものは、翁の傾向がかくあらしめたるものならんも、また一には山陽の氣魄を受け文藻にも富んだ三樹三郎の兄、支峰は翁の郷里、水原に行きて三四年學徒を教授した、翁の乃父もまたその門下であり、支峰も翁の家に泊つたことがあつたといふやうなことも緣因をなしたであらう。

翁は如何にも多方多面の趣味家であるとともに、縹渺たる詩人的風懷の極めて豐かなる人である、二十年前に百水一滴と題して水の趣を百則書いたこともあり、また翁の無二の伴侶たる酒についても酒趣百則を認めたこともある、翁が菅市河米庵が名筆百種を蒐めて筆譜を出版した跡を逐うて、筆の蒐集に三四年沒頭し、筆管に重きを置き筆管に施された意匠や筆管に用ひられてゐる種々の材料を本位とし、この方面にとれほど工藝美術があるかを檢討せんと試みたこともある。

翁は印學にも精通し、龍文鳳篆の古印類を多く極てゐる、磁杯を藏することも幾百、袖珍本を聚むる二千餘種、小は寸に盈たず、大も三寸に過ぎず、驚人で詩人として名高かりし越後の坂口五峰が濱村蕉六を伴うて來訪したときに、藏書印を語り合ひ「全體支那の例で藏書印に子孫これを寶とせよと、おきまりの文句があるものだが、自分にはどうも感心しない、いかに寶とせよと敎へたところで、子孫その人を得ぬときは何にもならぬ、そこでむしろこれを貴つてある。

一杯の酒に代へるを欲するならば、賣るもまた妨げずといふ意味で一つ簡明な語を選んでほしい」とて藏書印に「得其人傳不必於子孫」を刻して貰ひ、後に考へ直して、さらに進んで今少し露骨に何か面白い語はないかと五峰に相談したのに、五峰は「子孫樸直赤可」の六字を選んだ、これは面白いと自分も滿足したといふ挿話も傳へられてゐる、また翁の風格の一面を察すべきである。

○

さて二月十七日の朝、春城會の一行二十數名は東京驛に集合し、翁を擁して赤切符で三島めざしてでかけた、車中では翁の好事の趣味に欲し且つ敵愾してゐると思はれる色々の話で、時の移るを知らず、更に倦怠を覺えなかつた、三島に着くや二行はバスに分乘して三島神社に參拜、境内の茶店に憩ひ、こゝで東京より持つて來た銘酒を開きビールの杯を擧げた、關魚川氏の朝鮮に移住する挨拶あり、次で翁の丹那トンネルに關する講演があつた、翁からかやうの講演を聽くことは意外であるといふ感じが、いづれもの顏色に露はれた、翁はいふ、自分が丹那トンネルに關心を有つに至つたのは、毎年正月に熱海に行くことが私の年中行事の一つで、行けば坪内逍遙博士の雙柿舍を訪ふのが常例である、博士の所にはよく泊り、二階の書齋に寢るのであるが、夜更けて丹那トンネルを掘鑿した土砂を運搬する音を聞いてからであると。

一行は三島より引き返して熱海に着いた、逍遙博士を雙柿舍に訪ふ豫定なりしも、博士病臥のために遂に實現し、つい先頃まで極口稱讃であつた熱海第一の旅樓聚樂に這入つた、自分は大江乙藤門君を伴うて來客に謁した、同席に三浦觀樹將軍の詩碑がある、

鳥跡蟹蹤八十春
梅華東風我白頭新。
江村日出光風暖。
一路追憶養正壯觀

是詩觀樹先生乙丑元日詩、先生春年、閑居於熱海、所交無貴賤貧富少長之別、交誼藹然、盡懷眼三而已、及其捐三館舍、鄉紳故舊、胥議立碑、以寓景仰之意云、

先生姓三浦、名有樓、觀樹其別號

木堂　犬養　毅書

この詩碑は昭和五年七月に建てた、木堂翁の書でこれほどの大文字を見ることは始めである

筆者

が如何にも見事である、これは觀樹將軍の詩碑であるとともにこれに揮毫した木堂翁のためにも併せて好箇の記念碑であるやうな心地もした。

觀樹將軍といへば、一輝も二輝もあつた老將軍で、伊藤公亡き後の山縣公の元老としての勢威亟びなき時にも、將軍は公に對しても國政について思ふ所を面を侵してガミ〳〵といひ、また軍政を常道に走らせるためには、原敬、加藤高明、犬養毅の三黨首を小石川のその邸に會合せしめたことなどもあり、確かに世の驚嘆であつた、今の世は智專者擅ひ利巧者擅ひで、將軍のやうなケタ外れの人のないことは寂びしい、梅林を觀いて見る積りであつたが、道を間違つたので見合せ、聚樂に歸つた一行は三層樓の廣間に跪坐して、揮毫、圍碁、雜談にふけつてゐた時來り開宴、昨春、この會が上野櫻谷の圖原で開かれたときに翁のスグ隣に坐つた、翁の滿足を買ふつもりで、下戸の自分が勇めて翁の杯を受けてみたところ、翁はだん〳〵悅に入つて「今晩の邂逅は君が根當に飲けることだ」とさかんに杯を持つた手を自分の前に差出される、時移りて一座のお膳はみな退けられて、翁と自分だけのが殘つてゐる、會の人々も翁を殘して去りあへず、四五人が翁を圍んでゐる、夜も更けた、翁は飄歩隣圃で歸つた、酔つてゐられるのを氣づかひ、誘かお送りするがよいと石塚三郎君がその邊に當つた、この酒趣に群易した生々しい經驗があるので、翁の近くに坐ることを恐れたが、また翁の右側に据ゑられた。

○

翁はいふ、「逍遙博士の病氣は心臓に堪へない、博士故離なかりせば、今夕の宴に出て來たであらう」と、思ひ起すと、明治四十四年六月、文藝國會公演の監督として東儀鐵笛一座を率ゐて大阪に來られたとき、微力を致したのを德として、博士は小屋を訪れられた、自分はこの文豪の足跡をわが邸内に印したことを今もなほ光榮に感じてゐる。

誰やらが逍遙博士の雙柿舍は原根の四端には銅鐸が吊されてあつて、塔の出來損ひのやうな建物ではないかといせた、翁は如何にもその通りである、自分も嘗てこの寺の山號は何んといふのかと博士を揶揄したこともある、アレで丘陵地帶に聳まれ飄る眺望に富み、巨大なる雙柿が二樹相亟んで四季さま〳〵の趣を呈してゐる、

翁は座談に機鋒を向ひ、妙を究め常茶飯的なる時は從容として活きとする、恰も柿木ずる趣きがあつた、

ゾからに集まつた中心となり哲談に、議論自出品の稱賛酒に興じ理には一口の飯も食はず、りと聞くと、かにも不

委員を呈して博士と雙柿舍折に、博士は病この書齋を見だらうと評しはその通りだ席に筆を採つ骨董にまか

そさかし眞れ

さかし人の

は書庫のか

す

の二首を示し和三年の冬、陛下がこの書を是非意があつたの申上げた、そ

あの名作が生せられたと

ふ「雙柿舍は早大に寄贈る」と。

春城翁の

關する快談は

仰くに湧いて

翁の座談に

橋本製

紫安新九郎

一杯の酒に代へるを欲するならば、賣るもまた如何ずといふ意味で一つ面白い話を選んでほしい」とて藍書房に「得其人傳不必於子孫」を刺して貰ひ、後に考へ直して、さらに進んで今少し驚倒に何か面白い話はないかと五崎に相談したのに、五崎は「子孫捻濟赤可」の六字を選んだ、これは面白いと自分も滿足したといふ笑話も傳へられてゐる、また翁の風格の一面を察すべきである。

○

さて二月十七日の朝、春城會の一行二十數名は東京驛に集合し、翁を擁して赤切符で三島めざしてでかけた、車中では翁の好事の趣味に感じ且つ敬服してゐると思はれる色々の話で、時の移るを知らず、更に倦怠を覺えなかつた、三島に着くや一行はバスに分乘して三島神社に參拜、境内の茶店に憩ひ、こゝで東京より持つて來た饗宴を開きビールの杯を擧げた、關魚川氏の刺鮮に移住する挨拶あり、次で翁の丹那トンネルに關する講演があつた、翁からかやうの講演を聽くことは意外であるといふ感じが、いづれも興味に富はれた、翁はいふ、自分が丹那トンネルに關心を有つに至つたのは、毎年正月二熱海に行くことが私の年中行事の一つで、行けば坪内逍遙博士の寄宿舎を訪ふのが常例である、博士の所にはよく泊り、二階の書齋に寢るのであるが、夜更けて丹那トンネルを掘鑿した土砂を運搬する音を聞いてからである。

一行は三島より引き返して熱海に着いた、逍遙博士を寄宿舎に訪ふ豫定なりしも、博士病臥のために遠慮し、つい先頃まで德口藏相であつた熱海第一の旅館樂樂に直入つた、自分は大江乙衛門君を伴うて來之宮に詣でた、神殿に三浦觀樹將軍の詩碑がある、

島旅鶴齡八十春
梅華奥我白頭新、
江村日出光風暖、
一路追驚養壽仙

是等觀樹先生乙丑元日詩、先生暮年、閑言閑於熱海、所交無貴賤貧富少長之別、一交膝談笑、盡三觀樹、而已、及其捐館、會名鄉紳故舊、賀議立碑、以寓景仰之意云、

先生姓三浦、名根樣、觀樹其別號

木堂　犬養　毅　書

この詩碑は昭和五年七月に建てた、木堂翁の書でこれほどの大文字を見ることは始めてであるが如何にも見事である、これは觀樹將軍の詩碑であるとともにこれに揮毫した木堂翁のためにも併せて好箇の記念碑であるやうな心地もした。

筆者

觀樹將軍といへば、一騎も二騎もあつた名將軍で、伊藤公亡き後の山縣公の元老としての勢威面ひなき時にも、將軍は公に對しても國政について思ふ所を面を侵してガミ〳〵といひ、また國政を常道に起たせるためには、原敬、加藤高明、犬養毅の三巨首を小石川のその邸に會合せしめたことなどもあり、確かに世の聽であつた、今の世は普專者擯ひ秘坊者擯ひで、將軍のやうなケタ外れの人のないことは寂しい、樹林を觀じて見る積りであつたが、道に間違つたので見合せ、專樂に歸つた一行は三層樓の旅館に陣取つて、揮毫、圍碁、懇談に耽つてゐた時來りて關寛、昨春、この會が上野寛谷の觀原で開かれたときに翁のスグ隣に坐つた、翁の觀足を買ふもりで、下戸の自分が勧めて翁の杯を受けてゐたところ、翁はだん〳〵悦に入つて「今晩の殺見は君が相當に飲けることだ」とさかんに杯を持つた手を自分の前に差出される、時移りて一座のお膳はみな退げられて、翁と自分だけのが殘つてゐる、會の人々も翁を殘して去りあへず、四五人が翁を圍んでゐる、夜も更けた、翁は酩歩蹣跚で歸つた、酔つてゐられるのを氣づかひ、誰かお送りするがよいと石塚三郎君がその選に當つた、この酒縁に群易した生々しい經驗があるので、翁の近くに坐ることを恐れたが、また翁の右側に据ゑられた。

○

翁はいふ、「逍遙博士の房氣は心猛に堪へない、博士故歸なかりせば、今夕の宴に出て來たであらう」と、思ひ起すと、明治四十四年六月、文學協會公演の監督として東京劇場一座を率ゐて大阪に來られたとき、微力を盡したのを幸として、博士は小屋を訪れられた、自分はこの文豪の足跡をわが邸内に取したことを今もなほ光榮に感じてゐる。

誰やらが逍遙博士の柿舍は屋根の四隅には鍾馗が附されてあつて、塔の出來損ひのやうな雜物ではないかといふと、翁はいふ、自分も曾てこの寺の山號は房ムといふのかと博士を揶揄したこともある、アレで正隅鍾馗に囲まれ觀る眺望に富み、巨大なる柿が二樹相並んで四季さま〴〵の委態を呈してゐる、曾て自分と博士と變柿舍の書齋に對座したが折に、博士は通りがゝりの人がこの書齋を見て、アレは納骨堂だらうと評したのに對し、博士はその通りだといふたとて、閲席に筆を採つて、

彷彿にまかふを人なあやしみ
そさかし眞魂のおくつきは是れ

さかし人の心の廟といふたれは書庫のかゝりを阿闍若に似す

の二首を示したこともある、昭和三年の冬、久邇大將宮と同妃殿下がこの地に御成の砌、この書齋を是非一覽したいとの御意があつたので、博士は御案内申上げた、そのをり、こゝからあの名作が生るゝであらうと仰せられたと承ると、さらにいふ「變柿舍は博士夫妻百年の後は早大に寄附することになつてゐる」と。

春城翁の風流にわたり興味に關する快談は、浪々として泉の如くに湧いてくる、内田魯庵は翁の座談に聽ていふたことがある。

翁は座談の雄、圓轉滑脱の中に機鋒を藏し聽者を擒縦する妙を究む……如何に平凡の家常茶飯的話柄も翁の口頭に上る時は忽ち興味を生じて活きとする、翁の座中に在るや恰も枯木花咲き三冬暖氣を生ずる趣きがあるので、群客自づからに乘付られて翁の周圍に集まり、翁は常に座談の中心となる、圓滑にして俊爽、侠談にして辛辣、機智縱橫、議論自出、翁の座談は天下一品の稱がある。

酒に興を感じてゐる翁は、料理には一品も箸を付けず、一盃の酒も食はぬ、酒に斯樣の人あり と聞くも、下戸より見ると、いかにも不思議である、酒は健かに翁の生命であると評してよい翁が日夕筆を隨筆に執り胸間の塊興を吹くのも一つは酒の力と見てもよからう。

○

興酣なるや、座中の石塚三郎君は起つて左の詩を朗吟した

春城會席上、懷柳北有感、
作、象潟津王人、

豆山樂樂世評高、氣象萬千盛欲豪、把二杯酬柳叟、海風月下撥銀濤。

石塚君は本職は會科醫で、酒詩と筆札に堪能である、曾ては議員に出た、濱口雄幸氏傳相たるの日、夫人の會稿を名高き某博士が手寄をなしたところ、病みは增し顔は彫れ上り、大驚ぎとなつた、そのときに石塚君が彈け付けてことなきを得た逸話の持主である、同人間で石塚君の手寄を受けたものは少くないが、いづれも君は會科醫としては稀有の人として推敬してゐる、君は樣年醫學界の泰斗として名聲を世界に驚せ、一九二八年黄熱病の病原發見のためイギリスの領土で一番の不健康地として恐れられてゐるアフリカに遠征しその研究の犧牲となるや、ニューヨークの北郊ウッドロンの墳墓に「その努力は科學に捧げ盡された人類のために生ける彼は人類のために死せり」と題せられたる野口英世氏と等しき經歴を有つてゐる、野口氏が明治二十九年巷北の片山里より東京に出で來り我國會科の元老高山紀齋翁の芝伊豆子の高山會科醫學院に月給四圓の給事として働いてゐた豊臣守之助氏を頼り行き、書生たらんことを願んだのであるが、院長の許さぬのを豊臣氏の計らひで、學院の寄宿舎に隠れ忍ばしめ、いつとはなしに、公然とこの學院の女關で時間の鐘を鳴らしたり、伴世樣驗や便所の掃除などやつて、學費として働きつゝ、豊臣氏より月二圓の小遣錢を分けて貰ひ、この伊豆子町にゐたエリザ・ケアベン夫人といふドイツ語の教授をやつてゐる人の許に夜學に通つてゐた時に、石塚君は春城翁の紹介で學院の寄付業會計となつたが、君と野口氏とはいつとはなく意氣相投じて遂に親類の友となつた、それより若風秋雨、幾年の後に君は長崎市において會科醫として成功し故郷に無聊した。

次で坂口藏吉氏（五峰翁の息）は緊急動議ありと叫んで起ち上つた。

この剛先生のお話を聞けるは、もはやもよしこの樂樂の會員者加藤君は私と同郷で多年の交友であり、且つ春城先生とも面識ある間柄であるから、加藤君の諒解を得て成島柳北の恩出の碑をここの庭前に建て柳北の爲に風流の事蹟を殘したいのである、その方法は春城會がこれを發起するとであると、一座忽ち賛成し即席に成れる滑稽なる趣意書に發起人として署名した。

かくて翁とゝもに宿泊するもの四、五人を酒瓶に殘したまゝ一行はその夜歸京した。

春城會の熱海に遠征し間もなく世界的文豪たる逍遙博士は永眠せられた、博士葬儀の青山會場において、春城先生の面やつれた痛々しい光景を餘所ながらに眺めて、六十年にわたる老友を亡うて、如何に寂寞を感ぜられてゐるかを想像せられた。

昔より熱海の地に祝を與く文人騒客は多いのであるが、眞に熱海を世に紹介した人は、蘭學時代に成島柳北あり、なかごろ尾崎紅葉あり、近くは坪内逍遙ありといはれてゐる、この逍遙先生が今夕の資翁たる春城先生と春ての會談に、柳北は熱海の町の大なる功勞者であるに拘らず、これを記念する何ものもないのは遺憾である、それについて自分遠に一つの考へがある、柳北は人も知る長頭馬面の人であつたから、こゝに一つ長い顔鏡に勢能たる石を求めて碑となし、極めてユーモラスに彼を記念することはいかに、そしてその記念碑は柳北が當時愛好したこの樂樂の庭園が昔ながらの俤があるからソコが宜しからう、さすれば熱海にまた一つの名所が增すであらうと

目　録　選

一奥ヵ所あり。

○拙著庭作の研究、余の既刊随筆中、日本紙味と関する記事を編集し、健文社より出版せんとし、余に選擇を請へり。即ち関係ある諸冊の既刊随筆中、目録を作り、目録を作ること左の如し。配合之れを尚考慮を経さる（五月九日）

（五月六日の記）

茶

寺川

日本趣味の淵源

茶人の趣味教育

自然を愛する日本人の趣味

自然を愛する日本人

茶人の心境

玩香

作庭藝術

○石を張る

包装と製紙

寺[illegible]

紙

詩趣

塔

雨の詩趣

銭湯

俊徳寺の鐘

蕪と詩

松の風趣

竹の漫波

梅

公園

芸術

東西芸術の未来

書画漫筆 金堂文学の信仰

書と手紙

民衆芸術

名匠如流

含蓄の詩趣

聯想の妙味

光琳研究
草紙
錦絵の創始と浮世
版木業者の行末
版木と其材料
こびんとする木版刷

風景美
日本山水美の認識
白雪金閣探検記
白毫寺と木曾川の奇観
十和田湖と渓谷美
月瀬紀
伊賀山水紀
光悦の遺址巡
俵屋旅館紀
素盞嗚尊紀
雪月花
風景と吾輩

雜題

田園趣味

農村隠者

黒山子

露地生活

利 考

手拭とかこれら

女世帯

扇子

月義長

仰出制限

日本新聞

梅干 花瓶

外人と日本の女性を淡く

○閑居は生の旅なり川柳
柳ちるも、おもしろく感ずるものを矢絮なる
ほす

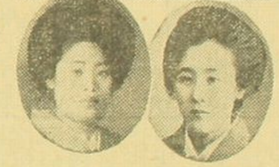
飾ることも後ろの見ぬ晩こそ
木がくれて茶の家の懸こそ芭蕉
松風と共は浮世の懸こそ文子
童五の句おもしろくよるべ
うんしきは芭蕉あかくん桜の一つ松岡
うんの蹴花蕉芭蕉の裏
山門を出れば日本ぞ茶摘唄　女俳人　菊余
宇治茶の藥山の新緑を見ん文部の奇
院のかく共焼は天ぷんの日ちるとも思ひこの

第三種郵便物認可　昭和十年五月十日

四國の小泉八雲

遺著を飜譯の企て

モラエス氏
追慕の七周忌



殉愛の最期

徳島市に住居すること十七年、日本に關する著述をなすこと十六に及んだが、いづれもポルトガル語で記述されたため世に知られなかつた文豪ウエンセスラウ・デ・モラエス氏の偉大さが判明し徳島縣當局ではこの小泉八雲にも比肩すべき親日文豪を埋もらしておくのは余りにも申譯ない、と、戸塚知事が昨會中の地方長官會議に上京を機會に、外務省關係文化事業部にモラエス氏の著書の飜譯を交渉し、遺本徳島縣學務部長は來る七月一日がモラエス氏の七周忌にあたるので前で追懐會を催し故人を偲ぶため追悼會を催しパンフレットを印刷配布する計畫を進めてゐる【寫眞はモラエス氏とよね女(右)とコハルさん】

×

【徳島電話】親日文豪モラエス氏は一八五四年五月、リスボン市に生れ、のころ王立海軍大學を卒業し海軍中佐となり、砲艦隊司令官となりシンガポール、マカオ港長、駐東京領事となつて一九〇〇年神戸駐在領事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

昭和十年五月十日　第三種郵便物認可

四國の小泉八雲

遺著を飜譯の企て

モラエス氏追慕の七周忌

殉愛の最期

徳島市に住居すること十七年、日本に關する著述をなすこと十六に及んだが、いづれもポルトガル語で記述されたため世に知られなかつた文豪ウエンセスラウ・デ・モラエス氏の偉大さが判明し徳島縣當局ではこの小泉八雲にも比肩すべき親日文豪を迎もらしておくのは余りにも申譯ないと、戸塚知事が開會中の地方長官會議に上京を機會に、外務省國際文化事業部にモラエス氏の著書の翻譯を交渉し、澤本徳島縣學務部長は來る七月一日がモラエス氏の七周忌にあたるので墓前で追懐會を催しパンフレットを印刷配布する計畫を進めてゐる【寫眞はモラエス氏とよね女(右)とコハルさん】

×

【徳島電話】 嘱れた親日文豪モラエス氏は一八五四年五月ポルトガル、リスボン市に生れ二十一、二歳のころ王立海軍大學を卒業して海軍中佐となり、獨逸デジョーの司令官となりシンガポールに回航しマカオ港長、駐東洋總領事を經て一九〇〇年神戸駐在領事となり、外交官として重きをなしてゐた

一九一〇年ごろ退官したが手元には萬卷の書を藏し、日本に非常な憧れを持つてゐた、明治三十三年ごろ徳島生れの福本よね女と同棲生活を續けてゐたが、大正元年ごろ(一九一二年)

よねさん の死後は同人の姓にあたる齋藤コハル(當時三十二歳)とともに大正二年阿波徳島に移住し、徳島市伊賀町四軒長屋に居をかまへコハルさんが大正五年十月死んでからは天涯孤獨の生活を續け、昭和四年七月一日祥酒に酔ひ自宅土間に鼻を打ちつけて七十六歳の長命を自ら斷つまで日課としたコハルの墓詣りの時以外は彼女が息を引取つた部屋を離れず追慕の日常を送つてゐた「大和魂」「大日本」「徳島の盆踊」「およねと小春」「支那及び日本の自然」「日本歴史會見」など日本に關する著書十六種があるが何れも獨語で

記述され たためその文才を知られなかつた

日本が早くブラジルと親交の步したのもブラジルにモラエスの著書が曾及してゐるためだといはれてゐる、なほモラエスの書品は全部徳島縣立光慶圖書館の一室に保存されてゐる、右につき澤本學務部長を官舍に訪へば次の如く語る

方丈記を出した鴨長明に心酔し人間の最もシンプルな生活を望んでポルトガルが共和制を布いたのを機會に萬卷の書を二束三文で賣りとばし、手放せない

八百餘卷 をたづさへて來徳し、コハルの歿後は墓參と讀書と著述に日を送つた、モラエス先生は世に知られてゐないが小泉八雲をしのぐ文豪です、昨年秋飜譯された唯一の邦譯「徳島の盆踊」を讀んでみると、枕草紙を縱橫に批評し徒然草、土佐日記、方丈記に言及し、土佐日記を味ふためにはモラエス先生自ら紀貫之の步んだ道を步いて哲學的價値を批評してゐる、その文才は全く畏敬おく能はざるもので、先生の日常はといへばこれまた敬服の限りです、この偉大なる文豪を徳島縣人は知らないので、故人の七周忌を機會に隱れた親日文豪を全日本に紹介したいと計畫を進めてゐるのです

○閑散な生活の旅愁を慰し後たい仙台の川
柳をもとめ、おもしろく感ずるまゝを矢鱈に
綴ります

飾うまも後ろの丸き
木がくれて冬の家の
柳風と共けば淋世の憂こゝろ
童五の句おもしろくよるべ
うんしきい芭蕉の句
うんしきい花菖蒲の一ツ丸
山門を出れば日本ぞ
山寺流黄の藥山の新緑を見んへ
院のかく共焼は天ん日

女優　萬金

さを山門を出るの茶橋の吹かせこえるぞ、さもの
日本と心づく、尚ふる毎日後を寄
子をもつて点点の犬の名を覚え
木綿もの着るが好のはいり口
ふるくも好い方を元る形見わけ
奥の神　木綿物ふるくもとと吹え
乾蕨伝聞也
三月や雲を重ける移れ
大風に散る、廣島あるものを人の死を悲む
霜夢が飯を蛇る刺さんさん
火の移を育て日刺を奏りけり
寄せこそば雪と火の消えるる

風の寒刻と変る書物
雲の先山茶花焼は無初鰹
記事、現代の風俗重宝の低也共の句集を読む
て三四を抜す、
○春城今の高知城　五百の聚楽園の庭を成修
柳北の碑を建て人とーてある折柳、柳北を
知る人から、左の事図を郵して来れ

長田銈太郎
第福吉
成島柳北娘　娘　朝　一（副銘を五之）　武夫
秋濤　第戒三

○此夜日本国古代、婚姻法、流今の通和合び、文部者の祝今教育為長山川建に初めて面会した。此人山川建次郎男の次男び、此次郎男の兄山川浅男の家を継ぐ人なれば其表舞い乃父そつくりび、何ハすとも其の子どもあることが分る位デザートび番時蕎を注ぐの比が、山川が建の英子と話つた。山川が来て初めて住した時は、七尾が五歳ありし比。その長屋と一時建が住したことがある。其際の事は、南的山川の家に四人の女中がありし。二人の四十位の他の居る若い女があるが其一人が建に熱烈の恋をかけ、どうもつても嫁にゐようとあつた。何だか国つて法為相方相談利とすることゐる。四十の女中頼がその此と建に言はれ、拙列の長尾と外れ、別居しんと共に、山川の家に居ることゐる。

○此頃、ことがあるとハ面白くなくなることがある。三新会を結りしとも少くなかり其比五七の学生と頼かつて居ることゐる。其七尾が山川のもとにあることを建に知つたのでハ知つもあれどうか、先生今ゆり難へ、先生の南北戦争時代び、美男びあつたことを語るの一挿話ハ面白ハ書を書いたば、志賀直哉氏の見れのハ法、南部風の地形なり。花鳥ゆびの為ろく

盛られるかうい、シヤレタ今様こどもを描く人すら
もうと浦山ろ侍がまはるけをうるものだと思つたことも
あるが、ある人い指頭書」を得たとゝろ、その
成び出来れ画伯ともゝ又比が、めさまま柿子の
書の部くあるもこと思つたが、コンナ心持と伯
り多く存じ。みるへ書らしい。墨田戦争記
柿子ども先輩の作品が交りが深かつたらしく
柿あゝ宮本武蔵者剛毅を振るも、酒
量がうつることを知つた。柿子い酒を呑みそう
な人だが、あまりびあるもあんるどの好色家、酒の
りれ毒を酒いたものか
の四刻の上今が月刊「強法」「芸術館」を出した。

るが、道是庵の時、道い面白い。強法柿の
夢を通載したが、道強法を得ることが
出来ないうちに、私が道是の文義を読の業
記を載せよと頼んで来た。私の業記い中央公論
に道是海業」と題して二回も数十頁に載せ
たが、高山樗牛に戦争がなくなるのもの
だ。柿の芸術の代りとして、柿の義業「舎」道
文義義を後」と題して載せた。
○この四月頃大分日熱が高くなり二三の人と

今又広く世人さまざまに養生の法を説けども、総兼
ねて支生をなさざることを恐れ、養生の最も大切なる
要訣なるべし。何をか総兼ねの支生と云ふ、人間の為
て無所不ことと能はざることなれの力を計つて能ふ丈
のことをなすべし。往を追ふて能はざる事と力を
及ぼすべからざる無理のことをなすは生涯の為
の苦労を病を生ずるの源なり。失敗をこうむる生下供
也亦たんらも能はず、人工位を欠くことも能はず、隠居の為
大の工力をなすべきことを得るものとん等い時毒を病ある
所以なれ、畜の如く餌をつこ餌んさんとすれども人多
くい憂のなるに死すべきの憂ハ抵総兼ねる支生の

然果して如何ともなし難き窮地に陥り金子を工面して一時を糊し
を得さるかの如き窮○也之れを為に困しめ一家を破滅
或る人の身後の情狀憐れ至極なりしを聞く幾十萬の保険金を
かけ置き此人を知らさるの推定を下し之れを以て自殺の
意あるごとしと雖も醫の診察を乞ひ能はず而うして
此推定の略々当りたる後自殺の中止したりしも拂金の多きを
過ぎ別に憂慮すべき世を去りたり此を憂ふと衛生を
害すること甚だしく而して憂の自分の家眷と最も親
さる情合多し医の本分人を救ひ人を活し得んや余は
常に説く所あり衛生を害し飲食を貪ること甚だ衛
生の害なること殺の甚だしきを多くの毒を蓄積し伐性終
の基を害す飲食を節にし憂慮を解

を生ず余の欲する所は富を求むるにあらず其中間を
保つ様と老齢の食い衛生を害し皆医術に交
渉あるごとしと雖唯々として余の説を可とす
○余の出でて出陣先にて早稲田の「の稲八九
分通り穂を垂れ載しなるを見るが如く大隈
侯の説の通信記と双柿余柿を落如し当地
柿を採補し柿師を錄」にも十氏追論
する所あり偶々漸々成りなんと雨降き海
うしたるを補記せん
論くんとし四五日書き偶々五十数枚の原稿成
の雨降り筆を命の増補を完了する事を
あり二三日中に全部脱稿せんと早稲田に

西村侍士の筆に係る世話の早稲田なんども出今
のい今くまんとの板を異にするこのころ、
○此度住吉社の供しまつる余と幸田家伴を中心と
する座敷会を中比夕の山を楽しいた。平等二人の
お点茶川如是閑 津田ちゑ 西村文明 竹内厨 木
村萩舟 ちどが出席した。余の愛伴さい蕪村なん
とか、二十数年一躍をこと打ち合せきとかい漸やく打合せ
るの機会を得た。愛伴ご病気、高氣蕪の如
くこうもの表情を覚えたり、後活いきと愛伴と余の
間に起り、俳後の住吉合一郎ともめ、良家と
移り、浜野家に響庵庭 豆村の美 鶴 豆
村の嗜酒、豆村を住吉の釣りの話ときどき時を移し

酒のうまい文明 萩舟 ちどかいまつ酒くがめく行きの後生
でかかんじの話で陽春を告げた、東北二人
三時間の接待を著下 北の外住吉社の祭礼
明年後味、ゴ共四 招待 さようなら (五月廿四日)
○五廿二日 住田 高良 の誕生日 ちゑ の去新 豆
かりもの、光のを以つも 吉寿 の祝賀をちゑ 孫
宗さんとあつ此のを悪しいこと 祝賀のかた 島田
墨仙の画 ちゑ 高良 大家の書 住吉の造 住吉 ちゑ
大隈今彼の書 住吉の床 掛けられた。北の八畳 ちゑ
ちゑを祝へ、開会を先ちゑ の歌 を受けた
住伊藤 八言葉を豆きを 煙 を向って 後任
と四方をちゑ 開会 終 デザート、入り、日今

右五人共俳士の指導の任に、高田、島田（墨仙）、大谷、
川崎氏、井上辰九郎氏、於保の大谷、古茅町の閑文
堂等の連俳活動を為し、余も最後と一時の活
躍を試みた。墨仙の肖像を画きし際の其心を活
大谷の画るの肖像と、就て語り、古茅の栄作氏と
親交の厚かりしを、今尚ほ忘れ難き事なり。
次に此時代迄の時代に及び、余も画
業の為に、少年時代の事に及び、余も画
道の為に、盛なる所あり、画道に入る事
なること第一なり。若もし此の画道の為に活を活
つて今日の頃を解き、今日の為に後毎に
此日を以て画道の為に尽すこと考へた。

校友村上豆吉が花鳥と画道
の為に画を蒐集して残す
所なく此の度俳会を機
として其の目録を今茅に
終つた。
墨仙の肖像は巻尾に収
めて置く。其の様を皆日本
一の画道の為のみで
ある。自分は親しく和尚
の事和尚と云ふた

双柿舎の茶を間を楊げ
る画道と大根侯福吉
の油絵

○金星社から出版の「現代随筆全集」の十二巻が出た
矛三冊目で著者はいとう宋巻を書いてゐる。北の花、こんなもの
自分の随筆が五冊目収めてある「川柳の語る尼寺」
自殺禁止の問題「用後の愛憎」「夫婦」石を投げ
る」がうんぬんある。北の五冊の自分自身選んだのを
ろく、出版者と勝手の選擇を委ねられたのであつた、
著者のものを選んだと思ふ。北巻ごとに自
分のものと振り出した巻一、橋井忠道、小林一三、千葉亀
雄、かいとう宋巻、下村湖人、村禁人、冠松、ちよりめん
是公、芽がある。五七五冊目裏に取つてゐる、
いろいろの人の随筆の中を味ふのも閑散の一興だ
此頃から続漢しつつある　五月十四

○平福の大会附属の工手学校は四十四年の創
立で院と一学級の卒業生を出し来年が満廿
五周年にあたるので祝典を行ふと共に記念事
業としても作品部並に各地から出品の福友の便
宜を図り投書を設置して十一番目的
を兼ね集を更新「福友」と改名した
ある、北の校の校舎の徳永校長は、開校以来四度
学び日向事務ある子弟を教へてあるが工
業界に於て最も行政面と殖産面
り、各方面と殖産めんもある、自分ものい共創設
の際協議するも共つて共後ウツかりもをみれかい鳥
元気で早く廿五年　河辺えうこ

○特公桂雨が殺して百年にて古法を今び紀念
の為にを来月出さんとて右きりの材料を集めつゝ
り余の「風月宗堂」一冊字の三字数の字字を
と所うの来れる余の所しもの二数の印数も集て
此竹村氏雄と桂雨が交をたれ古反を論じ此者
同じ或る新人方を宮とかと所るべしと貸付しに浅谷
の浅者寺の杉宗冠の者の印を帯して紙冊があり
桂雨の云ふと云る三平と云家る遺印や
遺墨が有ることがヤウト今うまも収める
ことゝ、是は其貴化の遺文三十字程ばかり
三村の件法が材料とこゝろが材料とこゝろ
で、孫花書目こゝろ
と川元

藤原刻

藤一馬氏より
○菊山寺三秋月古寺の大書幅を持来る、菊池
侯爵の四花の四人の絵賛あり、松下
氏を画す、上段一行を記す、義敦と内注左辰
歳六月牛門 佐佐[illegible]漫筆とあり、古寺七十
キニテ侯ヲ伴ヒ[illegible]ことあるしとゝ
大幅を如ち、古寺の[illegible]幅とも
すべしと婚ひ入る、実に[illegible]の俗ちゞぬまさんば
保かる人に著しうんばことを祝幅とするなり

○土方伯の遺印二顆を[illegible]来るものあり山形
紅寿山石刻者の者なり手皮に婚ひ入る沿内次

年間の切迫を大帝の高恩とし
ことの久しく後嗣人を得ず、愛義
にて分家後は有り、遂に遺印を
数するの別るゝ所系谷家の後裔
後するこゝのまゝ、真と偕んもの活
ゝ、余此印を獲て縁此義深
も無し得てゝ

昭和十年五月廿九日 記

自今、此谷の古谷九を呼んでい
くつも花をしてゐる、其の産地は
行つて見たことがない、保と禁じ冠
の地名を後人に、其の大意を

源頂製

品を見ず、鮫亭翁の後遺手、遂に彩を刻し、客の
七言の古詩、絵画の詩を律詩にもなく、計二百数
十首と及び、後之如のを般亭の行を満喫する
を得たり、北華の首部を般亭自書山水、書を
能くしと云へり、詩は略巧を極む、先人の文部詩
人の集を後世に伝へし

古木田巖

古木田巖入書画、峯壺三面趣成殊、人呼宮
裏手能刊、我邪作心獨摹、有北斗山飯
粉本、住他浪海拾遺珠、仙家渾在桃花の
鶴尤雪中聲雪枝

宝山茂木

何如世路有崎嶇、畢竟羊腸亦坦途、出已無心雲
是懶、默而石語石如愚、苦意溪風多偏細、
未義雲容山又曜、天地冷冷清淨眼、詩胸好
月一冰壺

漢橋秋思

岑樹石人倚秋橋、市可喧今雲容新、
下沙嘶鳴鷺、歸鴉多樹噪秋寒、溪聲遠近
詩情出、山色高低畫筆闌、如是天公游戲業、
更將赫赫補造化

題春晚

百花開盡一春間、天地無產物掩關、尺幅又浮如
萬里、寸毫直欲掃千山、龍時能起心常悅、石巘
羞雲千自攀、滿紙雲烟舒盡好、何須畫家多

觀仙寮

松風洞

空一詩囊一酒瓢、行吟行飲不知遲、梵鐘忽出雲
中寺、仙境俄通木末橋、野水挾風寒帶雨、松濤捲
地領生潮、我家將本負溪山、歸路斜陽伴
老樵

漢山秋思

白雪青峰日相交、數氣西來秋一郊、石逆溪邊
游席韻、松歌山麓鳴蛩蚓、山多芝草雲而長、
江有魚蝦釣且肥、烟外僧歸何寺、疎鐘
隔水數聲敲

秋花紀行

此生未敢嘆蹉跎　世上風塵督眼過、千里江山雖
好在、三年皮骨爲誰多、梅前葉辱霞蒸歌
鏡裡印名雲作客、挑劍玉郎數斫地、傳時長氣莫哀歌、

江橋晚望

絶無塵思上眉頭、暮色風光相倚樓、後鳩是時
前浦過、一天北斗四山秋、吹雲石氣寒猶壓、
樹鐘聲晚更幽、極目蒼蒼吟長木、夕陽歌
渡水空流、

○坂内氏の死後早くも百日の近づくころ、六月二日
の頃より京の人々の数人、

百日忌を終り、百日忌を終り上げて、法要を営
むことゝなりぬれば、幸ひ墓の工事もはかどり、法要と
先だち、墓前と供養の式とを営むを得たり。自分は
前日十数名の人々と連れ立ちて出発し、北村一行と別れ
て一泊し、北村一行と共に双柿舎に着したる時は、墓前供養の時刻迫つてゐたれば、
直ちに、故白土氏の家の祝儀等と共に、法花寺に
至る道を進みて、北寺に数柿舎を二十丁隔てゝ東北
なる所にあり、寺の三丁ばかり前より矢上氏の今日は
建設されし、焼物テントを張りあり、墓石を搬
新たに立てし場を搬くあり、自分は北墓を

[illegible]ものと武行奉書[illegible]する所あり、石の墓[illegible]
墓表の字も書しなれども、実は其住[illegible]を[illegible]
[illegible]すまうこと、始めて其住地の境内如何[illegible]
[illegible]ことを知り得たり。ここ[illegible]
[illegible]ことを得ぶ初めなり。之
[illegible]隣りて佐野家の墓域[illegible]
[illegible]墓域の[illegible]相[illegible]の[illegible]
日蓮の[illegible]の[illegible]
思[illegible]。墓石は伊勢産の[illegible]石にて世田
[illegible]谷の上馬[illegible]墓石并
[illegible]階あり左右[illegible]
[illegible]しなり、墓石の[illegible]八尺許、右方出ッ張
り長り、何[illegible]

[illegible]ものへ、[illegible]自分の目に[illegible]映しなるべく他人
[illegible]赤面か思ひ、北の墓[illegible]墓[illegible]
背面に支那の法名を刻[illegible]、北の墓域の背面
[illegible]崖と[illegible]下に人道[illegible]、或は土の山崩れ[illegible]
[illegible]ここに土功を施し、[illegible]墓を[illegible]石
壁を以て三方を囲み、石屋とは[illegible]
[illegible]墓前に一対の[illegible]の和
大石の献[illegible]、設計[illegible]
伏奥[illegible]所造[illegible]の墓として[illegible]但し
思[illegible]大二寸[illegible]百日迄すの日子は設
成しなるべく年等の[illegible]
[illegible]師の[illegible]廊[illegible]
[illegible]五僧の供養[illegible]後任、[illegible]族

[illegible]と[illegible]焼香を畢り[illegible]と陰膳の式終り双柿
会[illegible]

午後二時[illegible]参会者の手[illegible]を待て[illegible]
の床と[illegible]を[illegible]き[illegible]
き[illegible][illegible]法[illegible]を[illegible]
[illegible]故人が死[illegible]
[illegible]集の末巻二冊[illegible]製本成り
[illegible]の間に仏[illegible]
後[illegible]一日墓を[illegible]
[illegible]の三十数名[illegible]
[illegible]十数名也四時[illegible]一同
[illegible]紀念撮影を[illegible]

の時間を剩す余未亡人と楊を別て[illegible]を流す、
未亡人曰く[illegible]の[illegible]年[illegible]
[illegible]一[illegible]かさ[illegible]ことが無いのと[illegible]無
つたので妾の[illegible]が[illegible]
いかと[illegible]心[illegible]
[illegible]自分の感[illegible]胸の裏かるを[illegible]
未亡人が主人の[illegible]
[illegible]毎[illegible]一月三日
[illegible]
の[illegible]入を急[illegible]
主人[illegible]妾の[illegible]
法要の際[illegible]

あの住職を思ひ出すと共に世の人と親族
達との別れに遊びの家にあつまりこゝに住職
を祭り後任を少わんとの実の夢の如く感慨
深くまちんばかりに実の主人は私より一年も早く死
さいから私も早く死さうに順序かもしれぬが
実の長い間僕らもまたこゝを去りこゝに留
まるつもりの私の勿論自分が私があとに生き残る
ものと亦先きに死ぬものが梦中に過ぎたのが
殊に感慨が深い、諸兄去の際に衰傷の胸塞がる
このやうなことをたくさんある筈だ
日の諸位賀の実に感傷に堪へないと話
つた。

やはり家の方が年長者が先に死ぬ
ものと思ふ故に
リ住の家に対して接ぶ
儀式的の演説があつた後余は私の味のある演説をせよ
との内交渉があつたので日前刻未亡人との面談の
ものを作り、越海の幕僚がよい考あり三十年後けし来
れりとひやかしたり、実に
の越海の自分の実生活
実に越海の自分の二生活
逸る二件を語つた、唱歌し、志賀の
こと、君の滑稽に永市内人が君の他にやつた祝詞の
家日に長く心苦しと他に移転したことを
語り住職の克と自立に早く壮年時代あることの

例祭とも祝いに、女の奉曲い双拍（金物師の補遺）として
ほうそう（金の陪奉早稲田）」を出版、ちんとするのくくこころを
許況なり、九色七時解散して皆々恒東の金と就く（六
月三日録）

昨日の法要と祝宴に前日十畝今の表を金がありて
自分も宴に参加した。冊那トン子んが祝宴に一回五円
し修禊寺に参行つもあるが珍らしくもない
が四三の修禊寺から就任の法要に行くが伏利
とうくとしてのみ。一行中に恭木十畝が
ゐる。こんがいつも自分の法敵ありて車中ひも
就彼ひも法もが多の興味がある。美術院教
授の打物として文部省の指置が自然法見と

ようなが、十畝い今次の文部省のプアッシュ的行動
を怒られ新聞もあると非難しもある。日本の風景
美と就てもいろくの法が出れが、外国の風景を
表現として見るべきものがないが、日前
の風景に慣れ平凡であると云ふ人のい負分も
同感であるが、兎角日本さび外国の日風景
なしとする。ことさらに十畝いつも就りの時大
きな和紙のスケッチのブリとなる。絵を携
帯するが例に、就筆の時の時間のない時に写真
とり就筆の時のある時に大変スケッチを
吻宅後の色を照はするが例で、さるも就彼の
川を隣人に方格の鳥の絵をみるのが意

又今日早朝撮みたしてスケッチを取るのを傍観
したが、十分くらい寧ろしろ、三十分計りを費し
たらしいのを見ると、屏風一双の画とも見るべき
ものであつた。いつも十歌を旅行の時四人と飲つ
べき小點の画を携帯してゐる小例とのことの
為めに、そのまゝ自分も其例日を就むに自分も山水を得た。
自分は花鳥ばかりを山水を好み殊に墨絵を好
むが、そのまゝ獲た山水は蒼茫の情趣を感じ
た。北漢馬を引く點景の牧牛など
なる所を出したるは、自分は酒中こんを
著色田園に馬を引く図とを感ずる
一笑に値す。

○拙書を求めるものが近頃頻増し書き損じを反故にするのもいとまなく筆と墨とを用意する。自分の書が得意なるにつけ、自ら拙を知らざるべからず、寄する人が多ければ酬ゆるに高を揮ふに老齢ひのあるが書けばまづ義務としてゐる。追々眼の利かざるに手が動かざるにつれ、人を時受来るの業を揮ふあれば忘れやすいことを思ひ、人の志業をこれをことわるのとなる。情けを人に分つ事はやうる書の如けり時は拙を拘らず書はくることに同じく酬を求めるのは

○恥ずるもまた優しいとあくまでつとめて人の富と名とするのは比較的である。

○山湯の服膺を齋くし寡欲を行ふこと其業あるべきと求めしかば其の方の人に白が氣を吟ずれば

美人

碧沈雲鬢卸梳　香消氣花輕

とあつた、後のよういの時に失錯したのうるあると思ふ。

○手垂宝の枯淡の筆致を喜ぶ、昭者文平作一幅を贈、一笑酒筆。古こ音すくし、淡之

二生の六十年　抑俗著

○道遥が前年日蓮の御本を書いた時日蓮の真
跡と称して南無妙法蓮華経の題目の書を
写い市時短冊を書きたる数枚あり、予の出し
て一枚を、吹の枝し出して大正八年十二月
十四の日附を日蓮の花歌と称して日蓮の
花歌集、題目の書の例と称して不老
不死」とあるは、原書に似ふ字もなく歌こそ
遥の作品なれ、或は散佚したる、一幅と装
潢し化の幅と共と称して表装せる也　六月十日
○東京朝日新聞　真と称する異の様
本也

東京朝日新聞　（日曜版）

山の神龍

海風の幸福

古代の瀬戸内

早大に

昔から山の神龍と崇められた海の主

ロケの底海たい着に大早

獵

科

〝海底の墓〟發かる

古代の瀬戸内海は陸地

早大に驚異の標本

龍骨の山

美しい瀬戸内海の底から傳說に名高い巨大な「龍骨」が山のやうに引き揚げられて千古の謎が科學のメスで解剖される

昔から瀬戸内海の讃岐沖一帶の數百尺の海底から巨大な生物の骨が漁夫の網に引つかゝり恐ろしい「龍神の骨」として畏怖されてゐたが最近、瀬戸内海學術調査團團長として知られた早大教授德永重康博士が實地調査の結果、世にも珍しい「龍骨」千余點を漁村の朽れた蔵集家眞屋卯吉翁からこの程早稻田大學に正式讓渡を受ける事になり大きな木箱數百個に詰めた「海の寶物」は四日朝、同大學に到着、德永博士の指揮で高井、直良両學士外職員數名で荷ほどきに大童、やつと夕刻までに專門部新館の一室を借りて全部假整理を終へた、成瀬博士が「日本一」と自慢するだけに廣い部屋にヅラリと陳列された「龍骨」は長さ三尺以上もある物凄い牙や直徑三寸もある大きな齒、さては擂鉢大のグロテスクな下顎骨などいづれもドス黒い腐蝕面には自慢を一杯つけて見るからに深海の

早大に着いた海底のゲロ

獵奇を潛めてゐる博士の研究によると何れも今から十萬年前の古代生物の遺骨で傳說上の「龍骨」の正體は象、犀、牛、鹿、猪、水牛など——地質學上の古期洪積期時代にアジヤ大陸に繁榮した巨大な動物で現在の同名の動物の二、三倍もあつた前世紀のコング族である、眞屋翁が全財產を傾け五十年間かゝつて瀬戸内海の漁村を歩き辛苦蒐集した遺骨は生物十數種、象の齒だけでも十五、六種ある天下一品の折紙付きこの貴重な「龍骨」の研究によつて大昔には瀬戸内海は立派な陸地であつた事實及び日本とアジヤ大陸は一つに連がつてゐた驚くべき事實が明瞭となる、即ち十萬年前には支那、印度、日本を結ぶアジヤ大陸にこれ等の古代生物が濶歩してゐたものといはれ、早大當局ではこの「龍骨」を中心に田中總長の肝煎りで遊喬博士の河廣博物館に匹敵する

科學綜合博物館を建設する

德永博士は三日午後「龍骨」を整理したから愈しさうに次の如く語る

こんな立派な標本が集まつた事は驚異です、他の學校には精々五、六點しかありません、毎年二つか三つ位、掘り出されては學界で大騒ぎするのですからこの千余點を徹底的に研究すれば地質學及び生物學上、大きな收穫がある事を確信してゐます

早大の近くに得居考古獻器の拓本なしとせず
十数年以前日本の頃より出でて大陸に移
熱帯地方にしかることを知る降化の地に於ては
流と考ふるに足るべし共憲(憲)書ならべし此の
考古材料の蒐集者は年老たる者なれども
なほ盛なる
同じ時代と考へられ特主は考古学者
の係故なり一説に(特主)とも(全)寄早
稲田の者にして
と云へんと云もしも無の上或る部分は
附せることなり、こん日早稲田の
に於ける

大人考古獻器の拓本なしとせず
の蒐集者なる人は考古学者
なり、早稲田と此等考古学者の
大略を知めんと欲し今後と二四材を文を
御しらべ

○香川景樹死山陽書簡今日献ス、書簡集
に漏れ出ることなきも共含を保存するに内容
あるの特味あり、

六月十日記

口上

此間は奉懸
御苦勞ゝ老母腰折芸委曲御教示御正答
被下何より難有かり於小生も感荷仕ゝ其
後以使御禮謝と不申上恐入ゝ然ゝ今日鷹意
之方家内とも招ゝ付舞妓とも少ゝ召寄申ゝ
失禮如何敷御座ゝ得共御心安ゝ任せ申上試ゝ
萬一御手遠ゝ被為在且御退屈之節杯御
座ゝ〻鳥渡御立寄被下まじくや老母
伺ゝ而申上ゝ様中付ゝ家内と申も皆ゝ

不俗物共ゝ御座ゝ小石春琴なども来
申ゝ御来諸被下ゝ〻ゝ皆ゝ喜可申ゝ
餘不盡頓首

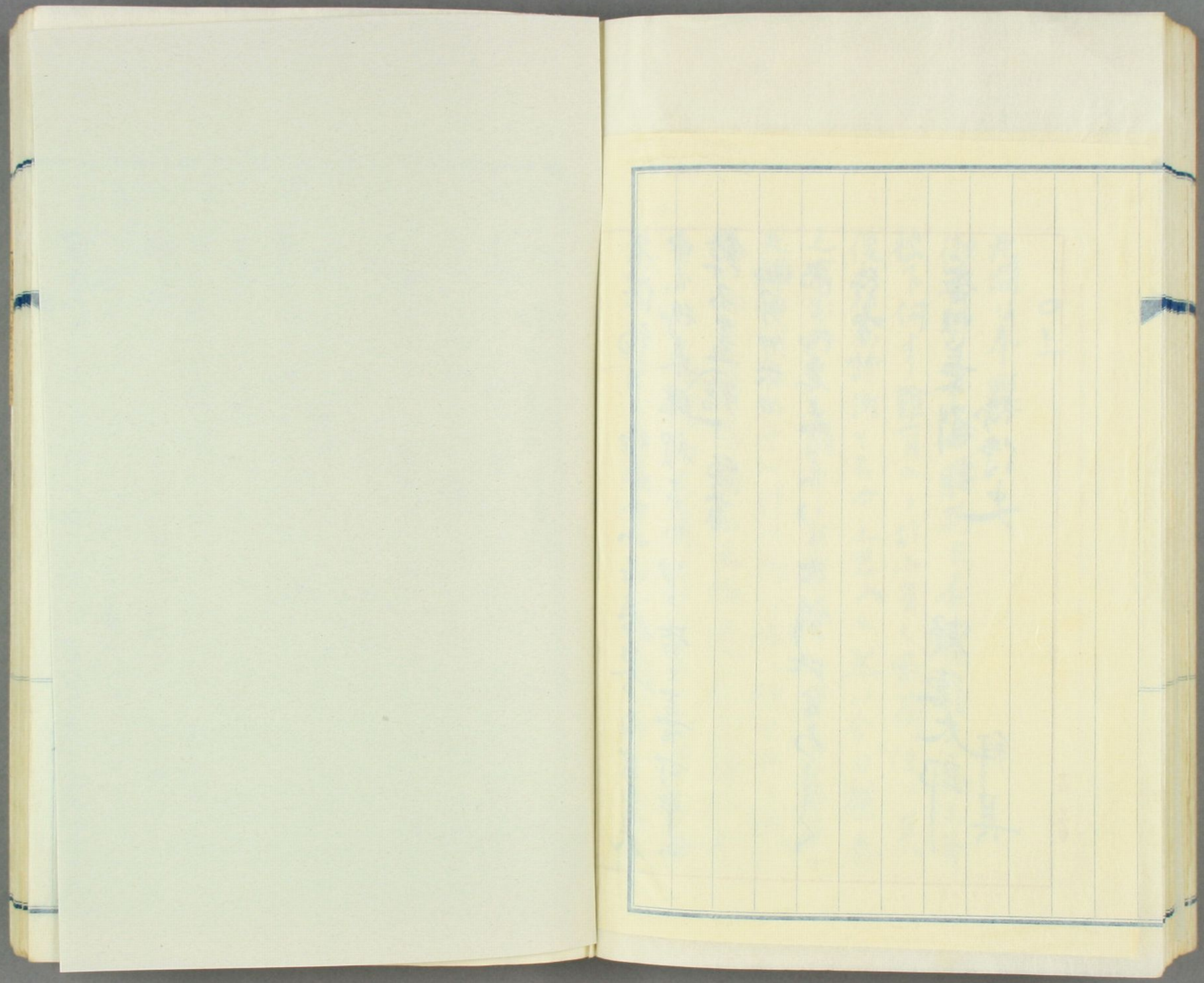
四月廿六日

尚ゝ御悪来ゝ〻ゝ七前此よろしく
御奉ゝ

香川長別
御侍史

頼德太郎
拜具

十行　廿字詰



実業之日本の六月十五日号に鄙は自分の名で左のやうな
が掲げられた。これは往年自分が大阪と出版の仕
秋山俱楽部と時々会つた際、越智と彼とが相談し
とも自分の発起と異に記したるが、事は二十年前
なかりせば、蓋記ともなれるもの、増田宋
業紀もなし、示し、長の志の秋軒さんがやはりと云ふて
渡しなり、自分の名も其儘出すことの敢て欲さ
らないことは、僕の方の発起と故人とをもおくる、故
こ過つたことし書かんとまるも他と云ふもなさ
もあるも、自分の名を出す訳うんだ加筆もすべき
ま勿論之を掲げ出したのはあるうも軽率であるか
今は駄目ではあるまい。

○書籍雑誌「発起者」の六月号の「狩谷
棭斎」と題する記事さん関し
こんまでもなくことは或人と編輯さんとの
はの流れまつたもの名を
考証の書の相南海山あるが棭斎の
だ書籍数は若しかうい北鄙といふ森銑三が北
書かう狩野と宋の無あるも相島中も書いて居る
が、こんな棭斎のもをいはれたこんが一番面白い
自分はこんな伝りも日本流行棭斎の門下が関
のを安政しれことや、狩崎博士が棭斎の三人も
交りの深い友人で貴国京与
ることを始めるの社ちま棭斎の事の書をんてみるの物

いかが為美庵の柳樹侍法と朝川美庵の梅園日記があることも如何を知つて比、面白いけれど梅舟と称ひ
ある北の辨ずい三村が古い間家を集め比梅舟のかを
自文や、梅舟の花を見ればとなめるから、梅舟研
究のは一切を志賀しめる。

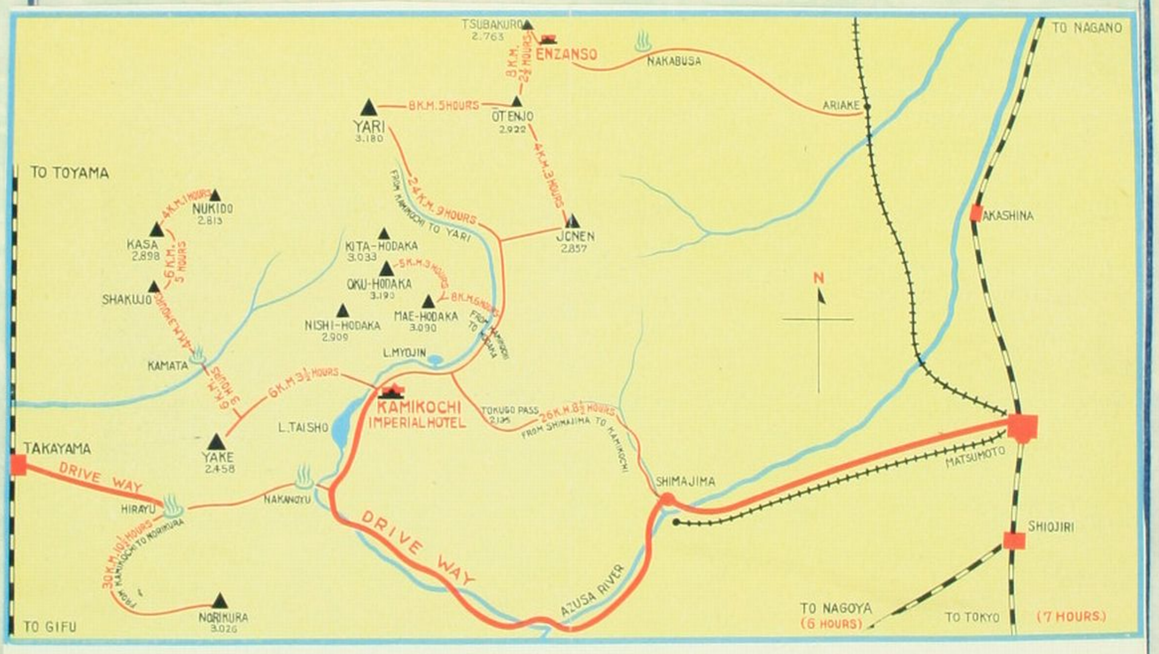
二月十一日記

梅舟の家の今の主人い三年と云文家に過去性が有して
みて特谷家同が如何を未だ幼ん比。梅舟の書物も
未古物とも云比が、未古の美比の辨ひ出ることが
幼ん比。曾て十川敬所の手を経て梅舟自著
山陽動著の金石記の今を也軒の軒詩ひ特
茶家と成つれことを三年の話つれとを得
比。

日向国岐亭の行集を後を使侍茶午を前に掲載した
が、左に今の二三作句を掲ひる

穂紙錄毛補如天、知と人間有朱顔、衛背峭崎
去不克、山中終古把雲吐　右

貴木無言天地寒、羊腸推級入雲盤、夕陽度
老空山影、刹寺橋立信夕陽、鐘聲上桥苦雪伝、寒
山一路僧伺来、木末鴉声塔影長
蓬萊浅水釣帰船、自為処と仲脚跳、明月一湾
秋萬頃、酒家芳夢義酒家を逆文
江橋柳影生風、茶煙千條凡寒庫、天外一寒
三四人春波暖浸白鷗天


TSUBAKURO
2,763
ENZANSO
NAKABUSA
TO NAGANO
ARIAKE
YARI
3,180
8K.M. 5HOURS
OTENJO
2,922
JONEN
2,857
TO TOYAMA
NUKIDO
2,813
KASA
2,898
SHAKUJO
KITA-HODAKA
3,033
OKU-HODAKA
3,192
NISHI-HODAKA
2,909
MAE-HODAKA
3,090
L.MYOJIN
KAMATA
L.TAISHO
KAMIKOCHI
IMPERIAL HOTEL
TOKUGO PASS
2,104M
26K.M. 8½ HOURS
FROM SHIMAJIMA TO KAMIKOCHI
AKASHINA
N
TAKAYAMA
DRIVE WAY
YAKE
2,458
HIRAYU
NAKANOYU
SHIMAJIMA
MATSUMOTO
SHIOJIRI
DRIVE WAY
AZUSA RIVER
NORIKURA
3,026
TO GIFU
TO NAGOYA
(6 HOURS)
TO TOKYO
(7 HOURS)

ホテルの位置

日本アルプスの精粋・神河内　周圍に三千メートルを超える高峰、穂高、槍岳、霞澤岳、六百山を繞らし、アルプスの精、梓川の畔、海拔千五百メートルの一大平坦溪谷に在り松本市より十餘里西方に位す。

御來遊の御道順

中の湯を經て　松本より三十五哩の坦々たる自動車道路はホテル玄關車寄に通じ此の間ハイヤーにて所要時間一時間四十五分。

或は松本驛前の「神河内方面」行バスにお乘りになるか、松本驛から松本鐵道で終點島々迄四十分、筑摩野を西行して同所よりバスの便によるバスは島々村を經、梓川に沿ふて進み島々村より約二時間三十分にしてホテルに到着する。島々村よりホテル迄は里程九里餘で、途中稻核、奈川渡、澤渡の部落を經、常に碧水梓川に沿ふて山間を迂回するもので、殊に春の新綠の美、秋の紅葉の美しさは日本一と稱せられる。

德本峠を經て　島々村から島々谷の南澤を溯れば德本峠頂上まで四里の登りで、それから約二里降つて初めて神河内の河童橋上に出で更に八丁下つてホテルに至る。

神河内の溪谷美は德本峠越えして初めて知る事が出來ると云ふ。

ホテルの設備

日本第一の高原ホテルにして瀟洒なスイスコッテーヂの建物は近代的の設備を一堂の内に網羅せり

室數　六十室　　收容人員　二百人

リュクサックを背に汚れた靴も氣にならず氣輕に食事の出來るグリル食堂各國の美酒を集めた酒場を初め、寫眞現象室、讀書室、乾燥室、ロッカー室、瓦、人夫溜場等の設備あり（溫泉は目下設備中）

御部屋料金

御二人室　共同浴室附　七圓より　　御二人室　專用浴室附　拾五圓より

スチューデント　ルーム　御一人樣貳圓より

御食事料金

朝餐　壹圓五十錢　晝餐　貳圓五十錢　晩餐　貳圓五十錢

茶菓　五拾錢

珍らしい神河内鍋・すきやきなど、御用意致しております

御部屋の豫約について

御來館の節はなるべく前以て御部屋の豫約をお願ひ致します。

直接に神河内帝國ホテルか、東京の帝國ホテル接客係へ御申込下さい自動車の御用意も致します

御電話は――神河内帝國ホテル内郵便局へお願ひ致します（長距離）

營業期間

自六月　　至十月

春　四月が去つて五月の聲をきくと間もなく、神河内は全く春となり櫻から柳や落葉松に至るまで五月には一齊に花を開く新綠は五月の中旬頃から六月の初めにかけて最も麗はしい化粧柳の冬を越した若い枝は帶紅色で目立ち落葉松の新綠は美しい春の裝いとなる。

夏　七月から八月までは夏で、一番神河内に來遊者の多い時季は七月初め頃から八月末頃までゞ此の期間は一番氣溫も高いし、と申しても日中華氏七十五度で、高山の御花畑は滿開であり、殘雪も多からず又少なからず、登山は最も安全であり容易である。

秋　九月の末から十月末頃までは秋で神河内の紅葉は十月中旬以前がその盛りで峰近くの方はもつと早く德本峠の島々側や澤渡の方面は少しおそい、その頃の神河内の溪間は三段染分となり、山の麓と溪間は紅葉の錦で、中腹は針葉樹の綠、山頂は新雪の白色で、美しい對比をなし、紅葉の中で一番美しいのは黃金色に照り輝く桂の葉で紅に燃える他の木々と相俟つて目も覺めるばかりである。　　恐縮乍ら御勘定の一部をサービスとして頂戴致します。

TIME TABLE

UP TRAINS (Matsumoto to Shinjuku)

Station	424	412	404
Matsumoto D	1.20	3.22	9.53(s)
Shinjuku A	8.27	10.05	6.10

DOWN TRAINS (Shinjuku to Matsumoto)

Station	425	405	401
Shinjuku D	6.20	8.31	10.45(s)
Matsumoto A	1.14	3.21	6.24

UP TRAINS (Matsumoto to Nagoya)

Station	408	410	814
Matsumoto D	8.05	10.43	1.20
Nagoya A	1.33	4.05	6.39

DOWN TRAINS (Nagoya to Matsumoto)

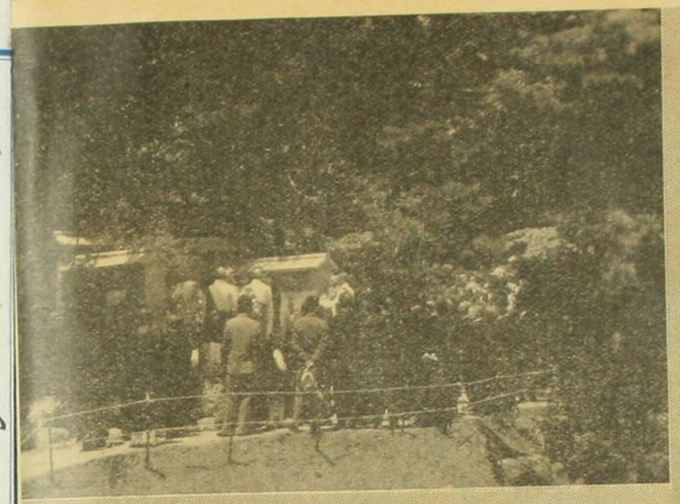
Station	815	625	811
Nagoya D	8.20	10.15	11.30
Matsumoto A	1.14	3.21	4.51

REMARKS:　Light-type figures = A.M.
Heavy-type figures = P.M.

坪内博士の墓碑完成並に百ケ日法要

去る二月二十八日長逝せられた坪内博士の百ケ日忌は、本來ならば六月七日なのであるが、六月二日の日曜日を卜し、取越し法要を營まれた。これに先立ちかねて建工中の墓碑も完成したので、同日午前中に埋骨式を執り行はれた。

有力者數の地は故博士の遺旨に基き、且又熱海寺境内の可否により、雙柿舎と相對せる海嶽寺境内に定められ、本大學教授藤澤桓夫氏の設計、世田谷の業花園柴田技師の手によつて設計、世田谷の業花園柴田技師の施工に成つた。墓石は自然石で高雅たる伊像の浦石、表に「逍遥坪内雄藏夫妻墓」九文字、背面には「雙柿舎故逍遥居士、昭和十年二月二十八日歿」「雙柿院逍遥仙古大姉」と御夫妻の戒名がある。「何れも六十年の親交を厚くした市島春城先生の揮毫」花崗石の墓石は自然石を以て囲まれ、後方及び左右側面には鐵筋コンクリートに新小松石を張り、床には根原石に定紋の洲濱をほりつけ、床には根原石に定紋の洲濱をほりつけ、床には根原石に定紋の洲濱をほりつけ



墓碑の生光内坪故るせ成完（下）　式骨納（上）

書聖　梧竹の藝術

今回展覧する遺墨は何れも天明・寛政・文化・文政・天保・嘉永・明治・大正・昭和の代表的作品であります（一部分は未発表品）。

月明尊、天明・寛政・文化・文政・天保・嘉永・明治・大正・昭和の代表的作品であります（一部分は未発表品）。

我国尊、五月、清涼寺、二月、仙崎大明神、三月、泰禅寺、四月、天王寺、十八月、清涼寺、六月、近江、蒲生郡、十月、妙法寺、十一月、南禅寺、七月、泰禅寺、十二月、南禅寺、九月、清涼寺、八月、泰禅寺、十月、妙法寺、十一月、南禅寺、七月、泰禅寺、十二月、南禅寺、八月、清涼寺、九

二者変態と呼んを得べき歟、且海十景候十五

北斎又曰之り事と称を高橋仙果の自分を尚
士雅様と云ふ一冊を得たり、絵巻の宮しまど
為めてもの、仙果い相南俗を書き写ししく
浦世絵の美人を描き写し拙彩色の一帖を回
居に献ず、興を出て美人と他と二人の絵
人を渡く写し回りて美人かきと思ひさらう
う

化政時の美術軍法師とする浮世絵もまあく
まんも枕絵形十二字本ちうか孫くしく思
いなんの時ひ入る

六月十二日

□市雲家物語の書を表ひ得ひ入さ、浜者も来
作の情を解り来ることのちう一見者を見ふ即ち
時の二年五主根こ嵩と海ん、ん好る事凡
書仮りて仏も高くそのと、敷乙甲乙ちうこ心
思なんど、左ま来ま、ぬ千の高さを、北の事凡の書
を世人及び難き風敷あり、市の国北高を表ふ
ハ草を書ずるの間筆下を用ひ今本を風敷
芸も本を本浦鮮あり、画の巧拙い寸ち北の絵
のこまる転ても云るべきか、自浦こ高く二生中宮常
拙仏慶と浜北本可を芸ん

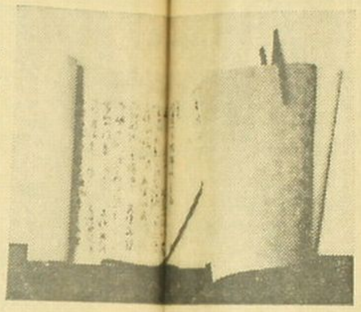
六月十二日

後崇光太上天皇宸筆『看聞日記』影本御下賜

四十三軸よりなる貴き浩翰なる巻物

宮内省から　學園圖書館へ

増榮なつた學園圖書館は豐富なる内容をもつてゐるのみならずわが國文化の源泉として光輝ある存在であるが今回宮内省圖書寮の特別の思召で後崇光太上天皇宸筆「看聞日記」影本が一部下賜され万巻の書中に輝いてゐる、この日記は太上天皇が應永二十三年から文安五年に至る三十三年間年毎に一巻又は二、三巻に分ち御書き綴られたもので、別記一巻、應永十五年御幸記一巻を合せた四十三軸よりなる巻物を裝幀し、一巻の長さ大きいのは百十三尺に及び小さいのでも四十尺を下らず、毎巻櫻地菊花模様金襴の表紙をつけ巻軸を用ひ、影印本四十三軸、覆印本四十三册、解題凡例一册より成る浩瀚なもので桐の箱二つに整然と収められてゐる、右「看聞日記」寫筆の正本四十三軸は、もと伏見宮家相傳の家寶たつたが明治五年眞淵皇太子から東京へ御獻上あらせられ、太政官の御命に對し同七年正院歴史課で現在の製幀を施し、「紙」と題して尾崎行雄先生を招聘することに決定した、先生は學生の熱心なる要望に感激し多忙にも拘らず遥々わざ〳〵來園されるので大いにその講演は期待されてゐる



時の世相を描れてゐる、御記の内容頗くの如く御記事致亦興趣なるを以てその影本は欠しく學園されてゐるたが浩瀚なるため實現されなかつたが今回やつと願いられ成るや直に學園圖書館に御下賜あらせられたのは學園の光榮であり無限の誇りである【寫眞は下賜された「看聞日記」の影本】

林圖書館長謹話……

「看聞日記」は御崇光太上天皇が特殊の御地位から足利時代の未期に御書き遊ばされたもので、而も當時の社會全般に亘つて描かれてあり當時の政治史、制度史、思想史、文學史の研究上貴重なる研究資料である、宮内省特別の御厚志に遺憾ながら御下賜になつたことは唯々感謝恐懼してゐます

夏休み中に

學部三學年輕井澤野營

日程等決定

學部三學年輕井澤野營は左の如く決定し教室系統から徒歩

1、集合場所　輕井澤夏季大學（鹿の西方約一粁半）
2、日時
理工學部　七月一日午後一時半集合
同　三日　正午　解散
政經學部　七月三日午後一時半集合
同　五日　正午　解散
法學部　七月五日午後一時半集合
同　七日　正午　解散
商學部A・B・文學部　七月九日午後一時半集合
同十一日　正午　解散

りまうあ流ひあ。
の採鉱冶金術が幼稚時代日本も勢ひ銅を多量
の金が含まれそのため日本の多所に実を莫大ひあると
言はれもあるが依然の鉱山を掘りも出金の稼を
時代の元金をあを今は鉱石を海に捨てたりした
多の中のもれるど金が含まれ一振るふ惜しいものひと
そをを思のしめることがあるが北陸卿の管内の
ると相川の行宮と程の人家の土まを金が含まれ
るとこあて三義が土一トン一用ひ買入れとこのひれ
川住民い大いる喜んひあることが前年まれは土地を三
義こ喜んとしても相手まりこうなのひ今い前と
三義から買ふことをこのひと住民い大悦ひ

後崇光太上天皇宸筆『看聞日記』影本御下賜

四十三軸よりなる貴き浩翰なる巻物

宮内省から　學園圖書館へ

學園新聞
白我偈の講話
釋尊
生田長江著

とうが、金山所在地の住宅化する事実は、金銭多くして金銭多くなんとなるとなるべくして。
なんとなるとなるべくして。
○七後を為す所に後ずるのだとする
○曾てマルクスが強調したるプロレタリアと共産主義
と大革命が起こりたるとなるべくして、なんが裏切りて
ロシヤに大革命が起こりたる世界の大戦が共産主義を
なしたるが、其実ロシヤの内部は革命を呼ぶやうな
事情が出来たのである。世界大戦とロシヤの動乱とは人類
ハ一千五百萬と言ふ大犠牲で、其の死傷者の四割と南ツてゐる。
と言ふ事は、政治列国の死傷者の四割と南ツてゐる。
動乱の数は多く、無論無智の農民を起つて
戦後となれば、なんに供給する物資が足らず、

食物も不足分散するとの報道を聞く得ず、産業の衰
を実の比が何千人もあるとか、物価騰貴
ハ地を掃つてもらうと、皆な餓渇を激して、倍々不安を
望み、なんなる利益を保障しても構和のみを実現したと云
ふ人気であるから、政敵を見るのハ南部のみである。革
命ハ早くここに破滅してゐるのだ。宮廷や貴族方面の
めつたとなれば、日本の事情ハ如何に全く文化の世界と
なり得ない蛮式のことであり、国王ハ二番愚考して、行方
なくなり、所謂の皇后なる支配せられ、妖僧の為めに使役
使されてゐる者故に、宮廷の腐敗ハ極度
に達してゐるとにヤの取つて変と危急存亡の秋が、
石高が既往に復帰と例のなる大騒けをしたと云ふ

石ど宮廷の女女などい贅沢を極めた。軍閥(軍人)者ちが
い莫大の金儲けをやつたが、政府ハ之を保護をする
ことも出来ずそうしたなど日微弱で有つたと云かれる上下
の市場も乗しても乗ん。戦争ハ勝利を得て得ん、世界
大戦と参加したのハ、敗うも直ちに革命を誘致する
所以で、他を伺ふも無つたのである。ここやはり久しく世界の
骨董であり、日本を見ける、学て外国を見ることの
ない大帝国が、歴史と例を絶つの崩壊的運命を陥
つたのである。私くしハ世例ひもあるが、保一国を治める四他山
の石として政治家ハ其の由つて来る所以を研究せねば
ならぬ。

○中央ハ今除社ハ直(直)後百の長を行ふ時まで

第百壱

ハ使命全集四十冊を書行しつつあり。努力の
甲斐ありて此三冊ひ浮る、此ハ島中の社長の行の
完成記念の紀味をと何のから、自分ハ書(書)の巻
墨集を出版まくしを徳海しに実ハ国動西上
今まで有ハ人の行全書書の一を教くらんとする
のに、いつやさも空めてをるのこれも時機のまだ来
ない所後飾り時を経ての人やんば赤ん後者のある間
にあるから四後ものを徳を失すると土出すると
ると中央公論社ハ沙公を生時に先国係が右ん出時
不として都会ハよりの中のび、話自私のすくめるを(ら)ま
成りつつあり。武ハ向上公の南の者の中ひ直(直)全
集を中央公論ともせないと云ふ人なもあんと

既に全集に数しにしるが春陽堂で出版されると長
生えんを謳ひ小説家は全集を春陽堂に奪ひ合ふ
ようなり、且つ全集ものは出版界の一つの時
代をつくれり、中央公論社でも乙女の友の
出版に成功したるも遠藤集二集は体裁と印刷と
二度かえられたるも、且つ遠藤集の選擇の
意を安まず、公論社にケ様の出版と経験からいか
ら元金の招待が必要である

六月十四日

○講談社から経歴書の材料をと、余に経歴書
概念を掴む事が体験した為くの概念を送
不成功に帰した実例を書いたくんと需の
を未だから見て断つてやつた。丁度其の時人

が来れこうと申すと乗ずるとこの記事
の大切な動機であるが自分のむき食物の経歴をも
とんと出さうと思ひもつかない。
何人かも此の家を訪ひ得る人を有する人は少ないが
やうなれば仕方なしに此の書を書く、絶対秘
して長く人に何かと云ふと異性の恋と言ふ
エキサツである。異性の恋人の恋と言ふ
で、一刻の安と結ぶが結ぶが
概念を掴めば面倒なもの我が
すれば、其が敗れも嘲を嘗
あることで、未だ入つてから、追憶を未まることいと
のことの成否は成功したのの飽き思ひ出さうないが

ら様子を笑し此ことを忘れ去らんと遣ひ捨てん
他かすべき所を斯る事で成功せんとする
為めにすることもあるのだ 機会を逸したことが寧
ろ仕合せもあつた場合もあらうが兎も角機会の就
ての秘奏の話は誰れしも有して居ることゝ思ふ
秘奏と言へば自分も一笑した
○トルストイの一日一善を毎日実行する人一万人寄せ
集の会心の所多し 左の二三を挙ぐ
一 宗教は善の最高標式である バアカア
一 キリストが神の存在を知るのは理性によるよりも寧ろ
母の抱かれし乳のみ兒が任験する故に感情を表

それ抱かれし母の、神くの完全な絶対の表徴
なるようにあり
一 嬰兒は自分を守り暖め育んでくれるものが誰れ
であるかを知らずこの何者かが存在するか
を知らずあるが如く自分が身を委
ねあるが如何なるかを愛しみあるのとメリウ
一 良心の要求は抗し難い絶対の要求に従ひ
一度でこれを服する方がよいのである
一 帝王が聖者を向つて質問した
しかし その方は余のことを考へてゐる
聖者は答へた
しかしはい考へます、但し神の存在を忘れ

まして時代

一人々の賛成を思ひ煩ふ。絶対に行ふも差支
し得るものであらう。人々の評價は無限に多数で
ある。私のうき人々の賛成を求めてゐると、酒は言
ふであらう。しかし酒が美き人々と呼んでゐるのは、
酒の務めを行為を是認することの酒を人々の
ためのためにやるのかもしれん

一蜂の入つた鏡は鈍い音を出すが、それを二つ割つ
てみると、再び清い音を出すことのあるリフテン ジャン ポール

一自己及び他人の為め最も大切な光栄ある人間の仕
事、しそれは人が其結果をえることの出来
るの語の仕事である。ウマキン

一人が如何をなすべきかを問ふ。常に自己を呼ぶ神の聲
がまま〳〵〳〵世をもやうあるやうに

一他人をその必要とさんのみが自分の他人と必要と
なる人、とういのの人い幸福である。

一何をもまく自分を知る人は、何をもかしこ少しか愛
に尊敬を捧ぐる。

一口数少きこと程良き者い婦人の最上の装
飾である

一美しければ美しいほど、婦人はますます正直になる
のだ。何となれば、婦人の正直はよりてうんぬ
自分の美しさが生み出し得る最高に抗し
得るのだからレッスイング

○世界各国をジハウとなし、軍しむべきことのとなうも
おそるるに足らざるべしと雖、吾等も言はば時代から考ふれば
国家と併しジハウおよび金融家いうとなすことも少の
さんと、吾々も吾国の様なと同じことのと考へしめた。
然る此の熱力が実に此の陸軍さることもあ
るべきことを得た。今日ユダヤ銀行は倫敦ウ
ハ植民族は、此の民族はパレスタインの故郷こ生ん
ユダヤ人、今は国家を持ず世界に分散しもの民族
である。其の各国に於ける、其国籍を居しものあるよう
ある武耶教徒をなしたるものあるが決して猶
人以外の婦人とは結婚せず、国家を持ないが世
界に散乱してゐる此民族の特神的に彼会しも

あるは彼等の歴史を得り四海へと流れ、随分苦難を経
けれども難儀をしてゐる、殊に羅馬帝国ないしドイ国
に迫いさん、後に流離の民となへた。久しい間法王庁
待を受けた歴史こそ実に、彼等の自然復讐の
血が流れてゐる。彼等が復讐手段に革命
を起さやることがある。ユダヤ国の被害を
の崩壊を来すことか其目的である。実に亡ん等の国
地位を高める為の手段もあるのである。彼等は
彩る迫害は日々を来す者多くの大きな資力を
有してゐる。彼等の極力つとめる人高
の卓越である。の彼等の主義命を必ず奉
くべき精神を有してゐる、今の所世界の大富豪

と云のことこゝの所猫大系の人である。戦争を起すとして
ル此の系統の力を頼らねば出来ない
猫太人は其の司命を握つてゐる、みなロスチヤイ
ルド家も猫太財閥の首領で、世界の猫太銀
行を連絡した其力は実に洪大のものである。どんな国
でも金が無くてはどうもならぬ。猫太人は革命家でもある。彼等は
注意を賊めらんとする、相当手腕のある人物でも
かゝる出て来るのである。国の政治の機械を命
つてゐるものゝ、其の身元を調べると多くは猫太種
であるの法王軍人全部かく出版されたあ江仏仏
歩兵中佐の著した猫太の人々を使ひ国を

世界列国の政治を支配する猫太人
多いことは驚くべきを得るの地等国法王の政
部を握ることの敢て其国の政策を動かすのである。猫
太の精神は国の其経綸其目的を達せんとまるこ
とが主眼である。看よ革命は起る、為政者
にとやかしも革命の起きたのは皆猫太人の為
である。
歴史を辿ると十九世紀の末頃から猫太民族は武
断政策に変じ国民的意味を失へんとし
たことがあるが此時は新世主義は現はれなかつ
た、ヘルツル博士が出て全世界の猫太民族を呼び
猫太精神を生かしめた。ヘルツル博士の抱負を要約す

右手に革命を左手に金権を振かざして宇宙の支配者たらんとする世界の彼等の手先として来たるべき帰すべき先駆者たるいとびやかなる北の博士の主張するドクトリンはエホニズムと云ふてあるが、これが国民族の間のバイブルの如きものとして保護されてある。一時解体しかけつゝ北民族は北人をもつて世界国の統合が出来、世界大戦の後に、其時彼等が起し北新世界の勢力に国を信ずれば従来彼等を踏みにじり所も漸々彼等の進さと歩を揃へて其の勢力の最高潮に達する。彼等は世界を支配しようとする概がある。祖国を有たぬ北の不思議な民族の世界の統一の国をも有たぬ北の国の震災を国ぐるみとも思はれて、実に

花咲爺バチんスは[illegible]と沼の神がうるさいと思ふ。

政治部面の上層を立つてゐる人物の概ね猶太系人物

であり、国際聯盟の[illegible]

[illegible]民族[illegible]人物であり、世界の各方面の活動力ある[illegible]

持主は皆北の[illegible]の人物であり、活動家の大半は

[illegible]と北方の[illegible]

制し得る金力を握つて居る。彼等金力の聯合

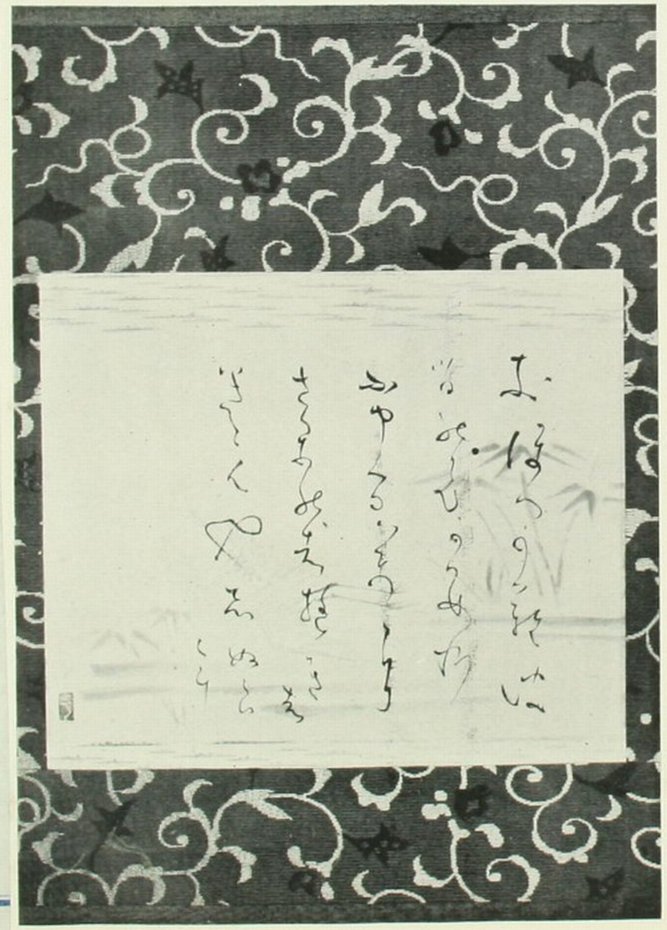
ハンドの国をも優勢である。どんな強国と雖も

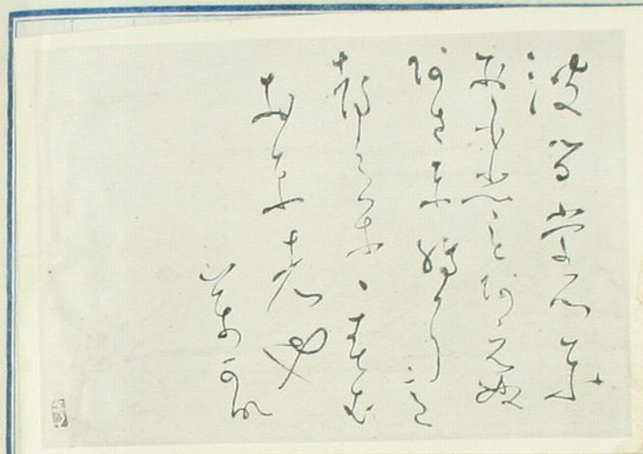
彼等の歓心を失つてはなりぬ。猶太のナチスが

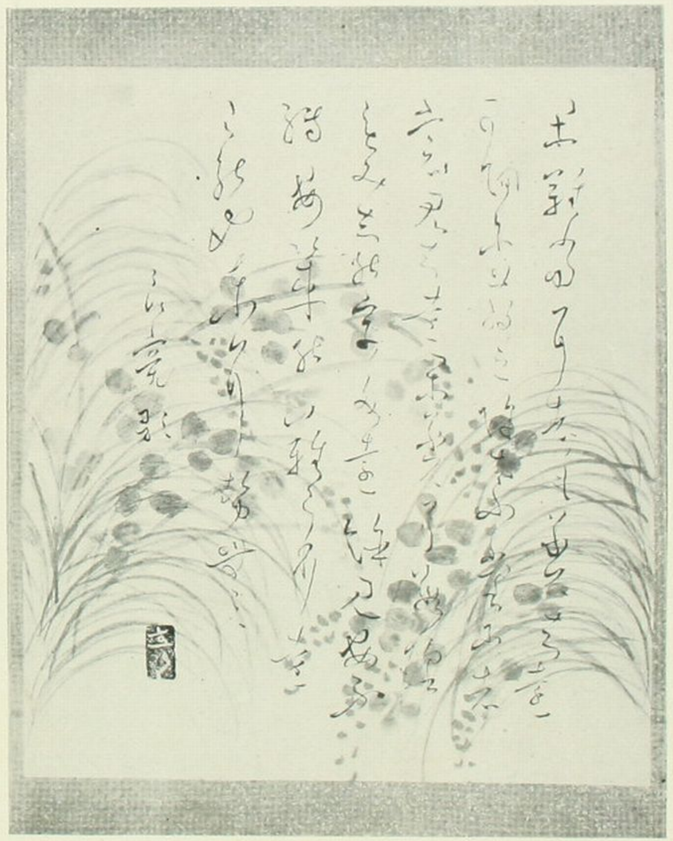
猶太民族を追放しようとしたのは大騒ぎとなり

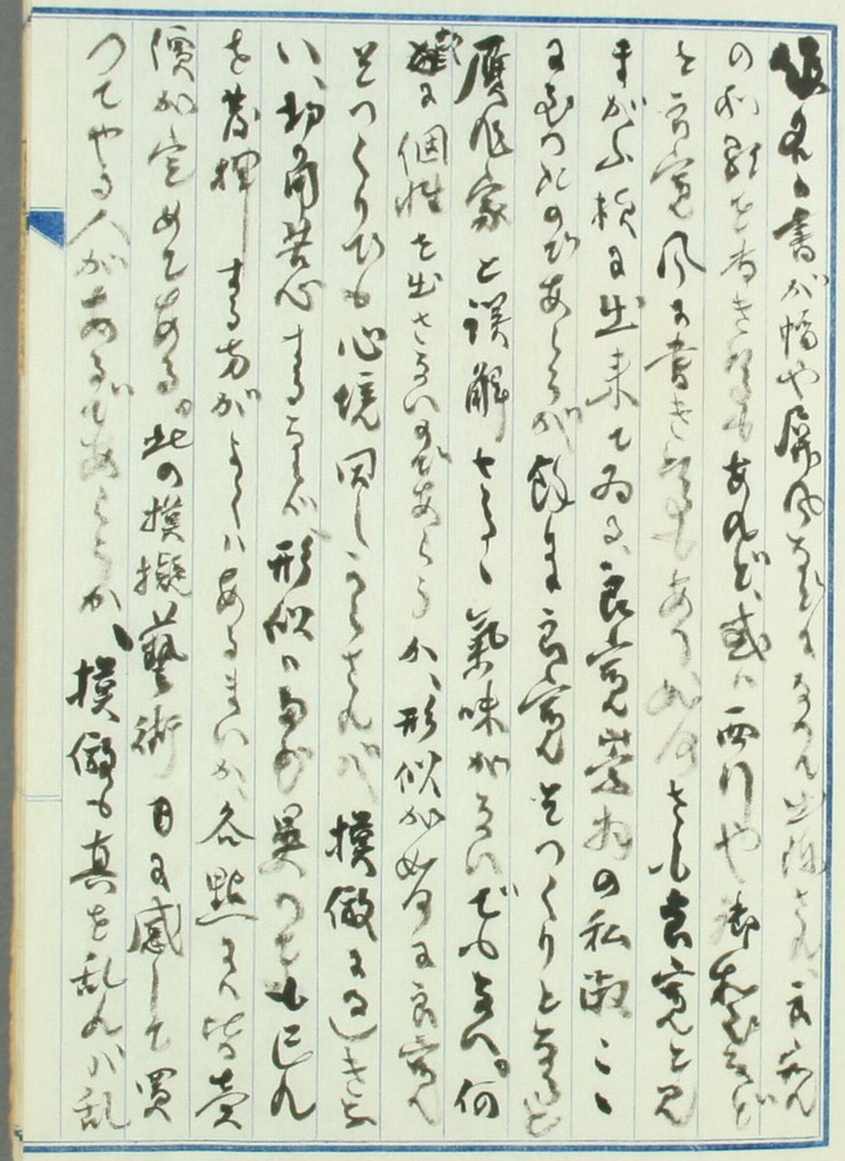
こ行いれなかつた。到底世界は[illegible]北の民

族と沼神[illegible]であらうと思ふ。書きの









良寛の書が悟や風格のみならず、或は画りや俳句をも含蓄する事は言ふまでもなく、また板の上に未だみる事の出来ない良寛独自の私画こそ風格家と深解さるべき義味かるべきである。何の個性を出さうとの意もなく、そつくりそのまゝ心境図しうるか、形似かめざる良寛い、切角苦心するべき模倣さえ出来ないのである。此の模擬藝術は自己感じて異を為す者が多くは各既に古人の模倣を真と乱んば乱

こゝに即つて感を記せばかすむ　八月十七日記

○山陽の書幅を齎し来り題を請ふ

瓶梅の一詩枕殺す小杯香雪未だ入らざるを

むしろ、詩筒と共に集に送す

香雪琴碁を後にし又畫をよくすと云ふ香

雪亮十遍とこゝに

瓶梅夜不御明粉欲睡移春

近卧休擬向夢醒燈晴處依

微聞得雪肌香

香雪は小杯光遠のこと也

No.

題香雪翁鼓琴小照短歌　四十歳作　昔詞の云り

近作一首録似

香雪老盟臺　寰

香雪作書畫。如其鼓琴。指所不到存雅韻。不必麻

姑搔處爬。黒痕痩硬拙藏巧。時為猫竹亦槎牙。陸沈

蒹門五十歳。狡獪戲人笑啞啞。空留遺像在人眼。脱

屣塵世如蜕蛻。吾題此詩郤踏跟。恐叫俗書著塗鴉。

猶憶斫北夕呼酒。一聲裂帛踏燈花。

○永仙石埭西梅堤本大幡山田寒山の為めに相
愛の二子の、甲辰元旦の筆、一詩を探す

北海人骨赤裸裸、滿室寒香書上書
又、曉月一天霜角最、卧枝劉護復相

石埭寒山せとお後

六月廿一日

○法号は埭士清水澄が美術論をまとめて、清水の号にかかる
どうかの論が詩方に起こるかと清水の関係がまくなんん
あるを。清水の前妻は宋代の同じ室蘭の出身
で清水の家の前田家の妻は輝びあつたとふか
ら書画と田園が多く、今の北海士も共しき家業相
と忘れわれ 糊を繕い時々自分も書画をやつてゐる

家人が紀香洲の定めるを定めてのどうかと新の子、澄の西洋浮世絵
澄の西洋浮世絵は、澄の妻の前田家の義兄を美術と因縁の浅いとはいへない。
殊に前田の前田家の義兄を美術と因縁の浅いとはいへない。
現今も妻の実家の義兄を研究の
現在の家族を
が春 浅井を挙げられたとも不思議ならいの感がある。

「北海道早稲田」序

早稲田は自分の第二の故郷である。否、自分の半世紀以上の生活と経歴とが北海道に絡んでゐることを想へば、第一の故郷とさへいふことが無理でないかもしれぬ。自分は早稲田一帯の地が水田と菜畑と満目茫々たる畑と、白晝狐が横行し、都下とは絶縁の寂寞たる郊外の市街であつた地名であつたことから北海道の名称である。自分の足跡を最も多く印した地、とりわけ北海道の名称を絶対に無い。

北海道半世紀間に於ける変遷、明治十四年の政変と大隈侯が冠を掛け野に在る人となられたことから端を発して、日本有数の学府が開かれ、忽ち年毎に繁昌の度を加へ、畑も埋めんとする新興の道路が開け、ここに殷賑の市街が起り、学府の発展と連れて用地が捗り、官等学校や運動場が学校の構内に設けられ、中学実業の諸学校も主として、未だ建築が煙化洋館を化して、大隈講堂を始め学府内の諸建築物は美観を誇つも雄視する全の地、自分等の地の変遷の跡を偲ぶ場合のことがある。

早稲田は世界の学者を[illegible]
た。早稲田の[illegible]記[illegible]今の都下の一大名所となる
と毎々思ふことがあるが、まづ第一に書かねばならぬ。自分
は本来ちょっと隠居[illegible]始めるに意味が早稲田大学の
五十周年を迎へた時、試みに早稲田の裏面を聊
か叙し、大学の今昔を記し、亦大学と密接した師友
で既に故人となった人々を記し、当時の
早稲田の[illegible]報を連載したことがあるが、早稲田の[illegible]追憶
は此等の記事で盡きるのであるが、[illegible]追憶を折
々[illegible]ちいちゃ[illegible]まだ極めて不完全である。

自分の回顧録は早稲田の学問から、早大開校後二三
十年間の事が尋ねられるが、此間の事も記憶が薄か
でるに所かく、過ぎ去ってもう[illegible]。最近十数年間
の事とは、自分が隠退後自然早稲田と疎遠となる
事情を多い為めに多く語ることが出来ない。殊に現在科
方面に語るべき重要の事が[illegible]
門の漢ひある自分の意[illegible]
を由義[illegible]
自分は老後の無聊を慰る為め駄随筆を折々出してみる
が、実は無意味な随筆を書くにも、随筆早稲田

ことを
業を著しくべきかと北沢氏集会はいと地盤さえ材料を得る
スハ多少の活動を家庭[illegible]が[illegible]が[illegible]が[illegible]が[illegible]
書き溜めもうる抛擲スル附ーて長を是非出版セ
ずと勧める人があり多く損補の遑もなく数年来
意を任し此が[illegible]こんを[illegible]第一[illegible]早稲
田を知る資料[illegible]試[illegible]外の[illegible]ある。
幸

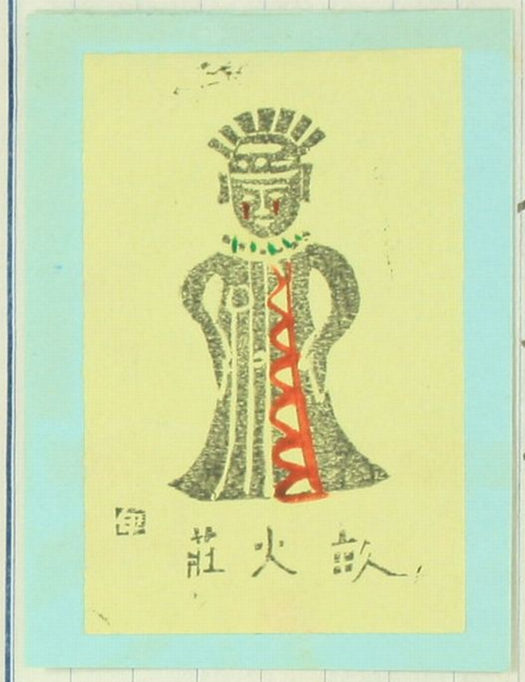
昭和十年六月

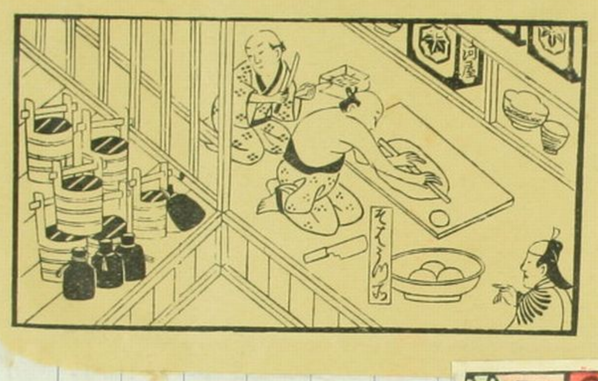
春城識す

○七月號の文藝春秋に吉江孤雁氏とある數学者
者の数学漫談が載せられてゐて、数学の大切さ
面白く説かれてゐる。左の一節は、私の言ふ
ー[illegible]数学を廉価の材料だとするのは
変な話だ。文化は数学の結果であることを思へば、数
学の者の立場から[illegible]崇高の精神が[illegible]ある。

三十五、六年前のことだが獨逸に留學中ゲッチンゲン大學の大數學者クライン博士の講義を聽いたことがあつた。談適々當時獨逸に架せる大鐵橋の話となつた時氏は言ふ、米國にて架せる鐵橋は多量の鐵材を充分に使用してゐて立派である。我獨逸では鐵材は高價だが、幸ひ數學が安價だから之を充分使用して堅固な橋を架することが出來る」と。この比喩は巧みに純正數學と、その生活に齎らす恩澤を物語つてゐる。我邦は鐵、石油其他の資源に決して豐ではない。しかし安價な數學で國家繁榮の道を拓くことが出來ると思ふ。

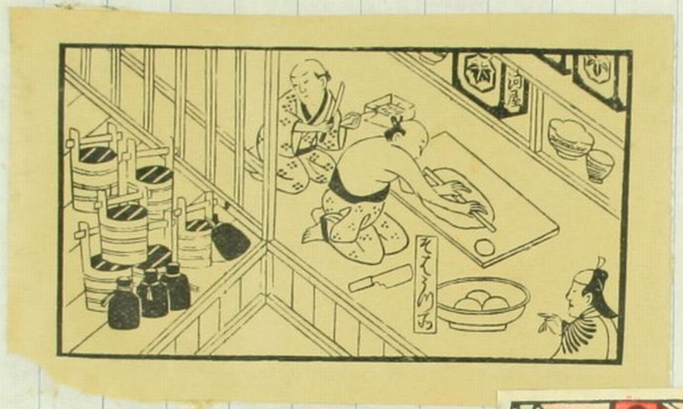
○奈良の歌火御燈明と云て極彩を施したるものの高
大小種々あれども白合の茎中にも男女の拵ヘ二茎を
あるも丸じんに拵て夫人花瓶を除くの一個を結び
夫の香人山の上を採つて制むすと云ふ





食行脚の
方々も
そだては
や物忠と
申されて
居ます

有下雅郡川中里
甲物忠心
電小石川六九三



橿原燒に就て

橿原燒は神武天皇が中洲を御平定になりまして、都を大和國畝傍に奠られ、橿原宮に三種の神器を大殿に御安置なされて大和三山の一なる天香久山の埴にて祭器を作らしめ祀りたまふ、之橿原窯の始めであります。

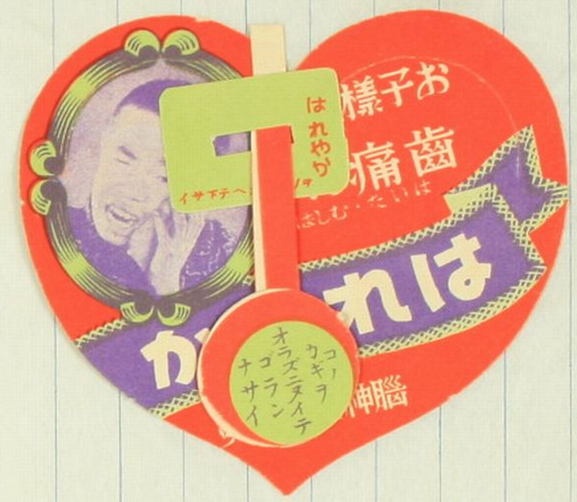
當畝火莊の作品はすべて、天香久山、並に、神武山陵近郷の埴にて製し、形象は、上古時代、神代時代、寧樂時代、の遺物を東京、奈良、帝室博物館及び考古學諸先生の參考書より拜學知識を得て製作したもので御座います。

窯元　畝火莊　識

奈良市登大路町四〇

畝火荘

電話 大和國三山ノ麓（畝火荘）
最寄ノ駅 大和橿原線畝傍駅前（天平荘）



生活の側外

早大名譽教授 市島謙吉

私のオアシスは酒です、私の健康はこれで保たれてゐる

この問題はこれで消されて、私昨今の暑天に

なつて困つてゐるが、台所の酒のある間は雨がなくても節約を講ずに差支はない、酒は全く私の生活のオアシスです

評論家 池崎忠孝

特に生活の息抜きといつたようなものは必要としませんが子供たちと一緒に御飯でも食ふことは一種の息抜きといへるでせう、

わが國の家庭生活は、一見頃項なところもありますが、やはり家庭なくては生きられるものではありますまい

家庭の調和

大阪毎日新聞

銀座の姿態・昔と今

銀座と私

市島春城

自分は銀座に相當長い間の緣故があるので、今でも隙目位に銀ブラを試み、散策といへば必ずこの方面に足がむく。自分の青年時代始めて田舍から東京に遊學した頃は、既に銀座に淸風の棟瓦家屋が、軒を連ねてゐて赤毛布の眼を驚かした。銀座は新橋の停車場にも近く、首府の表玄關ともいふべき所であるので、明治政府もこゝに標本的文化政策を試み、新府の誇りとしたのであるから、オールド・スタイルで今の銀座とは似ても似つかぬものであつた。外出雲町といふ處は銀座の裏通りで藝者屋が軒を列ねてゐる狹斜の巷であつたが、同窓の山田喜之助がこの藝者屋の眞ん中で一軒家を借りて、こゝに練習事務所を設けた。自分はその頃東京新聲社記者として名高かつた服部龍太郎氏と同じく外務省事情といふ雜誌を慣行した。服部の事務所は銀座の裏通りの尋づれにあつたが、編輯所があまりに狹くて山田の事務所で九春社といふ新聲を借りて、こゝに編輯所を設けた所である。無裏であつたが、ある朝訪れると、山田のいふには昨夜一晩中眠つたものは夜市で、柳條の垂れ下つてゐる所に種々の夜店が開かれ、その頃は可なり掘り出しものがあつたといはれてゐる。今の服部時計店の先々代などが時計を大道に賣つた頃である。その柳の情調が忘れられずに柳の街樹が東京朝日の紙上で復活したがその頃の情緒はそれほどに回復したとは思へない。

伊藤書記官が或時老妓に語られた話しに新橋藝妓ももとは三人しか居なかつたといはれたが、美人は政權と共に移るもので、銀座が退轉衰滅になると、上方の美人はみな東京へ移つて來た。そして銀座が東京の女王である所から、皆女王に腰を捲へた、それ故に新橋は美人の滅亡となり、それが淺れて赤坂あたりにまでも及び、銀座は眞に頭金であつた。多くの料理屋待合も銀座の裏に寢つたのも偶然でないが、二十間地あたりには、鮨屋で大村屋といふ家もあつたが今はどうなつてゐるか。花月などは藝者の式をかへて今もやつてゐるが、幾十の料亭店の變遷などを尋ねたら、相當の興味もあらうがもはや眼られた紙が盡きたからこゝに筆を擱く。

北支政

一

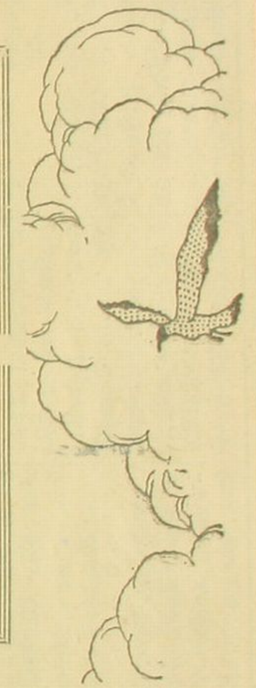
濠洲國成立以來その政治組織は春々と整備整頓してゐるが、元來この三千万民衆中には種々な民族が多數混在し、その數の上から見れば漢人種が相當に多い、從つて獨立國にはなつたものゝ、隣國たる中華民國との關係は依然として密接なるものがあるので、例へば前國務總理顧孝貴氏の令息顧華君が亡くなられると、氏はその遺骨を故國たる蘆溝に葬つたのであつた。馬に乘かせたのだから、馬車で、大臣たりとも心は未だその郷關の地を離れ得ない殊に移民の大多數は山東、河北の生れであり又河地方には山西の人もゐるからこの人々の同族觀念は、皆中華民國に住むといふわけで、人を中心とし經濟關係を主として考察すれば到底解つことの出來ない關係

二

……の頃の銀座の街道はとは鐵道馬車などいふものがあつて、人力車の電燈が金銀……いふと、交通機關としてなかつた。

……の人力車の人力車の人力車

銀座の姿態・昔と今



市島春城

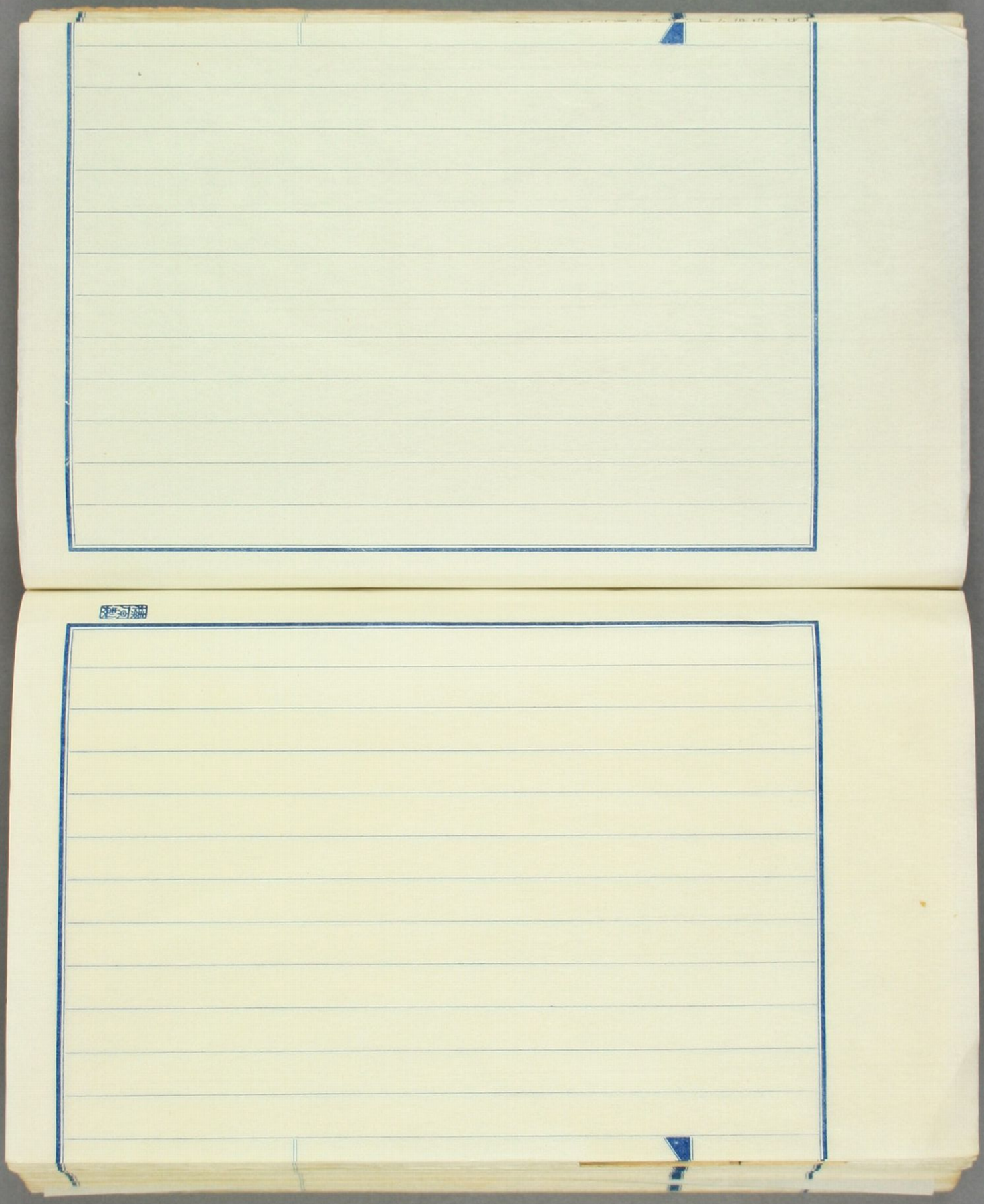
自分は銀座に相當長い間の縁故があるので、今でも隙日位に銀ブラを試み、散策といへば必ずこの方面に足がむく。自分の青年時代始めて田舎から東京に遊學した頃は、既に銀座に洋風の煉瓦家屋が、軒を連ねてゐて赤毛布の眼を驚かした。銀座は新橋の際戦場にも近く、首府の表玄關ともいふべき所であるので、明治政府もこゝに標本的文化煉瓦を試み、「新橋の繁りとしたりである」と謳歌の樹式は今から考へると、オールド・スタイルで今の銀座とは何でも似つかぬものであつた。外部は煉瓦構造で、中に畳が敷かれるやうになつてゐた。政府は貴僚も華族も許し、しきりにこの新住宅に住まはんと事を慫慂したが、落戸の狭小を好まない都人士はこゝに住むことを厭ふて容易に政府の勧誘に應ぜず、一時は空家が多かつた。併し文化の魁を以て任ずる藝家者は過々この煉瓦町に來り投じた。（その頃は銀座を煉瓦町といふてゐたやうに思ふ）當時五大新聞といはれた新聞社の内、報知だけは築地堀に社があつたが、他の東京日々、京濱毎日、都新聞、曙の四社はこの煉瓦家屋に看板を掲げた。五大新聞外ではあるが、讀賣新聞も今第百銀行のある銀座へ毎日通つたのは讀賣の社員であつた頃で向ひ側に松田といふ大衆向きの料理屋があつた。

この料理屋は今の目黒の雅叙園の如く田舎者おどかしの豪奢で特に豪華な便所を作り客を惹きつけた。吾々讀賣社のうちに晝の食事はこの家から取り寄せたが、蒲鉾山で安かつたので中々繁昌した。下駄の番號が百に達すると下足番が「番號つけに大聲を發することが例であつた。銀座の新橋寄りの端れにも大衆向の「千とせ」といふ料理屋があつた。蓄音器品目の所在地だがこれは松田よりも繁昌しなかつた。

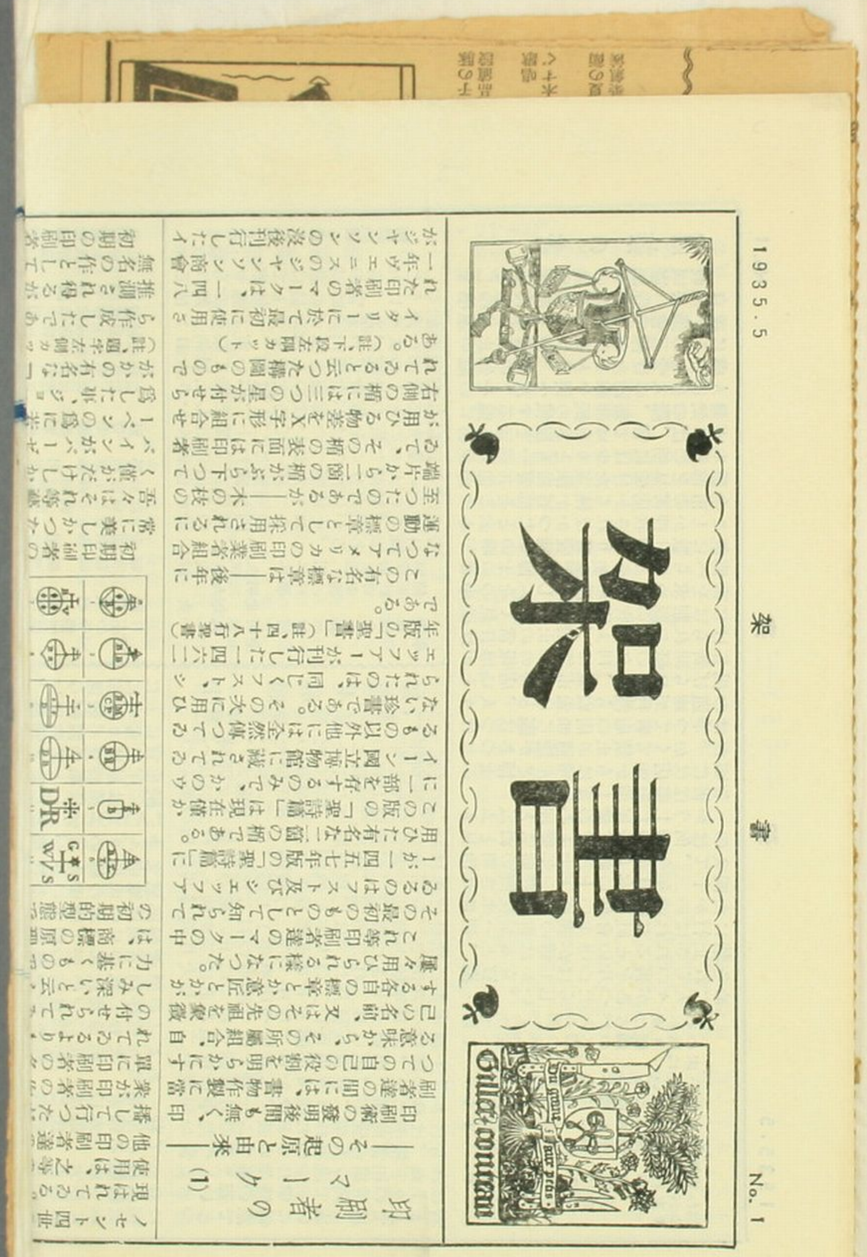
新聞社で大政官御用の看板を掲げ堂々たる大廈であつたのは東京日日新聞社で吾等は大學在學中築地堀一部を社に泊ふてその機上で學生に政談を許すの可否をこの家は繁盛比類屋の店であつたので、その頃に盛を誇する無比の大畫幅が掛けてあつたことを想ひ出す。この時分銀座に目ほしい酒店といへば銀田町香の稲荷水といふ酒を賣る東京堂と、岩谷松平の煙草と藤醒酒を賣る店であつた。岩谷は天狗といふ綽の看板を貴つたので岩谷松平といはずかなか宣傳上手で店先に「勿論舟は金十万圓」と書いて家禁を掲げ、天狗日刊新聞紙の看板で新聞社出張町といふ國は銀座の裏通りで藝者屋が軒を列ねてゐる狭斜の巷であつたが、同窓の山田喜之助がこの藝者屋の眞ん中で一軒空いてゐる家を借りて、こゝに繁慶事務所を設けた。自分はその頃東京繁慶記を著して名高かつた服部誠一と共同して内外政事情といふ隔日の新聞を撰述した。服部の編輯所は銀座の裏通りの寺づれに九春社といふ貸家があつたが、編輯所があまりに狭くて窮屈であつたので山田の事務所で編輯した。山田はこの頃自分で見ると、山田のいふには昨夜一晩事が起つて今朝はまだ朝飯を喫せぬといふ、ナゼと問ねたら、藝者が氣まぐれに夜遊ひに自分を襲つたので、昨夜の内に放逐したといふので朝食を食はない訳がわかつて一笑した。丁度この山田の事務所の窓から物干傳ひに、寡多の色の女中が、客ありとも覺へないこの家に來るので、この頃も兩人で出かけたが

HIRO

考てがあッ一『芋ぜか蕎かの



○印刷の術の[illegible]漸々山形と面[illegible]が後成[illegible]
[illegible]が文の面[illegible]ので、北[illegible]
い漸々[illegible]を[illegible]酒奥の音頭
が出来れと印刷の[illegible]
の所[illegible]辰田と[illegible]
素を[illegible]人[illegible]ことの[illegible]
[illegible]ことがある、二三旬前[illegible]自
動車のドライブを試み、久方振[illegible]
人[illegible]ことがある、自分の家のあと方もあるが、
此の頃谷の山よりの[illegible]
[illegible]年期の遺[illegible]
[illegible]と恥らしめん。



昭和十年五月十五日発行

No. 1

書

1935.5

印刷者の一クサリ

（1）

——その起原と由来——

印刷術の発明は、人類の文化に対する最大の貢献の一つであるとは、誰れもが認めるところである。

印刷術の発明は、人類の文化に対する最大の貢献の一つであるとは、誰れもが認めるところである。

昭和十年五月廿五日發行

架書

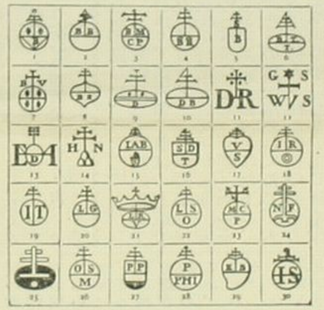
印刷者のマーク(1)
——その起原と由來——

印刷術の發明後間も無く、印刷者達の間には、書物作製に當つての自己の役割を明らかにする意味から、その所屬組合、自己の名前、又はその先祖を象徴する各自の標章とか意匠とかが屢々用ひられる樣になつた。

これ等印刷者達のマークの中その最初のものとして知られてゐるのはフスト及びシェッファーが一四五七年版の「聖詩篇」に用ひた有名な二箇の楯である。この版の「聖詩篇」は現在僅かに一部を存するのみで、かのウイーン國立博物館に藏されてゐるもの以外他には全然傳つてゐない珍書である。その次に用ひられたのは、同じくフスト、シエッファーが刊行した一四六二年版の「聖書」（註、四十八行聖書）である。

この有名な標章は——後年になつてアメリカの印刷業者組合運動の標章として採用されるに至つたのであるが——木の枝の端片から二箇の楯がぶら下つてゐて、その楯の表面には印刷者が用ひる物差をX字形に組合せ右側の楯には三つの星が付せられてゐると云つた構圖のものである。（註、下段左隅カット）

イタリーに於て最初に使用された印刷者のマークは、一四八一年ヴェニスのジヤンソン商會がジヤンソンの沒後刊行したイノセント四世の「教書集成」に現はれてゐる。かくてマークの使用は、之等の先驅者に續いて他の印刷者達の間へも急速に傳播して行つたが、之は、讀者大衆が印刷者の作品に接する際、單に印刷者の名前のみが付せられてゐるよりも、獨創的な標章の付せられてゐる方が遙かに親しみ深いと云ふ一種の商業的魅力に基くものであつた。即ち之は、商標の原理を適用した場合の初期的型態であつた。



初期印刷者の意匠の多くは非常に美しかつたが、不幸にして吾々はそれ等藝術的作品中の極く僅がだけしか知らない。ホルバインがバーゼルの印刷者フロベンの爲に若干のデザインを爲した事、ジョフロイ・トーリーがかの有名な「壞れた花瓶」（註、題字左側カット）の構圖を自ら作成したであらう事は確かに推測され得るが大部分のものは無名の作として殘されてゐる。

初期の印刷者のマークは書物の卷末にある奥附に付せられたものであつた。然し、タイトル・ページの發達につれて、當然印刷者及び出版者の標章は、卷頭の印刷者の署名に續いて付せられる樣になつた。近代の意匠の中には書物の最終ページに現はれてゐるものもあるが、大部分は卷頭に付せられるのが通例であつた。

多くの標章が象徴する所を區別すると數種類に分つ事が出來る。紋章的なものを除いて、最も多く使用されてゐるのは印刷者の名前に因んだ構圖である。例へば、チル・クトーがそのマークに數木のナイフを並べ（註、題字右側カット）ミッシェル・ル・ノアールが黑人の首を示し、パリのドニー・ロース、リヨンのチェルマーン・ローズが薔薇の花を用ひ、リヨンのメーイエ兄弟が楯の中央に木槌を表はしたが如き、商標の原理を適用した場合の初期的型態であつた。

次で十字架を載せた環の組合せがある。——近代に至つて、ある有名なソーダビスケットの箱の端に貼つてある貼札で親しまれてゐる型の標章であるが——この型の代表的に優秀なものはヴェニスのオクタヴィアヌス・スコトウスのマークである。ロバーツはそのモティーフを把えて一枚の圖板に三十種のマークを作り上げ、以てその構想が有する保有性の豊かさと、表現の多彩なる變化とを示してゐる（註、中央カット）。斯る象徴の正確な意味は詳しくは分らない。ドラレンは、その印刷者とある宗教々團との關係を意味するものであらうと考えた。恐らく、斯る場合も存したであらうが、然し、一方には單なる模倣と云ふ外説明が付かない場合もあつた。（つゞく）

フスト及シエッファーのマーク

配した。斯の如き所謂「語呂」に因んだ意匠の例は數限りない。

印刷者がマークをデザインするに當つて、最も多く示唆を受けたも一つの源泉は次の如き明瞭な一事にあつた。即ち、十五・六世紀頃の店鋪の所書は、店の外に掛けてある看板によつて屢々示された。從つて、一度店の看板の意匠が定まれば、店のマークにも同じ構想を用ひる事は極めて當然の事である。

印刷人　東京市牛込區赤城下町八七　竹下了
發行所　書架社

國禁の書

我國憲法學の最高權威として自他共に許した美濃部博士の學說が議會で攻擊の的となり、遂にその三種の著書が發賣禁止の處分を受けたことは、世の知識人に多大の衝擊を與へた。その發禁の際、新聞紙の報ずる處によれば、管ては古本屋古ふ古本屋の棚に少くとも一部乃至數部を見受けた憲法撮要其他が全市の書店から僅か百部そこそこしか押收されなかつたと云ふ。既に數日前より發賣禁止の噂が傳へられ、美濃部博士の著書を求める客が激增し（その中には制服の官憲の姿も多く見受けられたと云ふ）禁止の當日は各新聞紙の夕刊に禁止の報導が掲げられると、全市の書店にその通達が行渡らぬ先にと、人々は爭つて書店の店頭に驅けつけた。かくて禁止の通達があつた頃には店頭からは殆んど博士の著書は姿を消して居た。

のは何時の時代でも變らぬと見えて、今から約三十年前の明治四十三年日本の上下を震慄させたかの幸德事件の直後、從來世に行はれた社會主義の書が一切禁止されるとの噂が傳はると、それらの書を片つぱしから買集めた人々があつたらしい。

わが友は古びたる鞄をあけてほの暗き蠟燭の火影の散らばへる床にいろいろの本を取り出したりそはむかしの國にて禁じられたるものなりき　赤紙の表紙手擦れし　啄木

國禁の書を借りてゆくかな　千鮫寞果

書を行李の底にさがす日　啄木

わが友の、寂寥の下の、鞄より

これらの詩歌にて察せられるやうに、當時の最も敏感で熱情的だつた若きインテリゲンチヤの一人、石川啄木も、東京朝日新聞の校正係として働いて居たが近く社會主義の文獻が禁止されるとの報が傳はると、乏しい財布の底をはたいて二十冊近く買集めたのだつた。これらの書名の大部分は啄木研究家吉田孤羊氏の努力に依つて明かにされて居る。左がそれらの國禁の書の目錄である。

無政府主義　明三九　久津見蕨村
純正社會主義　明三九　北輝次郎
純正社會主義の哲學　明三九
社會主義の經濟　明三九

社會進化論　明三七　田添鐵二
社會主義評論　明三九　千山萬水樓主人
國際平和論　明四二　石山嶺治
新社會政策　明三七　大杉榮
社會主義研究（合本）
社會の進化　明三六　高橋五郎
社會主義活辯　明三六　クロポトキン
THE TERROR IN RUSSIA
社會主義綱要　明四〇　森近運平
平和主義　明四〇　堺利彥
社會主義神髓　明四〇　幸德秋水
社會と主義　明二八　柴田由太譯
帝國主義　明三六　幸德秋水
秘密結社　明三三　モーレー著
リギヨル著
前田長太譯
社會主義　明三一　村井知至
日本の勞働運動　片山潛
堺利彥

初版本解題 (1)

一、岩佐屋星『愛の詩集』

昨年のことだつたか、詩への訣別を宣言して萩原朝太郎氏を長嘆せしめた尾星氏の處女詩集「愛の詩集」は、著者二十八才の時の自費出版であつた。發行所は著者が萩原朝太郎、山村暮鳥、多田不二、恩地孝四郎氏等と共に詩誌「感情」を發行した感情詩社、發賣所は本郷三丁目の文武堂であつた。大正六年の十二月に出版されたので、奥附には大正六年十二月二十日印刷、正七年一月一日發行となつてゐる。發行部數は五百部、定價一圓二十錢、出版費用に百五十圓位かゝつたが、發賣所から著者に渡された額が二百圓位、一月中旬には全部賣切れたと云ふのだから、相當の大家のものでさへ賣れぬと相場の決つた詩集として上々の成績で、當時の若い者としては、大いに得意であつたに相違ない。

本の裝幀は恩地孝四郎氏の手になり、四六判、眞紅の表紙で背にはゴチツクで愛の詩集、金文字があり、表紙には横に牛星詩集と LAMOUR LA POESIE DE と書かれた下に、ネルリの首が描かれてゐる。本文中に挿入された四枚の挿繪も恩地氏の手になり、他に清水太郎氏の木版カツト二個がある。卷頭には、同年中亡くなられた著者の父への献辭が書かれ、北原白秋氏の二十四頁に亘る長文の序、及び自序六頁其他がある收むる詩篇五十一、大正二年より大正五年に至る間の作品である。

卷末にはこれ又十七頁に及ぶ萩原朝太郎氏の跋文が添へられてある。

再版は大正九年八月、聚英閣から出版されたが、裝幀、紙質共に初版本に較ぶべくもない。

東湖堂放言 (1)

★物云はねば

古本道の馬の脚、無學無能の若輩東湖堂が、柔々しくも「東湖堂放言」などゝ銘打つて何か物申すのだと御聞きの方は、御客樣も先輩諸氏も「何と國々しき男かな、笑止千萬」と愛しめさるゝ事とは重々承知致して居ります。

されど「物云はねば腹ふくるゝ」と古の人の申せし如く、私の如き小人は、一時の恥を忍んでも思ふ事を卒直にぶちまけて、さて其上で大方諸賢の御明察を拜ぎ、是は是、非は非と忌憚なき御叱正を賜つてこそいくらか悧巧になるものだと、甚だ厚かましい考で、思ふがまゝを述べて見たいと存じます。

どうせ、しがない古本屋渡世の極めて狹隘な視野に浮かんで來る事柄を斷片的に記すのでは、大した種があるわけでもなし、只一回で筆を折るか、さもなければ身邊雜記を半のよだれと書きなぐるのが關の山でせう。

いづれにしても小人のつれ〴〵なるまゝの放言故、無禮な文句やお門違ひの饒舌は、笑つて御見逃しの程を！

★論語讀みの論語知らず

私も、古本屋渡世を開業してからもう五ケ年になる。斯道の先輩や、神田のお店に八年、十年と修業されてゐる方々から見れば、「もう五ケ年」などとは滑稽至極であらうが、「偶然の機會が、ずぶの素人をして古本屋たらしめた」といふ筋合の私にとつては、本當に「もう五ケ年」といふ氣がするのです。全くの素人が何等の手引も指導者もなく、古本商賣を自己流に解釋し、自己流にやり繰りして來た五ケ年は短い樣で長いものでした。

然し、五年を經た今日此頃、お客樣や先輩の方々から時折「何か抱負でもあつて古本屋になつたのか」とお尋ねを受ける時、文字通り穴があつたら這入り度いと思ふ位です。「もう五ケ年」と云つた私の言葉は、單に十ケ年の二分の一の年月を道想する嘆辭ではなく、何等の抱負も方針もなく漫然と古本をあつかつて來た自己の無能さ加減に對する嘲笑の辭であり、今猶、無爲無策に足ぶみしてゐる自己へのさゝやかな反省の辭なのです。

「論語讀みの論語知らず」と云ひますが、「古本屋の古本知らず」といふ諺辭典にもない文句が、どうも此頃私の頭にこびり付いて離れないのです。

★以て銘とするに足る

「インテリ出の古本屋さんは、いかにも物がわかつて、あかるくて、朗らかで、氣持がよいだらうと、大概の讀書家は想像するにちがひない。

然し、その全部とは云はないが、多くの人は、いかにもケチで、氣が小さく、物わかりがわるく、疑り深く、不親切であることを發見するであらう。

これは、いかにも不思議だが、一つの經驗である。吾々が古本屋タイプとして、純粹の商人的古本屋を蔑視してゐる間に、それら古本商人の一部が、益々讀書家と親しく手を握つて商賣をやつて行かうとする傾向のあるのはうれしい」

之は古典社發行「圖書週報」最近號に於ける週報子の言の一節です。私の知れる限りの事實によつてもこの言葉を强く否定し去る事は出來ない樣です。

私は、この言葉を「以て銘とするに足る」と云ふに止どめて置きます

日本を語る（八）

繪馬と千社札（下）

高橋　仁

雜誌「國本」切抜

◇

千社札もやはり日本人の內面生活を物語る一種の藝術品である。これにも專業者はゐたが、二三字乃至數字を以つてせる堂宮專用の墨札から名刺代りに使つた色摺のものに至るまで皆な十人十色である。今それを說明する前にざつとその由來を語つておかう。

長德元年は西曆九九五年、皇紀一六五五年である。花山入覺法皇が御出家の後に紀州熊野の那智から美濃の谷汲までの佛蹟を巡り一個所に御詠歌一首づゝをお遺しになつたとき石摺御判の納札を以つてせられたといふのがこの千社札の濫觴であるといはれてゐる。前にもちよつと叙べたやうに、その名は千社詣といつて同地方の堂宮千社を限つて巡拜したときに一枚づゝ貼附して記念としたところから起つたものだが、日本人がいかに敬神崇神の念に厚い國民であるかといふことは、茲にもよく顯はれてゐるだらう。

然るに納札は單に落書の進化したものだと唱へてゐる人がある。「宗因千句」に

案內しりの旅の道行

落書はあの辻堂やこゝの宮

といふ聯句がある。神社佛閣に參詣するもの、殊に遠國へかけて詣づるものは「何年何月何日、何國の住人何之誰、同行何人」などゝ堂宮或はその邊り處嫌はず矢立の筆をとつて落書きすることは、古くから行はれてゐるから、その神聖を瀆さないためにかういふ一つの形式が現はれたものとも思はれぬこともないが、もとは祈念の表徵すなはち信仰に本づいて巡拜の心を記念したもので、その後世のごとく藝術的にも取扱はれて大に流行したのは、一つは賣名の欲も伴つてゐたには相違ないにしても、單に落書きの進化したものとばかり解釋することはできないのである。これを言ひ換へると、落書きはもと人間の先天的に近い性癖であるが、それの延長のみとしては少しの意味もなさぬことで、やはり他に働きかける有力な或る物があつてこそ、始めて發達したものと言ふべく、その對照物たるものは、すなはち神佛である。而かも納札は繪馬のやうに各地に亘つて全國的に行はれたものでなく、それとも亦意味を異にして都會の或る特殊階級に多く行はれたところが興味ある現象で、就中江戸人のごとき宗教上における端的な市井人氣質を知るには最もいゝ便りとなるので

ある。

◇

吉原かぶりの半合羽、股引脚絆に裾を七三に褰げて、手に女夫刷毛をさし繼竿を持つた姿は、幕末から流行した千社詣の風であつた。今も稀にさういふ鯔脊の風のものを、近郊の途上に見かけることがある。これを創めたのは、雲州の儒官鳩谷天愚孔平と號した萩野喜内である。その傳記は「百家畸行傳」「曲亭雜記」「武江年表」などに審かである。これが安永年間で、これに亞ぐは小石川の天幸、麹五吉、鳩谷驛の三思、千代田玉加、芝の八官平、蘭華子守法などである。同時に京橋三十間堀三丁目の長島銀市方で江戸大寄合ひとふ名のもとに始めて納札交換會が開かれた。寛政十一年四月五日のことである。それより前同二年に青山梅窓院に同じ會があつたといひ、また降つて文化四年に上野二本杉原に催されたといひ、その嚆矢について二三異說はあるが寛政十一年說が最もたゞしいらしく、尙ほ仲間が二本杉原に毎月晦日兩大師の遷座を記念して墨札の交換を行つたことは「花の上野晦日の夕暮」と題する寫本に明細である。その貼札の法は、堂宮の屋根裏や山門などの高所に貼るに長竿または振出し、繼竿の先へ刷毛をつけ、これに糊附の札を持つてゆくのだが、その貼りえない所に貼るのが自慢であつた。その他手貼り、投げ貼りなどゝいふ法がある。投げ貼りといふのは、水に濕した手拭を丸めて、これに札を載せ、その貼らうとする所へ覘ひを定めて打ちつけるので、熟練しなければできない藝である。

昔は處の辯へもなく濫に札を貼ることは官よりも禁ぜられてゐたので、彼等はその達成するときは諸願成就といひ、また仲間に對する誇りにもなるところから之を潛かに敢てしたが、天保の頃に「のげん」といふ男が芝の廟所へ貼つて遠島に處せられたことがあり、兩國の「なたり萬」は安藝の宮島へ貼らうとして失敗したが、明治十三年八たびにして辛うじて本望を遂げたといふ。それから高所へ筆をぶつつけに落書きをする名人もあつたこれを發見されて處罰されたものもあつたさうだ。話はそれとちがふが、この連中は菩提札といつて、仲間が死んだときは、その題名貼札を打つて弔ひ、また忌日には追悼會をもよほし、故人の巡拜した寺々を打つて歩いたもので、今はあまり行はれないやうであるが、これらは市井人の通性で、むしろ愚德に近い日本人の特性と言つて差閊へなからう。

◇

堂宮に貼る札は今も專ら墨札である。名札代りのものは必ずしもそれのみと限らず、人物乃至鳥居などをゑがいた一二度刷のものから極彩の錦繪風のものもある。それが宮政の頃から漸く流行して、交換會には小祿の旗本の隱居、御家人、手習師匠、諸商人、職人といつた手合が集まり、後には櫻連、巴連、笈摺連、八角連、千代田連などゝいふ團體が江戸の市中に割據して勢力を爭つた。文化文政

から天保の頃へかけて最も著名なるものは「源加一」といふ神田お玉ケ池にゐた幕府のお坊主で、氣骨稜々たる俠客肌の男、それから赤坂新町四丁目にゐた旗本の隱居「赤圓子」で、脇差に繼竿を仕込んで札を打つて歩いたといふ變人、次に「坂田つ」といふ神田紺屋町の道具屋辰五郎、「ヤリ市」といふ京橋物十郎町の鐔屋市五郎、「ぱす金」といふ深川海邊大工町の飼馬屋、「山山定」といふ青山五十人町にゐた幕府の御家人、「日比鐵」といふ八丁堀水谷町の百人組頭取鐵右衞門、「銀谷留」といふ銀座四丁目の瓦師六右衞門、「瓦桝」といふ芝二葉町の瓦職桝五郎、「八官松」といふ芝口一丁目西側にゐた大工職松五郎その他數人である。その中には名人畸人といはれる人物が多く、稍降つて「兼牛」といふ神田皆川町の錺職兼保牛次郎、「馬具兼」といふ神田旅籠町の馬具職小泉兼吉なども斯道の奇行家を以て知られてゐた。そして彼等の千社札は藝術的にも一と辯もつてゐたことは今も猶ほ往々處々の古社寺に見るとほりで、今から七八年前に死んだ考古學者の山中共古翁は鳩谷以來のこれが蒐藏家として知られてゐたが、恐らくまだそのまゝ保存されてゐることであらう。

◇

江戸にかく納札の風が流行したのは、寛政の初め武家が馬の遠乘りをするときその目的地を彼等が弓矢の神として崇信する府內八個所の八幡宮、或は近郊の神社佛閣何個所と定めて、各參詣の前後、貼附と稱へて出發時刻と到着時刻とを記した長方形の札を一々貼つて廻ることが流行した爲めであると云はれてゐるが、その漸く賑かになつたのは文化の末ちかくであらう。それから天保に入ると、所謂遠乘札の風が廢れて士分もおほかた姿を消すと共に、前述のやうな團體が各所に擡頭したが、八角連が起つてこれを壓倒するところとなつてから、遂に納札の風も俗化して、弊害が引き續き起つた。

第一は題名札の書體である。それ以前のものは、唐人の筆法を模倣した楷書體で、今日の書體とは異つてゐたが、彼等はこれを改めて、平假名を用ひ、書體を美しくしようと努めたところから書體の美しい氣韻に富んだものが少くなかつたが、その頃から殊さら人目をひき易い變態な筆太のものが大によろこばれて、或る三四を除くのほかは、悉く此の一風に限られたものである。これを得意にして仲間のために揮毫したものは、八角連の一人「つる竹」といふ日本橋住吉町の蒔繪師で、納札書きの嚆矢とされてゐるが、當時そこは、題名札の一手引受所といつた觀があつた。それから交換札は初め一二遍摺の淡泊なもので、繪も極めて簡單であつたが、その頃からやはり四五遍摺の濃雜なものになつて、後には極彩の錦繪風のものも現はれてきた。そして神佛崇信の心が第二義となると同時に、種々の遊戲的な作法などが生じて、納札はおもちや扱ひにされ、中にはこれを博奕の料に使ふ仲間さへあつた。而已ならず彼等は前に言つたやうな如何なる壯麗な神社佛閣といへども憚ることなく打つて廻り、殊に

矢立を腰にして墨太々と落書きするものなどが此處彼處に現はれ、その醸すところの弊害は頗る大きかつた。既に千社寄合といふ自體が無益な存在で、多くは市井の遊民が暇のあまりに催したものに過ぎなかつたから、それも已むをえなかつたのではあるが、しかしその半面には、外國には見られない義理合ひといふ美しい道徳も存してゐたことを忘れてはならぬ。

◇

この納札の寄合ひは、天保十二年に老中水野越前守の嚴重な勤儉令に遇つて禁止されたが、それから弘化、嘉永を越して安政に至り、かの大地震に諸職人の懐中が江戸復興のために太りだすと、遊山がてらの千社詣で、再び納札の風が流行した。時に書道における一代の寵兒市河米庵、卷菱湖に感化されて、これを模倣した書風は以前より更に卑俗に墮ち、後には此の米庵流と溝口流から出た勘亭流とを打つて丸めたちから文字といふ一種の撥鬢式のものを生じ、安政から慶應へかけて「田喜三」といふ本石町四丁目の玄魚すなはち宮城喜三郎、「福新」といふ兩國米澤町の扇屋、「田蝶」といふ彫刻家故竹内久一翁の家父梅月の三人が納札書として各一期を競つた。その他山閑人、市場豐、降つて形源などいふ人達は明治時代に遺つた知名の名人で、此の安政時代に看板書師の間に行はれた一種の書體は、延いて大正昭和に及び、昔のやうに氣品をそなへたものは見當らないが、まだ歐字に變らないのがせめて慰めであると思ふ。

尙ほ繪馬と納札については他に色々語りたいこともあるが、嘗て私が「アトリエ」といふ美術雜誌に載せたものと重複する虞れがあるから、それは茲に見合はせて、次號には「遊女」について語ることにしよう。

「錨草」の化學的成分

「いかりさう」といふと、古來不老長生の藥草として知られ、本物は支那の植物で五月頃白と紫色の美しい花を開き、枝は必ず三つに分れ、葉は三つ宛ついて居り、花は文字通り全く錨そのまゝの形を九葉草と呼んでゐるが、支那では羊がこの藥草を食べると恐しい程に若返るといふ傳說があり、事實千年以上も前に出來た藥學界の聖典「本草綱目」にも記錄されてゐる。

ところが、今度岡山醫大附屬病院藥局長赤井左一郎藥學士は、この「いかりさう」の中に果して科學的に納得し得る化學成分の有無を究の結果この植物の中にフラボン化合物と微量ながら猛毒Xを發見した。フラボンは約十年前に發見された一化學成分であるが、此植物のフラボンは普通のと異り化學構造上極めて珍しい新型のフラボン化合物であることを確證した。詰りこのフラボンは黃色い色素に利尿藥として有効、更に之から取出す有効な注射液となすことに成功し

動物實驗並に內服による五十歲以上の人に臨床實驗の結果、血管擴張と羽化登仙の恍惚境の麻醉作用を齎すことが實驗證明され、千古の傳說が茲に現代科學と並行することが先頃學界に發表された。尙氏の植物は貴重な藥草であるといふので、數百年前支那から我が伊

豪華な樂浪文化を偲ぶ貴重な發掘

原田東大助教授一行の收獲に わが學界の狂喜

我國の上代文化に密接な關係を持つて居り、東洋史に於ては殊に重大な部分を占める古代朝鮮の樂浪文化は、その壯麗豪華なる事他に比類を見ずと傳へられつゝ、二千年の風霜にさへぎられて從來全く窺見する事も出來なかつたが、學術振興會でも昭和八年から三ケ年の繼續事業で四萬五千圓の補助金を支出して樂浪研究を急いでゐる矢先、去る四月九日から三週間に亘つて行はれた東大助教授原田淑人氏一行の樂浪土城の發掘から新たに驚くべき貴重な發見を得て學界を狂喜させてゐる

十二日 午後三時から開かれた上野帝國學士院例會席上において瀧精一博士が發表したとの驚くべき樂浪文化の跡は、茫漠たる東洋上古史を華やかな文化の記錄に繼り得る貴重な資料を提出してゐるものだが、今度發見された樂浪の遺跡は平壤を距る約一里の個所現在の平安南道大同郡の一部で大同江の畔だ

原田助教授一行は現在畑として耕作されてゐる地表から約二メートル掘下げた所に幅員八メートル、大理石の緣にかこまれた堂々たる煉瓦の歩道を發見、この歩道は長さ三十八メートル迄つゞいてゐるが、その北端に間口八メートル、奥行十メートルの建築物の跡も發掘した

支那本土にすら全く形さへも止めてゐないこの素晴らしい發見につづいて、ブロンズ製の鼎、鐵の鐵器、瓦、封泥等々が現れて、當時の文化と

一時中止

金城塗料店

▲新式塗料各種
▲外壁塗料
▲屋根塗料
▲ペンキ
▲ラッカー
▲ニス
▲ワニス
▲ペンキ刷毛
▲ペンキ用品
▲ラッカー用品
▲ニス用品
▲ワニス用品
▲ペンキ刷毛
▲ペンキ用品
▲ラッカー用品
▲ニス用品
▲ワニス用品
▲ペンキ刷毛
▲ペンキ用品
▲ラッカー用品
▲ニス用品
▲ワニス用品

美術界の隆昌に 牧野伯力添へ

卅余年親んだ畫壇とお別れ

正木翁、思出を語る

「なか〳〵やりましたな、大向ふをうならせるにや、アノくらゐの大がかりな道具だてをしなけりやいけないだらう、政治家のやることは私どもにはわかりませんがね……」

◇ ◇

きのふ（廿九日）午後四時、關東廳の場數から牛込區矢來町の自邸に歸つた先きの帝國美術院長正木直彦翁は、チクリと皮肉な一鉢を見せたが、さすが明治卅四年から東京美術學校長、つゞいて帝國美術院長を歷任――美術界の大御所として手腕にかけて世話を焼いてきただけに感慨深げに「いろ〳〵厄介な問題があるだらうが、うまくやつてもらひたい」と新しく生れ出た「帝國美術院」の將來を心配した、その頭髮、口ひげのあたりは霜に白く、心なしか一抹の寂寞さを見せてゐる

◇ ◇

翁は、話を文展創立當時に戻して、靜かに過去を追想する――

「明治四十年の春、西園寺第一次内閣が組織され、當時オーストリア公使をしてゐた牧野さん（現内府）が文部大臣になつた、私は牧野さんには滯歐中お世話になり、美術の話が出るとフランスのサロンのやうなものを日本でもつくりたい……と語しあつてゐたので、福原鐐二郎君、岡田良平君などと一緒に早速牧野さんに相談した、牧野さんは大變乗氣になつて「ヨシやらう」といふことになり、その年の秋には上野で第一回の文展を開いた、何しろ會場もないので、春につくつた博覽會の美術館跡を充てた、私が美術學校長で文展では幹事をやつた、何しろはじめてだから大變な人氣、ところが面白い事件が持ちあがつた」

◇

「熊本の畫家で高橋廣湖といふ畫家が、どうしても締切日までに間に合はないから二、三日待つてくれといふ注文だ、私は、一時間でもおくれたら駄目だと頑張にハネつけたので、ある日後藤新平さんから約束定規だとなりこんできた、しかし、私はこれを受けつけなかつたところ、後藤さんはアンなんだから大いに憤慨して、會場のすぐそばにあつたバラックを借り受け、黒鍋でタッタ一枚きりの高橋君の繪の展覽會をはじめたが、これが大變な評判だつた」

◇

「これに高橋伯がなか〳〵面白い人物で、吉原の馴で夏本番場が眞つ赤な炎火を火鑢の先にはさんで「サア御覽来たにてさし出したのを、ものをもはず、振袖でこれを受けたことで、俠艶の名を一世にうたはれた今樂が、その後福本で歌舞伎芝居をした時、一人の少年が熱心にかの女の美しい舞台姿を描いてゐた、これを見た今樂が、反撥する父親を説き伏せて江戸に連れ歸り、自分の子として畫家に育てあげた――といふ高橋君の出世ばなしが當時世間にパッと傳はり、滿都の評判はいよ〳〵高まるばかりの、おかげで私ども役人のはじめた文展も、その人氣の煽りを受けて、華やかなスタートであつた、牧野さんはそれ以來わが美術界とはきつても切れぬ關係者で、こんどの改革にも恐らくかげながら心配してゐたことでせう」＝寫眞は自邸で思ひ出を語る正木翁

豪華な樂浪文化を
偲ぶ貴重な發掘

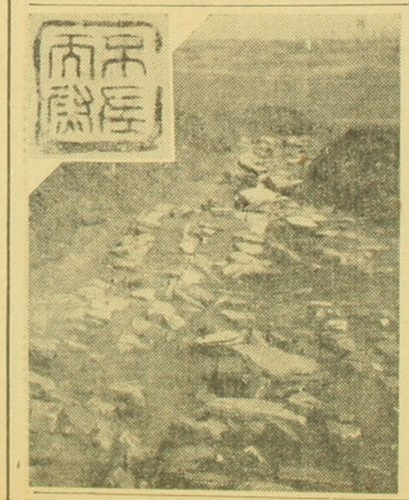
原田東大助教授一行の收獲に
わが學界の狂喜

我國の上代文化に密接な關係を持つて居り、東洋史に於ては殊に重大な部分を占める古代朝鮮の樂浪文化は、その壯麗豪華なる事他に比類を見ずと傳へられつゝ、二千年の風霜にさへぎられて從來全く窺見する事も出來なかつたが、學術振興會でも昭和八年から三ケ年の繼續事業で四萬五千圓の補助金を支出して樂浪研究を急いでゐる矢先、去る四月九日から三週間に亘つて行はれた東大助教授原田淑人氏一行の樂浪土城の發掘から新たに驚くべき貴重な發見を得て學界を狂喜させてゐる

十二日 午後三時から開かれた上野帝國學士院例會席上において濱田耕一博士が發表したこの驚くべき樂浪文化の跡は、實に燦たる東洋上古史を嚴やかな文化の記錄に綴り得る貴重な資料を提出してゐるものだが、今度發見された樂浪の遺跡は平壤を距る約二里の傷所現在の平安南道大同郡の一部で大同江の畔だ

原田助教授一行は現在畑として耕作されてゐる地表から約二メートル掘下げた所に幅員八メートル、大理石の緣にかこまれた堂々たる甎瓦の歩道を發見、この歩道は長さ三十八メートル迄つゞいてゐるが、その北端に間口八メートルの建築物の跡も發掘した

支那本土にすら全く形さへも止めてゐないこの素晴らしい發見につづいて、ブロンズ製の鼎、鐵の鐵器、水晶の裝身具、ガラス製品、土器、瓦、封泥等々が現れて、當時の文化と



現代の

科學文明の間に二千年の長い歴史が全く喪失してしまふ事實を物語つてゐる、この建築の周圍からは「樂浪禮官」と刻んだ瓦が多數發見されたのでこの建物は郡役所の一部で儀式等に使用された館ではないかと見られてゐる、堂にはオンドルが設備されて煙瓦を三列に積み重ね、その上に石の蓋をつけた煙突まで歴然としてゐる、又發見された二つの封泥は手紙の封緘に使用されるもので一つには「提奚長印」他は「不如左尉」と讀まれる、これ等により從來郡役所が平壤付近にあつたといふ説を根本から覆すものとされてゐる【寫眞は發掘された建築物と不而左尉の印を押した封泥】

◇

この研究を紹介發表した濱田耕一博士は語る

原田君は學士院會員でないために私が代つて紹介したものだが實に偉い發見だと思ふ、これまで漢時代はおろか、前漢時代のかゝる建物が發掘された事がなかつたのだが今度の發見によつてその時代の文化が明らかになつたわけで、樂浪時代の郡治も初めてその確證を得たものといふ事が出來る

美術界の隆昌に
牧野伯力添へ

卅余年親んだ畫壇とお別れ

正木翁、思出を語る

「なか〳〵やりましたな、大向ふをうならせるにや、アノくらゐの大がかりな道具だてをしなければやいけないだらう、政治家のやることは私どもにはわかりませんがね……」

◇

きのふ(廿九日)午後四時ゴ開幕ゴの鐘から半丸屋矢來町の自邸に跡つた先きの帝國美術院長正木直彦翁は、チクリと皮肉な一針を見せたが、さすが明治廿四年から東京美術學校長、つゞいて帝國美術院長を歴任――美術界の大御所として手腕にかけて世論を湧いてきただけに感慨深げに「いろ〳〵危ない問題があるだらうが、うまくやつてもらひたい」と新しく生れ出た「帝國美術院」の將來を心配した、その顔色、ロひげのあたりは霜に白く、心なしか一抹の寂寞さを見せてゐる

◇

翁は、話を文展創立當時に戻して、靜かに過去を追想する――

「明治四十年の春、西園寺第一次内閣が組織され、當時オーストリア公使をしてゐた牧野さん(現内大臣)が文部大臣になつた、私は牧野さんには瀧駅中お世話になり、美術の話が出るとフランスのサロンのやうなものを日本でもつくりたい……と話しあつてゐたので、福原線三郎君、岡田良平君などと一緒に早速牧野さんに相談した、牧野さんは大變乗氣になつて「ヨシやらう」といふことになり、その年の秋には上野で第一回の文展を開いた、何しろ會場もないので、春につくつた博覽會の美術館跡を充てた、私が美術學校長で文展では終事をやつた、何しろはじめてだから大變な人氣、ところが面白い事件が持ちあがつた」

◇

「熊本の畫家で高橋廣海といふ畫家が、どうしても締切日までに間に合はないから二、三日待つてくれといふ注文だ、私は、一時間でもおくれたら駄目だと頑張にハネつけたので、ある日後藤新平さんから約束定規だとなりこんできた、しかし、私はこれを受けつけなかつたところ、後藤さんはアンなんだから大いに憤慨して、會場のすぐそばにあつたバラックを借り受け、單獨でタッタ一枚きりの高橋君の繪の展覽會をはじめたが、これが大變な評判だつた」

◇

「これに高橋君伯がなか〳〵面白い人物で、吉原の廓で模本を描かれ真つ赤な焔火を火鉢の先にはさんで「サア御總走だ」とさし出したのを、ものをもいはず、振袖でこれを受けたことで、俠艶の名を一世にうたはれた今泰が、その後熊本で歌舞伎芝居をした時、一人の少年が熱心にかの女の美しい美古泰を描いてゐた、これを見た今泰が、反對する父親を説き伏せて江戸に連れ歸り、自分の子として畫家に育てあげた――といふ高橋君の出世ばなしが當時世間にパッと傳はり、滿都の評判はいよ〳〵高まるばかり、おかげで私どもお役人のはじめた「文展」も、その人氣の煽りを受けて、華やかなスタートであつた、牧野さんはそれ以來わが美術界とはきつても切れぬ縁故者で、こんどの改革にも恐らくかげながら心配してゐたことでせう」――鳥東は自邸で思ひ出を語る正木翁

坪内博士遺品、著書展列　目録

（自昭和十年五月二十二日至二十八日）

遺品の大部分は、數年來博士から本館へ御寄贈下されたものと、今回坪内家に請うて出品を受けたものです。また著作物は、博士が早稲田中學校長時代に親しく教へを受けられた、本大學校友村上濱吉氏が十餘年にわたつて苦心蒐集されたもの。快く御出陳下さつたことを感謝します。

昭和十年五月

早稲田大學　坪内博士記念演劇博物館

若原ノー・ヒット

ノー・ランの記錄樹立か

早立野球戰豫想

本社運動部

愛者もまた無限だ、そこに趣味生活の源泉が湧く、命よりも大事とさへいはれた往時の證文、手形等も新手形法なる王者の出現で哀れ反古同様に消てられた、此古證文古手形をいとし兒のやうに愛着を寄せつゝ蒐集し、そして學術見地からそれ〳〵分類し出し遂には趣味への三昧境にまで進歩したのが、わが寺尾法學部長だ下谷合中井の新邸に部長を訪ねて藏書と趣味を覗く

「――古證文かね？いや、僕の蒐集は、昔の手形・藏札の類だよ、謂だい古證文だなんていひだしたのは？――もつとも古いには違ひないがねハハ、、、」と朗らかだ、

「手形」といふ言葉は既に我邦獨特のもの、古くは「真史雜記」に「證文の事を手形といふ事、證文は必ず印を押す物なり上古印といふ物なかりし時は、手に墨付けて押してしるしとしける也、されば、印の字を「おして」とよむ也「おして」とは手の形を押しけるの故也」等とある、その他「東鑑巻六」にも「骨董雜誌」にも、「藤氏檔衝錄」にも、「本朝法令」にも、

揭てゝ何等賴るべきカーブをも持ち合さぬ彼は之又當然學園チームの好餌となるの他はなからう、かくして投手力において學園チームは遙かに勝れりと見るは強ち自畫自讚でもあるまい

……丁度……よしや投手力を

（陳十藏下）にて目下酒店の繁盛は實に皆様の御滿足を博して居ります誠屋の正價は薄利加算正價で御座いますから御値引は絶對致しません當店は店主が先頭に立つてお客様方に接して店員を指導致して居ります　から買不買に拘らず商品の説明は實に眞面目に親切に申し上ます

この話がまんとこ他店と瓜似の出來

買よいよ全店陳列

洋屋

ガ台下交叉點消防署

主婦の友社通り（早田稲）

眼はちつと閉ぢられる、學校の學問と生活と趣味とが完全に一致點に到達してゐる、寺尾「酒杯」先生にとつては人生そのものが實に樂いものに違ひない、古き手形に、古き證文よ、心あらば汝、先生の夢枕となつて現れよ、虔知れぬ舊家妻封家の塵底をぬけ出でゝこの發文の懷に飛びこんで來いよ！

【寫眞は古手形にうつとりしてゐる寺尾先生と古手形】

＃　＃　＃

學園趣味の人々 (5)

捨てられた古證文を蒐集し悦びの三昧境

法學部長　寺尾元彦さん

古きものから新しきものへと万物は流轉する、それだけに新しきものへの魅力は無限だ、だが古きものへの愛着もまた無限だ、そこに趣味生活の源泉が湧く、命よりも大事とさへいはれた往時の證文、手形等も鞏手形法なる王者の出現で哀れ反古同様に捨てられた、此古證文古手形をいとし兒のやうに愛着を寄せつゝ蒐集し、そして學的見地からそれ〴〵分類し出し遂には趣味への三昧境にまで進歩したのが、わが寺尾法學部長だ下濟合中井の新邸に部長を訪ねて繪畫と趣味を綴く

「――古證文かね？いや、僕の蒐集は、若の手形・藩札の類だよ、誰だい古證文だなんていひだしたのは？――もつとも古いには違ひないがねハ、ハ、、」と朗らかだ、

大體　僕の趣味は、音樂でも文藝でも美術でも第一流を鑑賞することなのだが――その中にも古手形だけは、自分の研究と一致するのだこれを始めた動機といふのが實は妙な話だがこの庭の梅の樹なのだ」

――つまりかうだ、庭いぢりをしてその結果梅の木の歴史を調べてゐると梅には日本固有の梅と支那傳來のものと二種あることが判つた、その時フト自分が研究してゐる手形にも、外的要素のない日本固有の鞏牌を持つのがあるに違ひないと思ひついて、つまり連想の飛躍といふ奴だね、そこでコツコツ調べだした明治卅九年に早大卒業と共に本格的に始め、それ以來旅行したり、知人に頼んだり、地方の藝家や寺院を尋ねては、調べたり、時には兩替屋へ行つて買込んだりしてゐるのだが、

珍品はなかなかないものだ、けれ共大量を買込んで中から珍品を發見する氣持は、しかしやはり一つの創作だね、」

「手形」といふ言葉は曙に我邦獨特のもの、古くは「貞史雜記」に「證文の事を手形といふ事、證文は必ず印を押す物なり上古印といふ物なかりし時は、手に墨付けて押してしるしとしける也、されば、印の字を「おして」とよむ也「おして」とは手の形を押しけるの故也」等とある、その他「東鑑卷六」にも「骨董雜談」にも、「醒睡笑」にも、「本朝俚諺」にも、「好古目錄」にも、同樣なことが謳られてゐる。

このところ國粉傍證願るアカデミックで「酒井」先生の研究の一端が自ら流露する

「日本の手形の最初は、手の形を押して證としたことに始まるので、古文書としては平安朝の始め嵯峨天皇空海と共に日本三筆として名高い橘逸勢が天長十年九月廿一日に伊都千内親王の爲に代つて書いた能筆の願文に内親王の小さい右の手形を押されたこれが最古のものだらう、天長十年即ち皇紀二四九三年今から千百年昔のことだからね、僕の集めたのは主として德川時代のものだが、大阪を中心として當時の慣習に依つて流通したものと關生、足利の如き兩毛の機業地に流通したものが多い、天保前後に一種の約束手形として行はれた市札は市日に集つた種屋に買次商が賣買成立と共に「買札」と稱して渡してゐたもので、用紙は蓆間紙、極めて上等の日本紙この紙だ、これ」

先生　は丹念に封筒に收められた黄色い日本紙を引出して凝視される、トタンにこの無雜な日本紙一枚から無限津潰たる興趣の流れが迸り先生の心を慄いて現へてしまふ

「だが殘念なことにこの場方の人達はこの紙が未だなので簿勘利用といふわけで、用が濟むとしこいては「はたき」を作つたり、または離ぎ合せて反物を包む紐にしちまつたので今では殆んど失くなつてしまつた、だがしかし何處かの舊家の塵底深くには、きつとまだ〳〵殘つてゐるに違ひない。

と瞼の眼を傳ぶ如くに先生の兩眼はぢつと閉ぢられる、學攻の學問と生活と趣味とが完全に一致點に到達してゐる、寺尾「酒井」先生にとつては人生そのものが實に樂しいものに違ひない、古き手形に、古き證文よ、心あらば汝、先生の夢枕となつて現れよ、處知れぬ藝家素封家の塵底をぬけ出でゝこの慈父の懷に飛びこんで來いよ―

【寫眞は古手形にうつとりしてゐる寺尾先生と古手形】

＃　＃　＃

坪内博士遺品、著書展列　目録

（自昭和十年五月二十二日至二十八日）

遺品の大部分は、數年來博士から本館へ御寄贈下されたものと、今回坪内家に請うて出品を受けたものです。また著作物は、博士が早稲田中學校長時代に親しく教へを受けられた、本大學校友村上濱吉氏が十餘年にわたつて苦心蒐集されたもの。快く御出陳下さつたことを感謝します。

昭和十年五月

早稲田大學　坪内博士記念演劇博物館

遺品目録

坪内先生の遺品には、人の目をそばだゝしめるやうな、きらびやかなものや贅澤がましいものは殆どありません。これは先生の御趣味好尚が質實を旨とし、意匠と考案に重點を置かれた故です。例へば、見かけはいかにも平凡な抽斗つきの硯箱や、整理簞笥また机のたくひにしても、自ら考案し設計し指導して造られたものが多く、また注文しても意に滿たぬ場合は、あまり使用されませんでした。今回の展覽會には、平生愛用されたもの、何十年も手近に置かれたもの、父祖の代から傳はつたものなどを選んで出陳しましたが、御觀覽の際の御參考にと申添へました。

○

机二脚（近松愛用の机を模作せしもの）。　机掛。紙刀（象形、半形の二種）。　竹形箱入硯。　朱塗硯箱。　机邊用整理箱。　硯箱兼用手箱（自ら設計され、使用中のまゝに各調度品在中）。　象牙紙刀。　短冊箱。　文鎮數箇（瑪瑙、金屬製）。各種印五十五顆。　肉池、印泥、墨架、筆架、竹筆等。　鐲鈷。　鈴五個。　呼鈴。　書畫怙三冊。　短冊怙。　揮毫用毛氈。　文箱。寒暖計。　日記。　手帳。　鄉土玩具多數。御生年の羊に因める玩具多數。　砂時計。　シエークスピヤに關する模型類、豆本。　シエークスピヤ墓碑銘額。　曾村杜芽氏作伎樂面風の博士木彫像。　長谷川榮作氏作木彫博士坐像。

○

坪内家傳來の大、小刀。　愛用のステツキ。東大寺金剛杖。　帽子三個。　山高帽、シルクハツト。　帷子二枚。　夏帶。　モーニング・コート。　早稲田大學式服。　浴衣（桐一葉、孤城の落月に因み製作寄贈されしもの）。　庭手入れ用鋏、同朝鮮帽。　眼鏡數個。　オペラバツク。　擴大鏡。　紙入。　狀差し。　紙屑籠。　食器。　桐胴丸火鉢。　柱時計。　艶時計。金時計（會津八一氏所藏）。　朝鮮扇（宮田修氏所藏）。

○

坪内博士筆御兩親の像。　博士自畫像。　御生地に於ける寫眞。　新水や空（岡本一平氏肉筆）。扇面（結城素明氏筆）。　阿國歌舞伎圖額面（尾形月耕筆）。　阿國と山三木彫（石井曉海氏作）。「お夏狂亂」小衝立（鳥居清忠氏筆）。　近松巢林子畫像。元祖歌川豐國像（國丸筆）。　支那製提げ籠。香爐。　ブックエンド。　唐櫃（自案）。「意長日月促」の聯。　良寛上人像。　大隈老侯と對談油畫。　博士揮毫の柘本類。　寄せ書き軸。

○

大學卒業證書。　同認了證。　文藝賞（文部省よりの賞碑）　朝日賞。　其他。

著書目錄

春風情話第一篇（明治十三年）

春風情話（橋顯三の匿名にて譯述、明治十三年）

春窓綺話（服部誠一筆述として、明治十七年）

奇談自由太刀餘波鋭鋒（十七年）

慨世士傳（道遙遊人譯として、十八年）

當世書生氣質（十七冊、春のやおぼろ戲著として、十八年）

當世書生氣質（合本二冊、十九年）

英文小學讀本卷之一（十八年、文學士　坪内雄藏譯として）

英文小學讀本（春のやおぼろ譯として、十八年）

新磨妹と背鏡（十二冊、春のやおぼろ戲著として、十八年）

新磨妹と背鏡（合本二冊、十九年）

小說神髓（九冊、坪内雄藏著として、十八年。柳田泉氏出品）

小說神髓（上下二冊、十九年）

國誠京わらんべ（政治小說、十九年）

未來之夢（全十冊、春のやおぼろ戲著として、十九年）

未來之夢（大正十五年）

未來之夢（譯述、十九年）

朗蘭夫人傳（「朗蘭夫人傳」の改題書、二十年）

交際之女王（「朗蘭夫人傳」の改題書、二十年）

淑女鑑（二冊、二葉亭四迷共著、二十年）

新編浮雲（新曲浦島、明治三十七年）

新樂劇論（樂論、三十七年）

大海原（東儀鐵笛作曲、三十八年）

新曲赫映姬（三十八年）

常闇（東儀鐵笛作曲、三十九年）

鉢かづき姫（附俄仙人、四十年）

文藝瑣談（四十年）

倫理と文學（四十一年）

新曲金毛狐（四十一年）

內容＝金毛狐、一休禪師、お夏狂亂、初夢、小埴物狂

新曲初夢（四十二年）

作と評論（四十二年）

劇と文學（四十四年）

所謂新しい女（四十五年）

ウオーレン嬌人の職業（大正二年）

武器と人（大正二年）

軍人禮讚（右改題書、大正十三年）

教化と演劇（大正四年）

靈驗（大正四年）

隨天女（大正四年）

內容＝隨天女、寒山拾得、お七吉三、歌麿と北齋、和歌之浦

樂劇隨ちたる天女（抜萃曲集、昭和四年）

醒めたる女（大正四年）

最後のド・ムラン家（右同分冊改題書、大正九年）

始終戀をしてゐる男（右同、大正九年）

「初版小說神髓」以外は全部村上濱吉氏御所藏品・本目錄は略目錄です。

ら設計され、使用中のまゝに各調度品在中）。象牙紙刀。短冊箱。文鎮數箇（瑪瑙、金屬製）。各種印五十五顆。肉池、印矩、墨架、筆架、竹筆等。鑷鉗。鈴五個。呼鈴。書畫怙三冊。短冊怙。揮毫用毛氈。文箱。寒暖計。日記。手帳。郷土玩具多數。御生年の羊に因める玩具多數。砂時計。シエークスピヤに關する模型類、豆本。シエークスピヤ墓碑銘絹。曾村杜芽氏作伎樂面風の博士木彫像。長谷川榮作氏作木彫博士坐像。

○

坪内家傳來の大、小刀。愛用のステッキ。東大寺金剛杖。帽子三個。山高帽、シルクハット。帷子二枚。モーニング・コート。早稲田大學式服。浴衣（桐一葉、孤

著書目錄

春風情話第一篇（明治十三年）
（橘顯三の匿名にて譯述、明治十三年）

春風情話（春廼舎主人譯述）
（服部誠一蹇逸として、明治十七年）

奇譚自由太刀（しゆうのたち）餘波鋭鋒（なごりのさきがけ）
（十七年）
（道遙遊人譯として、十八年）

一言居士譯 當世書生氣質
（十七冊、春のやおぼろ戲著として、十八年）

英文小學讀本卷之一
（十八年、文學士　坪内雄藏譯として）

英文小學讀本
（春のやおぼろ譯として、十八年）

新磨妹（ハイカラ）と背鏡
（十二冊、春のやおぼろ戲著として、十八年）

小說神髓
（合本二冊、十九年）

小說神髓
（九冊、坪内雄藏著として、十八年。柳田泉氏出品）

風流佛京　わらんべ
（上下二冊、十九年）

新編浮雲
（政治小說、十九年）

可憐嬢
（全十冊、春のやおぼろ戲著として、十九年）

松のうち
（小說、二十年）

賣貨つかひ
（春廼やおぼろ著として、二十一年）

賣もの
（右改題書、二十五年）

實語教賣貨百萬圓
（右同書、三十年）

笹はじめ
（讀賣新聞附錄、二十四年）

小說春廼家漫筆
（道遙著として、二十四年）

小羊漫言
（隨筆、二十六年）

桐一葉
（春のやおぼろ著として、二十九年）

桐一葉筋書
（榎本虎彦著、四十三年）

實説桐一葉
（道遙著として、大正六年）

縮刷通俗倫理談
（大正二年）

文學その折々
（二十九年）

・
（二十九年）

蓼園の落葉
（三十年）

ふたこの心
（春のや主人著として、三十年）

牧の方
（戲曲選集第八編、大正六年）

改作牧の方
（孤城の落月と二葉亭補、三十一年）

菊と桐
（戲曲選集、大正五年）

沓手鳥孤城落月
（綱島梁川共編、三十三年）

近松の研究
（三十四年）

文學史
（文學叢書）

英文學史
（文學叢書）

木唱歌
（全五冊、三十四年）

文藝と教育
（三十五年）

英詩文評釋
（文學叢書）

通俗倫理談
（三十六年）

腕時計。金時計（會津八一氏所藏）。朝鮮扇（宮田修氏所藏）。

○

坪内博士筆御兩親の像。博士自畫像。御生地に於ける寫眞。新水や空（岡本一平氏肉筆）。扇面（結城素明氏筆）。阿國歌舞伎圖額面（尾形月耕筆）。阿國と山三木彫（石井曉海氏作）。「お夏狂亂」小衝立（鳥居清忠氏筆）。近松巢林子畫像。元祖歌川豐國像（國丸筆）。支那製提げ籠。香爐。ブックエンド。唐櫃（自案）。「意長日月促」の聯。良寛上人像。大隈老侯と對談油畫。博士揮毫の栢本類。寄せ書き軸。

○

大學卒業證書。同認了證。文藝賞（文部省よりの賞碑）朝日賞。其他。

「初版小說神髓」以外は全部村上濱吉氏御所藏品・本目錄は略目錄です。

新曲浦島
（明治三十七年）

新樂劇論
（樗論、三十七年）

大海原
（東儀鐵笛作曲、三十八年）

新曲赫映姫
（三十八年）

常闇
（東儀鐵笛作曲、三十九年）

鉢かづき姫
（附俄仙人、四十年）

文藝瑣談
（四十年）

倫理と文學
（四十一年）

新曲金毛狐
（四十一年）

内容＝金毛狐、一休禪師、お夏狂亂、初夢、小槌物狂

新曲初夢
（四十二年）

作と評論
（四十二年）

劇と文學
（四十四年）

所謂新しい女
（四十五年）

ウォーレン婦人の職業
（大正二年）

武器と人
（大正二年）

軍人禮讃
（右改題書、大正十三年）

教化と演劇
（大正四年）

靈驗
（大正四年）

隨天女
（大正四年）

内容＝隨天女、寒山拾得、お七吉三、歌麿と北齋、和歌之浦

樂劇隨ちたる天女
（抜萃曲集、昭和四年）

醒めたる女
（大正四年）

最後のド・ムラン家
（右同分冊改題書、大正九年）

始終戀をしてゐる男
（右同、大正九年）

役の行者
（大正六年）

劇壇之最近十年
（大正六年）

名殘の星月夜
（大正七年）

義時の最期
（大正七年）

道遙劇談
（大正八年）

法難
（大正九年）

芝居繪と豐國及其門下
（大正九年）

少年時に觀た歌舞伎の追憶
（大正十年）

それからそれ
（大正十年）

わがページェント劇
（大正十年）

長生新浦島
（大正十一年）

家庭用兒童劇
（三冊、大正十一年、十二年、十三年）

術ト家庭ト社會
（大正十二年）

舞踊論
（大正十二年）

兒童教育ト演動
（大正十二年）

東西の煽情的悲劇
（大正十二年）

學校用小脚本
（大正十二年）

熱海ベーチェント
（大正十四年）

良寛と子守その他
（昭和四年）

生峯・春城道遙三翁熱海漫談
（昭和四年）

近世畸人傳その他
（昭和六年）

内容＝近世畸人傳、變化雛、鵜の樂、良寛と子守

歌舞伎畫證史話
（昭和六年）

柿の帶
（昭和八年）

阿難と鬼子母
（昭和九年）

内容＝阿難の巢ひ、鬼子母解說、改作桐一葉

外に「シエークスピヤ全集」四十卷。「新修シエークスピヤ全集」四十卷。「逍遙選集」十五卷等。

坪内逍遙先生略歴

○先生名は雄藏、逍遙と號す。晩年熱海双柿舎に會心の新居を卜してより柿叟の雅號を併用せり。尾張藩士坪内平之進（其樂翁）の三男にして、安政六年五月二十二日を以て、舊尾張藩代官所の所在地なる美濃國加茂郡太田村に生る。

○明治二年(先生十一歳) 父君の致仕歸農に從ひて、名古屋郊外上笹島村に移り、こゝにて寺子屋に入學す。當時猶ほ結髪して、式日の外出には必ず帯刀せりといふ。

○明治九年(十八歳) 縣の選抜生として上京し、東京大學の前身開成學校に入る。

○明治十二年(二十一歳) 此年より名稱を改めたる東京大學の政治經濟科に入る。此頃より英國小說を愛讀し、また飜譯を試みたり。此の年始めて熱海に行く。

○明治十六年(二十五歳) 政治經濟科を卒業し、始めて私立東京專門學校(後の早稲田大學)の講師となり、外國歷史、憲法論等の譯解を擔當す。

○明治十八年(二十七歳) 二月『小說神髓』の舊稿を整理す。新しき文學評論の濫觴なり。四月『當世書生氣質』の稿を起し、六月より次ぎ〳〵に刊行す。新しき小說の濫觴なり。此年また『英文小學讀本』を脫稿す。

○明治十九年(二十八歳) 『妹と背鏡』、『小說神髓』等を刊行す。七月鵜飼常親の養女センを娶る。

○明治二十一年(三十歳) 此頃より感ずる所ありて、演劇改良に志し、筆を小說に絶つ。

○明治二十二年(三十一歳) 牛込大久保余丁町に移る。

○明治二十三年(三十二歳) 東京專門學校に文學科を創設し自ら其の中心となりて經營にあたる。文學科は後の文學部の前身なり。

○明治二十四年(三十三歳) 雜誌『早稲田文學』を創刊す。此の年より他の兼務學校との關係を斷ち、專ら東京專門學校の教授に力む。授業時間平均約二十四時間なり。

○明治二十七年(三十六歳) 近松研究會を始む。學生の一部を集めて朗讀會を催す。史劇に筆を染む。また此秋より舞踊の研究に志す。

○明治二十九年(三十八歳) 早稲田中學校の創立に與りて教頭となる。『桐一葉』を公刊す。新史劇の濫觴なり。

○明治三十二年(四十一歳) 中學教育の爲めに實踐倫理の研究に專念す。三月文學博士の學位を受く。先年より『尋常小學讀本』の編輯に從事せしが、七月略々脫稿す。文藝を本位とする新しき讀本の魁にして、讀本界に新しき機運を齎せるものなり。

○明治三十五年(四十四歳) 早稲田中學校の校長となる。新舞踊劇の創作に志す。

○明治三十七年(四十六歳) 新曲『浦島』を刊行す。新樂劇の濫觴なり。『桐一葉』東京座にて上演せらる。先生の作の上演せらるゝ、之れを初めとす。

○明治三十九年(四十八歳) 文藝協會を興す。その第一回公演を歌舞伎座にて行ひ。『桐一葉』、『ヱニスの商人』、『常闇』を上演す。

○明治四十年(四十九歳) 『中學新讀本』の編輯に努力す。數年前より病みし神經衰弱、腸カタル等此の頃特に募りて年中服藥を絶たず。

○明治四十二年(五十一歳) 邸内に文藝協會の演劇研究所を設け、生徒を募集して教授す。

○明治四十四年(五十三歳) 此年より專らシェークスピヤの全譯に心を傾く。

○明治四十五年、大正元年(五十四歳) 三月、文部省より功勞金二千二百圓及びメダル一箇を受く。その一千圓を文藝協會に寄贈し、殘餘を某々三小說家の遺族に頒つ。

○大正三年(五十七歳) 通俗世界全史を監修す。

○大正四年(五十八歳) 早稲田大學教授の職を辭す。此の年新に公刊したる著作、教化と演劇』、『霊驗』、『墮天女』、『テムペスト』、『アントニーとクレオパトラ』、『醒めたる女』、『眞夏の夜の夢』等八篇に及ぶ。

○大正七年(六十歳) 『國民の日本史』の編著を指導監督す。

○大正八年(六十一歳) 熱海水口村に三百坪の地所を求む。

○大正九年(六十二歳) 水口村の別宅落成す。双柿舎と命名す。七月文化事業研究會を起し、毎週六時間の講話をなす。渥美清太郎氏と協力して『歌舞伎脚本傑作集』を出版す。

○大正十年(六十三歳) 此頃よりページェント及び兒童劇に熱心し、論說、創作、共に連續して發表す。

○大正十三年(六十六歳) 秋の新學期より、早稲田大學文學部の爲めに、新たにシェークスピヤ及び歌舞伎史講座を擔當せられ、九年振りに大學の講堂に復活して、爾來三年熱心なる講義をつゞけらる。

○大正十四年(六十七歳) 二月肺炎に罹り、一時危篤に瀕したりしが、四月末に至り全癒す。

○大正十五年、(昭和元年六十八歳) 七月より『逍遙選集』十五卷の刊行に着手す。三絶を披露してシェークスピヤの全譯に專念す。

○昭和二年(六十九歳) 明年に於ける先生古稀の賀及び沙翁全集完成を記念の爲め、演劇博物館設立の議門下知己の間に起り、六月公表して寄附金を募集す。十一月『逍遙選集』大册十五卷完成す。

○昭和三年(七十歳) 二月二日坪内博士記念演劇博物館起工十月二十七日盛んなる開館式を擧行す。建物は沙翁時代の劇場フォーチューン座に則れるものにて、先生の案に基けり。館當初の所藏の主なるは先生の寄贈にかゝる二萬餘枚の浮世繪と數千册の和漢洋の圖書となりき。十二月沙翁譯、研究草まで全部完成す。此の年牛込余丁町の邸宅を早稲田大學に寄附せらる。

○昭和四年(七十一歳) 四月より演劇博物館後援會にて、隔月に『演劇博物館』と題するパンフレットを刊行し、先生毎號卷頭に「柿の帶」と題したる長文を寄稿せらる。此の年早稲田大學、先生及び他の三元老の爲めに古稀の賀式を大隈大講堂に開く。大學より先生に慰勞金三萬五千圓を呈す。先生之れを演劇博物館に寄附せらる。

○昭和五年(七十二歳) 熱海双柿舎の土地、家屋、圖書、器財の一切を國劇向上會に寄附せらる。

○昭和六年(七十三歳) 五月より國劇向上會にて月刊雜誌『藝術殿』を刊行し、先生毎號卷頭に長篇を寄稿せられて、終焉の前月に及ぶ。

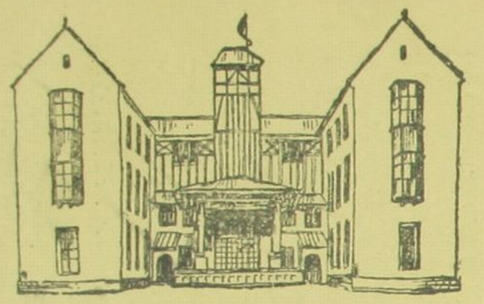
○昭和七年(七十四歳) 東京朝日新聞社より朝日賞として一千圓を受けられ、先生直に之れを國劇向上會に寄附せらる。

○昭和八年(七十五歳) 九月以來中央公論社より『新修シェークスピヤ全集』を刊行し、十年二月終焉の直前に、略ぼ全四十卷の大校訂を完了せらる。

○昭和九年(七十六歳) 六月『阿難と鬼子母』を刊行す。六月下旬かりそめの風邪より肺炎となり、一時重態に陷られしが、遲々ながら漸次回復に向かはる。その間危險期の短時日を除きては常に病を押し、苦みを忘れて全集の加筆及び校正に從事せらる。

○昭和十年(七十七歳) 年頭二三日は爽快の氣分を悅ばれ、賀客に接しつゝ、詠歌揮毫など試みられしが、月末より床上の人となられ、二月六日頃再び起つべからざるを覺悟されて、發熱咳嗽に苦しまるゝ間に大切なる事に取極めの配慮あり。かくて二月二十八日午前十時三十分、安らかに大往生を遂げらる。

○先生明治十六年、二十五歳にして『該撒奇談』の飜譯を公にせられて以來、七十七歳昭和十年一月の『藝術殿』に載せられたる堂々たる長篇の『句讀法論』に至るまで、實に五十餘年文學藝術に身を委ねて、曾て筆を絶たれず。著述飜譯實に幾等身ともいふべし。(早稲田學報より轉載)



◎本館は坪内逍遙博士が古稀の齡に達せらるゝのと、その半生の研精になれる、シェークスピヤ全集四十卷の飜譯完成とを記念せんが爲に計畫せられ、同博士を始め各方面の有力者、演劇愛好者數千名の寄附によつて、昭和三年十月開館式を擧げたものです。早稲田大學は其維持經營に任じてゐますが、公益機關として無料で公開してゐます。

◎本館は東西古今の演劇に關する圖書館なも兼ねてゐます。

ひ、一方劇に關する文獻、參考資料を蒐集整理して、之が展列を行して、演劇の調査研究所、相談所たらしめ、進んでは各種の施設を充實して、社會文化の一原動力たる演劇の社會的使命を全うせしめんことを期します。

所在　東京牛込早稲田大學構内
（市電早稲田終點ヨリ一丁）
（電話牛込五一四番）

開館規定
開館　自午前九時至午後四時
休館　毎月曜日、祭日も開館
但日曜、祭日の翌日

館長　河竹繁俊

此の年より他の學務學校との關係を斷ち、專ら東京專門學校の教授に力む。授業時間平均約二十四時間なり。

○明治二十七年(三十六歳) 近松研究會を始む。學生の一部を集めて朗讀會を催す。史劇に筆を染む。また此秋より舞踊の研究に志す。

○明治二十九年(三十八歳) 早稲田中學校の創立に與りて教頭となる。『桐一葉』を公刊す。新史劇の濫觴なり。

○明治三十二年(四十一歳) 中學教育の爲めに實踐倫理の研究に專念す。三月文學博士の學位を受く。先年より『尋常小學讀本』の編輯に從事せしが、七月略々脱稿す。文藝を本位とする新しき讀本の魁にして、讀本界に新しき機運を齎せるものなり。

○明治三十五年(四十四歳) 早稲田中學校の校長となる。新舞踊劇の創作に志す。

○明治三十七年(四十六歳) 新曲『浦島』を刊行す。新樂劇の濫觴なり。『桐一葉』東京座にて上演せらる。先生の作の上演せらるゝ、之れを初めとす。

○明治三十九年(四十八歳) 文藝協會を興す。その第一回公演を歌舞伎座にて行ひ。『桐一葉』、『メニスの商人』、『常闇』を上演す。

○明治四十年(四十九歳) 『中學新讀本』の編輯に努力す。數年前より病みし神經衰弱、腸カタル等此の頃特に募りて年中服藥を絶たず。

○明治四十二年(五十一歳) 邸内に文藝協會の演劇研究所を設け、生徒を募集して教授す。

○明治四十四年(五十三歳) 此年より專らシェークスピヤの全譯に心を傾く。

○明治四十五年、大正元年(五十四歳) 三月、文部省より功勞金二千二百圓及びメダル一箇を受く。その一千圓を文藝協會に寄贈し、殘餘を某々三小說家の遺族に頒つ。

○大正三年(五十七歳) 通俗世界全史を監修す。

○大正四年(五十八歳) 早稲田大學教授の職を辭す。此の年新に公刊したる著作、教化と演劇』、『霊驗』、『墮天女』、『テム

大學に寄附せらる。

○昭和四年(七十一歳) 四月より演劇博物館後援會にて、隔月に『演劇博物館』と題するパンフレットを刊行し、先生毎號卷頭に「柿の蔕」と題したる長文を寄稿せらる。此の年早稲田大學、先生及び他の三元老の爲めに古稀の賀式を大隈大講堂に開く。大學より先生に慰勞金三萬五千圓を呈す。先生之れを演劇博物館に寄附せらる。

○昭和五年(七十二歳) 熱海双柿舎の土地、家屋、圖書、器財の一切を國劇向上會に寄附せらる。

○昭和六年(七十三歳) 五月より國劇向上會にて月刊雅誌『藝術殿』を刊行し、先生毎號卷頭に長篇を寄稿せられて、終焉の前月に及ぶ。

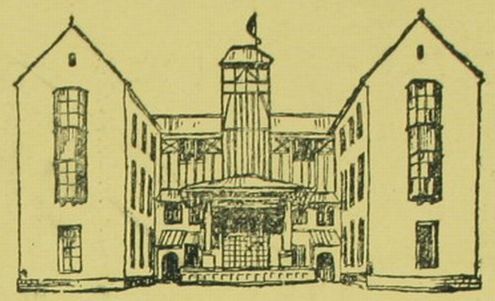
○昭和七年(七十四歳) 東京朝日新聞社より朝日賞として一千圓を受けられ、先生直ちに之れを國劇向上會に寄附せらる。

○昭和八年(七十五歳) 九月以來中央公論社より『新修シェークスピヤ全集』を刊行し、十年二月終焉の直前に、略ほ全四十卷の大校訂を完了せらる。

○昭和九年(七十六歳) 六月『阿難と鬼子母』を刊行す。六月下旬かりそめの風邪より肺炎となり、一時重態に陷られしが、遲々ながら漸次囘復に向かはる。その間危險期の短時日を除きては常に病を押し、苦みを忘れて全集の加筆及び校正に從事せらる。

○昭和十年(七十七歳) 年頭二三日は爽快の氣分を悦ばれ、賀客に接しつゝ、詩歌揮毫など試みられしが、月末より床上の人となられ、二月六日頃再び起つべからざるを覺悟されて、發熱咳嗽に苦しまるゝ間に大切なる事に取極めの配慮あり。かくて二月二十八日午前十時三十分、安らかに大往生を遂げらる。

○先生明治十六年、二十五歳にして『該撒奇談』の飜譯を公にせられて以來、七十七歳昭和十年一月の『藝術殿』に載せられたる堂々たる長篇の『句讀法論』に至るまで、實に五十餘年文學藝術に身を委ねて、曾て筆を絶たれず。著述飜譯實に幾等身ともいふべし。(早稲田學報より轉載)



回本館は坪内逍遙博士が古稀の齡に達せらるゝのと、その半生の研精になれる、シェークスピヤ全集四十卷の飜譯完成とを記念せんが爲に計畫せられ、同博士を始め各方面の有力者、演劇愛好者數千名の寄附によつて、昭和三年十月開館式を擧げたものです。早稲田大學は其維持經營に任じてなりますが、公益機關として無料で公開してゐます。

回本館は東西古今の演劇に關する文獻、參考資料を蒐集整理して、之が展列を行ひ、一方劇に關する圖書館をも兼ねてゐます。なほ研究室、小舞臺等をも用意して、演劇の調査研究所、相談所たらしめ、進んでは各種の施設を充實して、社會文化の一原動力たる演劇の社會的使命を全うせしめんことを期します。

所在 東京牛込早稲田大學構内
(市電早稲田終點ヨリ一丁)
(電話牛込五一四番)

開館規定
開館 自午前九時至午後四時
休館 但日曜、祭日も開館
毎月曜日。祭日の翌日

館長 河竹繁俊

一五五 金太郎・遠目鏡 大判 東京 根本仙太郎殿御所藏
一五六 金太郎・繪馬 大判 東京 根本仙太郎殿御所藏
一五七 金太郎・鬼の賣り 大判 京都 松木善右衛門殿御所藏
一五八 金太郎・鬼の相撲圖 大判 東京 明渡泰次郎殿御所藏
一五九 金太郎拍子木打圖（文化二年） 大判 東京 渡邊庄三郎殿御所藏
一六〇 金太郎・繪草紙圖 大判 東京 根本仙太郎殿御所藏
一六一 團十郎もぐさ賣圖（文化二年） 大判 京都 佐藤章太郎殿御所藏
一六二 見立忠臣藏七段目圖 柱繪 東京 高橋誠一郎殿御所藏
一六三 見立忠臣藏七段目圖 柱繪 東京 荒井清七殿御所藏
一六四 頼朝富士卷狩圖 柱繪 東京 中川秀吉殿御所藏
一六五 朝顔に美人圖 柱繪 東京 竹田玩古洞殿御所藏
一六六 狆を抱く美人と小兒圖 細判 東京 松木喜八郎殿御所藏
一六七 市川門之助・源のよりのぶ圖 細判 東京 松木喜八郎殿御所藏
一六八 狂言づくし圖 細判 東京 古堀榮殿御所藏
一六九 惠比壽大黑神圖二枚續（安永五年） 細判 東京 松木喜八郎殿御所藏
一七〇 布袋唐子圖 細判 東京 松木喜八郎殿御所藏
一七一 松月圖卷物（享和元年） 一冊 加賀豐三郎殿御所藏
一七二 振袖雪吉野拾遺（田語） 大判 加賀豐三郎殿御所藏
一七三 女郎花姿の初穗（田語） 大判 加賀豐三郎殿御所藏
一七四 松本幸四郎と藝者圖 細判 加賀豐三郎殿御所藏
一七五 花の上手談義（文明四年） 一冊 加賀豐三郎殿御所藏
一七六 長生虎之卷（文明三年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一七七 豆男江戸見物（文明三年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一七八 阿部清兵衛見通占（文明三年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一七九 むかし岡崎女郎衆 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八〇 當世菊壽の話 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八一 去御子樣猫嫁御望に付 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八二 通風伊勢物語 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八三 藝者五人娘（安永八年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八四 日照雨狐之嫁入（安永八年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八五 いろは短歌（安永八年） 一冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八六 かごめ〳〵籠中鳥（安永八年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八七 大通人穴扒（安永八年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八八 姉二十一妹戀聟（安永八年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏
一八九 鎌倉山紅葉浮名（安永九年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一九〇 諸事米の飯（安永九年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一九一 近頃嶋めぐり（安永九年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一九二 珍說女天狗（安永九年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏
一九三 ついぞ無弟の甚六（安永九年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一九四 ほんのよい見世物（安永九年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏
一九五 親父布子窓屋（安永九年） 一冊 加賀豐三郎殿御所藏
一九六 姉八宮城野恭太郎（安永九年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二二一 手鞠歌 色模様三人娘（安永六年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二二二 靜舞末廣源氏（安永七年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二二三 金平娘（安永六年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二二四 日待御利生 此頃背語（安永六年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二二五 猿利考浮世咄（安永六年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二二六 太平出世名古屋（安永六年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二二七 魚精初物 里家夜位太平榮（安永六年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二二八 當世四國猿（安永六年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二二九 四國猿後日曲馬（安永六年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二三〇 名代干菓子山殿（安永七年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二三一 妙智力群鳩（安永七年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二三二 化物箱根先（安永七年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二三三 神田與吉一代噺（安永七年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二三四 通人爲眞似（安永七年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二三五 其數々酒の癖（安永七年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二三六 いつちく たつちく 乙姫咄し（安永七年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二三七 嘘言彌二郎傾城誠（安永八年） 三冊 上野帝國圖書館御所藏

二五五 ほかには ないぞや 極通人由來（天明元年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二五六 化物箱入娘 天明元年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二五七 べにさら かけさら 奥州咄（天明元年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二五八 朝比奈唐子遊（天明元年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二五九 盃敵計 冷水灰毛猫（天明元年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二六〇 交古世むかし噺（天明元年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二六一 嗚呼 不儘 世之助噺（天明元年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二六二 嗚呼 不儘 世之助噺（天明元年） 一冊 尾崎久彌殿御所藏

二六三 鬼子寶（天明元年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二六四 通增安宅關（天明元年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二六五 知意 舞 々珍御代之御寶（天明元年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二六六 御代の御寶（天明元年） 渡邊庄三郎殿御所藏

二六七 今昔化物親玉（天明元年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二六八 ついぞ ない 金持曾我（天明二年） 袋入 加賀豐三郎殿御所藏

二六九 御代參牛時詣（天明二年） 三冊 加賀豐三郎殿御所藏

二七〇 舌切雀三の切（天明二年） 二冊 加賀豐三郎殿御所藏

二七一 兒訓影繪噺（寛政十） 加賀豐三郎殿御所藏

二七二 影繪噺（寛政十） 夫八京昔男意 是八東 加賀豐三郎殿御所藏

二七三 卯來世能夢 太

二七四 八景經一代記 義

二七五 繪本多智袋（天 櫻

二七六 御江戸餞餞（寛 美

二七七 美滿壽組入（寛 美

二七八 團十郎七世嫡 團

二七九 團十郎七世嫡 團

二八〇 猿若（文化元年 猿

二八一 猿若春狂言口 猿

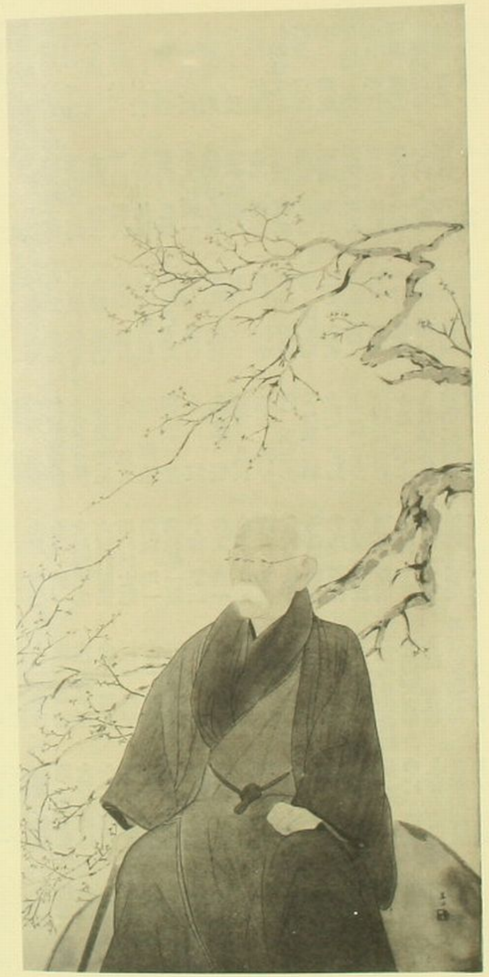
二八二 團十郎もぐさ 團

二八三 市川白猿 念佛百首數珠 市

二八四 市川追善數珠 白猿 古

二八五 風流十二支 金太郎圖 金太郎圖

鳥田墨仙畫伯筆畫像



坪内逍遙先生（絹本丈五尺、幅二尺五寸）

同夫人（絹本丈五尺、幅一尺八寸）

坪内博士喜壽賀會收支報告

收入

一、金壹千參百〇五圓也

支出

一、金六拾四圓五拾錢也　御賛成者二百六十一名會費（一名金五圓宛）
一、金六拾六圓拾六錢也　印刷費
一、金壹圓五拾錢也　郵税
一、金四拾八圓四拾錢也　印判二個代
一、金參拾參圓五拾錢也　交通費
一、金六百八拾圓也　寫眞用費
一、金貳百〇參圓六拾錢也　畫幅用費
一、金貳拾參圓也　記念品製作費
計　金壹千壹百貳拾圓六拾六錢也　雜費
差引殘額　金壹百八拾四圓參拾四錢也

○右殘金は發表當時御諒承を願上置候如く有益なる圖書を購入の上演劇博物館に寄贈可致候

喜壽賀會賛成者芳名（五十音順・敬稱略）

柿崎下　阿部池　遊佐の國

（家業・三百餘年間）
（出の方、記事の一部）
（明治十七年）
（坪内先生が特に子爵同家を位に置き入れ）
（坪内先生の生涯の恩人）
（坪内先生の恩人）
（坪内先生の恩人）
（坪内先生

逍遙先生の御臨終に侍して

生田七朗

逍遙先生が御逝去になつて、もう二ケ月になる。歳月の移りは早いが、ありし面影は今も眼前に彷彿たる思ひがする。殊に御病中は專ら人を謝しての御療養であられたから、親しい御門下生でも、御病床に近侍せられた方が稀めて尠ない。從つて御發病から御逝去までの御消息を傳へた記事も、多くは想像のもので、後の文献に資するには、甚だ遺憾の點がある。自分は幸ひに御就寢から御終焉まで、御側近をして居たので、左に御病中の私記を發表して、先生を御追憶する一端とする。

先生が御病寢に就かれたのは、去る一月の廿四日からで、勿論遠因は昨年六、七月の御大患後、まだ充分御全癒でないのに拘らず早くも沙翁劇改修譯に從事せられた御疲勞が重なり、殊に十一月末から着手されたオセローの御飜譯は、全然御改譯であり、且つ之を十二月の廿日迄に、是非共完了する御豫定であられたので、日々五時間乃至六時間は精魂を打ち込まれ、其刻苦鍊骨の御努力は、他の見る目も痛々しい程で、午後の四時乃至五時に二階から降りて來られる御樣子は、實に氣息奄々たるものがあつた。

挿話の一　十一月の末、先生は大工に命じて二階の階段の上降に便ずる爲め、之に片手摺りを附するやう工作された。此の階段はお眼の不自由な夫人にも、らくに昇降出來るやうな、極めてゆるい勾配に設計されてあるに拘らず、更に攝まつてあがるやうに加工されたのは、既に此の當時から心身の如何に疲弊されて居られたかゞ窺はれる。

さうして此のオセローを改譯し終つたのが廿二日、その清書に更に三日（之は半ばは起き半ばは寢中で）を費されて、休む間もなく直ぐ研究の梨に着手された。

處が歳を迎へた一月の十八日に、夫人が感冒に罹られて、先生は晝はお仕事、夜は夫人の御看護の爲めに、錄々御休養の遑もなく、心身の消磨しつくされた處へ、ついに又感冒に罹られたのである。私はその前々日の廿二日に、六日間の滯京豫定で上京したのであるが、着京の翌夜に惡夢に襲はれて寢ざめがわるく、氣がゝりでたまらないまゝ、廿四日の午後突然歸つて來て、離れのお座敷へ御伺ひ

すると。先生はまだ起きてお出でになつて、夫人を枕頭に看護られた。お顏を拜見するといつになく上氣して居られる。「お熱がありはしませんか、一度檢溫器でお計りになられたら」とお勸めして見たら、三十八度九分と云ふ發熱である。私は驚いてすぐ御就寢を御注意し、且つお二方の御病氣では當分上京を見合すべきだと決心し翌日再上京して殘務を片付け、廿六日に歸宅して見ると、既に先生は寢を二階の書齋に移され、發熱は繼續し、咳嗽は頻發して、なかなかのお苦しみであり、感冒は進行して氣管支炎となつて居た。でも思ひやりの深い先生は、夫人が病寢を離れて御看護されるのを非常に苦にせられて、「斷然看護婦を雇ふ」、さうして「私は母屋に行く」と主張されるが、主治醫は今の酷寒中、外氣に觸れての御移寢は大事の因と警戒して、狹くとも此の室での御療養をとお勸めした。廿七日、廿八日、廿九日は殊に氣溫が低く、屏風を二重に立て廻して、專ら肺炎の再々發を豫戒した。三十日には昨夏の大患に附添はれた腰川看護婦の都合が付いた。お熱は相變らず三十八度臺、時には九度以上に昇降して居るが、三十一日は實に好晴無風の上天氣であつたので、そこで先生の御希望を容れて、主治醫は母屋への、移寢を承諾した。午後の一時、氣丈の先生はそれでも階段を蟻の這ふ如くに降りられて寢椅子に移られ、吾等は寢椅子の前後を擡して靜かに母屋に設けられた御病寢に御移し申上げたが、幸ひにさせる御障りもなくて、却つて御安心の爲めか、其の夜は幾分御平靜に見受けられた。然し相變らず咳嗽の頻發で御安眠が出來ず、夜間眠藥の量を增されても其效果が薄かつた。二月一日、二日、三日、四日、五日、六日、御容態は依然として御輕快に向はず、毎夜の眠藥御服用も、咳嗽に妨げられて一二時間の外は御安眠が出來ない、それでも食事は朝牛乳一合と卵黃一個と極少量のパン、晝は粥一椀に二百グラムのスープと果汁、晩はオートミルに牛乳一合を攝取されて格別御食慾の衰へを見なかつたので、主治醫も吾等も竊かに意を强くして御恢復を信じた。夫人は御自身の御恢復を裝つて、毎日離れから御看護に參ぜられるが、朝早い時御委を現はしたり、又午後の四時過ぎ迄も枕頭に侍せられると、先生はかゝつて之を制止される。御兩者の思ひやりと御心遣ひといふものは、まことに涙ぐましいものがあつた。

挿話の二　（二月六日の私の病床私記の一節）、此の夜午後九時迄侍側。先生のお話。若し病前に研究の梨が完成してゐたのなら、輕快次第着手したき腹案の一は「竹取の翁の死」と云ふ繪卷物。竹取を平安朝で扱つたのが癖だ。源氏を馬鹿に驚ぐが、竹取は源氏よりも或意味で傑作。之を飛鳥朝あたりの風俗で繪卷に作つて見たし。場面々々に挿話を加へて。

開卷の第一には富士山巔に、時々月世界より委を現す赫映姫。富士の烟を赫映姫の幻影と見る竹取の翁は、その幻影を慕つて家を出る。阿呆の召使ひが主人の大事と其跡を追つ驅る。姫の面影を忘れ得ぬ正直の公卿の一人が、やはり姫をあこがれて富士に向ふ。褐野のあたりで狐にたぶらかされるおかしみ、色々の場面、結末は翁が褐野で野斃れ死云々。

源氏の英譯にも異見あり。簑助の源氏にも大不服、此の兩批評論も、もう時效に罹つたから發表したし、腹案はとくに出來て居る。論語の口語譯も試みの一つ云々。

（註、こゝで思ひ當る事は、母屋移寢の翌日、先生が私に命じて書屋より「日本繪卷大成」十一册を枕頭へ取寄せ

逍遙先生の御臨終に侍して

生田七朗

逍遙先生が御逝去になつて、もう二ケ月になる。歳月の移りは早いが、ありし面影は今も眼前に彷彿たる思ひがする。殊に御病中は專ら人を謝しての御療養であられたから、親しい御門下生でも、御病床に近侍せられた方が極めて尠ない。從つて御發病から御逝去までの御消息を傳へた記事も、多くは想像のもので、後の文献に資するには、甚だ遺憾の點がある。自分は幸ひに御就寢から御終焉まで、御側近をして居たので、左に御病中の私記を發表して、先生を御追憶する一端とする。

先生が御病褥に就かれたのは、去る一月の廿四日からで、勿論遠因は昨年六、七月の御大患後、まだ充分御全癒でないのに拘らず早くも沙翁劇改修譯に從事せられた御疲勞が重なり、殊に十一月末から着手されたオセローの御飜譯は、全然御改譯であり、且つ之を十二月の廿日迄に、是非共完了する御豫定であられたので、日々五時間乃至六時間は精魂を打ち込まれ、其剛苦鐵骨の御努力は、他の見る目も痛々しい程で、午後の四時乃至五時に二階から降りて來られる御樣子は、實に氣息奄々たるものがあつた。

挿話の一　十一月の末、先生は大工に命じて二階の階段の上降に便ずる爲め、之に片手摺りを附するやう工作された。此の階段はお眼の不自由な夫人にも、らくに昇降出來るやうな、極めてゆるい勾配に設計されてあるに拘らず、更に攝まつてあがるやうに加工されたのは、既に此の當時から心身の如何に疲弊されて居られたかゞ窺はれる。

さうして此のオセローを改譯し終つたのが廿二日、その清書に更に三日（之は半ばは起き半ばは夢中で）を費されて、休む間もなく直ぐ研究の業に着手された。

處が歳を迎へた一月の十八日に、夫人が感冒に罹られて、先生は晝はお仕事、夜は夫人の御看護の爲めに、錄々御休養の遑もなく、心身の消磨しつくされた處へ、ついに又感冒に罹られたのである。私はその前々日の廿二日に、六日間の滯京豫定で上京したのであるが、着京の翌夜に惡夢に襲はれて寢さめがわるく、氣がゝりでたまらないまゝ、廿四日の午後突然歸つて來て、離れのお座敷へ御伺ひ

した。

挿話の二　廿四日（病床記の一節）此日午後九時三十分まで信、沙翁切拔集三册、嚊れの紀上ヒリヤと物を持參せと云ふ。明日書屋よりの見册入りの箱三箱、嚊れの紀上ヒリヤと物を持參せと云ふ。明日書屋に數回使して命ぜられたる各種を命ぜられ、離れ、書屋、國文の譯氏を呼び、原稿等、種々の整理を命ぜられ、河岸、日高、服部の諸氏の諸師の一室を事務所とし、未了の個所を整理せしむる御意爲らし。

挿話の三　二月八日（病床記の一節）此日午後九時十分まで信、沙翁劇改修譯に從事せられた御疲勞が重なり、殊に十一月末から着手されたオセローの御飜譯は、全然御改譯であり、且つ之を十二月の廿日迄に、是非共完了する御豫定であられたので、日々五時けて力の藥。信長力及ばずして、政秀は自殺。政秀自殺。

第四場。信長の藥。信長の藥。信長の藥

が病室に同座して、夜は深更まで侍側するのを何等のお尤めもなく、唯默々として寛過されたのである。同時に吾々は愈々御重篤の御容態と心得て、之を高田、市嶋の御兩友、竝びに御門下を代表する金子博士、其他御親戚の方々へ内報した。金子博士は即日來海されて、親しく恩師の病室を見舞はれたが、市島先生は病友の苦しみを見るに忍びずとて此の時も御來莊がなく、高田先生は廿六日の冷雨中、殊に御風邪を押して御來海になられたが、これもさうしたお思召しか、わざと病室にはお通りがなく、離れで夫人と御面會の上、懇ろな見舞を述べて引取られた。斯くて廿六日の夜には御脈搏も結滯勝ちになり、廿七日には一層險惡な御狀態となつて昏々と眠りをお續けになり、同日甥の土行氏が見舞はれても格別のお話もなく、多年御習慣の催眠藥さへ此の前夜からはもうお採りにならなかつたのである。さうして同夜の十一時頃にはちよつと咳嗽がつづき、御呼吸が切迫したので一同斷腸の思ひをしたが、程なく持ち直されて翌廿八日に及び、醫師の朝の診察では或はまだ、一日位はと云はれたのが、歸られると間もなくお脈が結滯し、午前拾時半、いとも靜かに些のお苦しみもなく、溘焉として死の床にお就きになつた。夫人、飯塚夫人、山田氏、私、私の妻、倉持ゆき其他の一同が順々に末期の水をお勧めし、岩田主治醫は再び驅けつけられたが、もう御臨終には間に合はなかつた。偉大なる聖者の死とは當さに先生の如き御臨終を申すべきか、丹然として木彫りの面の如く、大きな耳と特長のある白皙と、あの威嚴に滿ちたお顔のうちにも、どことなく最後の慈しみを湛へられた、眞に眠るが如き大往生を目のあたりに見た私は、唯もう嚴肅の氣に打たれて、しばらくは涙を忘れてその尊いお姿に見入つたのである。（以上道盞先生侍側錄の内より）

坪内先生と舞踊と

小寺融吉

坪内先生は三味線を彈かれたが、とてもデタラメなものだつたさうだ。然しあの先生が三味線を持たれた姿を想像すると、誰しも微苦笑せざるを得まい。況んや先生は普通の人の場合のやうに、三味線を彈いて都々逸でも歌はうと云ふのではなく、凡そ舞踊劇を書く者は、音樂にも通ぜざるべからずと云ふ理論から出發されたと見るべきであるだけに、一段とユーモラスである。先生が上手に三味線を彈かれようとは、誰も想像も出來ない。それを一應やつて見ようと思ひ立たれた所に、先生の何事にも徹しようと云ふ眞劍味が現はれてゐるではないか。

三味線は一度は手に持つたが、踊ることは一度もなかつたと、先日も坪内士行氏が云はれたが、先生の事だから一度は自分でも踊らうと思ひ立たれたに相違ない。或は一度で懲りられたのかも知れない。その爲めであるのか、劇の稽古には先生は立つてシグサをして見せなすつたが、をどりの振付には、そんな事はなかつた。「そこはもう少し柔く行けませんか」とか、「そこはもつと驚く振をつけた方が好い」と云ふ風に、極めて抽象的な暗示を與へられるに過ぎなかつた。尤もこれは私が傍で目擊した最近年の事で、文藝協會時代には、或は或る程度まで手を振り首を振られたかも知れぬ。

三味線はデタラメにしても、日本の古い音樂は先生は充分に聞いてゐられたやうであつた。それは舞踊劇の御作を見れば推察でき

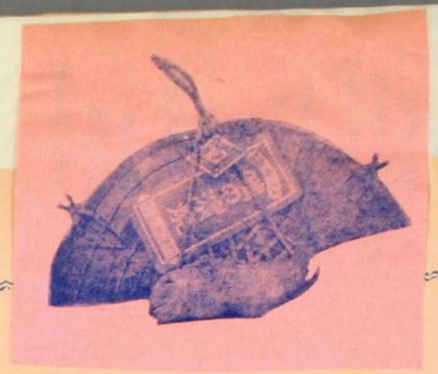
問乃至五時頃は精魂を打ち込まれ、其剣幕屬侍の御努力だけ、他の見る目も鮮やかしい程で、午後の四時乃至五時に二階から降りてくる際の御容態は、最非共定了する御豫定であられたので、日々五時に二月の廿日迄に、最非共定了する御豫定で來て、疲れのお様子御伺ひらない。

道盞先生お御造えになつて、もう二ヶ月になる。歳月の経ひは早い、あの人を偲ぶ不日出たえ人に、ひくに呉降日来るやうな、御病床に近侍せられた方が極めて稀な。從つて御親族から御逝去を聞き、御遺骨を偲ぶ、之に片手摺りを附けるやうに世の際の上座に座ず千に、實に氣品をたゝるのである。

道盞先生の御臨終に侍して

生田上朗

道盞先生お御造えになつて、もう二ヶ月になる。歳月の経ひは早い、あの人を偲ぶ不日出たえ人に、ひくに呉降日来るやうな、御病床に近侍せられた方が極めて稀な。從つて御親族から御逝去を聞き、御遺骨を偲ぶ、之に片手摺りを附けるやうに世の際の上座に座ず千に、實に氣品をたゝるのである。



▼名産鯛の濱燒と……櫻鯛の由來！

凡そ、魚族中その潑溂たる錦麥と又美味なる點に於て鮮鯛に如もの無く、さらに風光明眉なる瀬戸内海に産するもの最も著名にして、就中我が漁場（尾道沖ヲ指ス）に漁するもの既に冠たり。

されば、古事記に見るも、上古神功皇后御征韓の御海路偶々味浮の海（即我ガ漁場）に御船を寄せられ給ひしに、御邊の渚を紅に染めたる一郡の鯛は、恰も御征途を御壽ぎまつるが如く浮泳する美觀を、御賞歎あらせられたりと。

後大江匡房郷は

春くれば、味浮の海の、ひとかたに
浮てふ魚の、名こそおしけれ

と、詠まれたるにても知るべく、その豊魚季（俗に魚島）に於ける鯛網の壯觀たるや、櫻さく春の一大行事にして、歎賞又古今に博く、然して櫻鯛の華稱あり。

▼名産鯛の濱燒の元始的製造の由來に就いて!!

されど、今日鮮魚の輸送は文明機關に依ると雖も、その潑溂たる鮮味を玩味することは難く、然も斯る由緒ある鮮鯛を土産として贈らんとすることは、今昔を問はらんとせしも、未だその保存の法開けず遺憾とすること屢々なりしを、或時郷人の塩濱（塩田）にいたり、之を塩釜により偶然にも、元始的なる保全の術を啓きその味覺は鮮味をも遙に凌ぐ製品を得たるに於て、濱燒と稱し、以て全國に名をなし、今日の濫觴をみるに至りたるものなり。

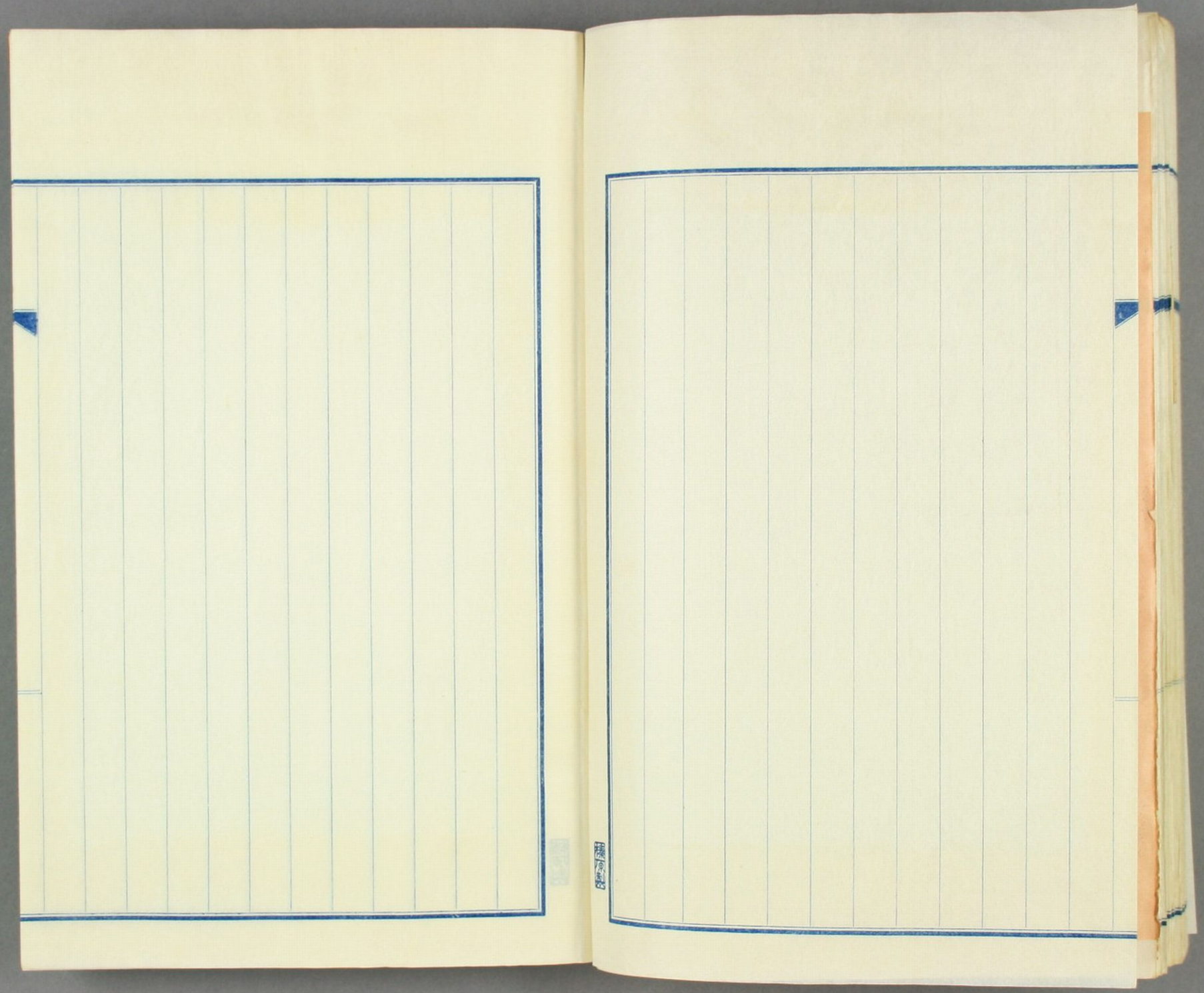
▼名産鯛の濱燒の中絶とその復興に就いて!!!

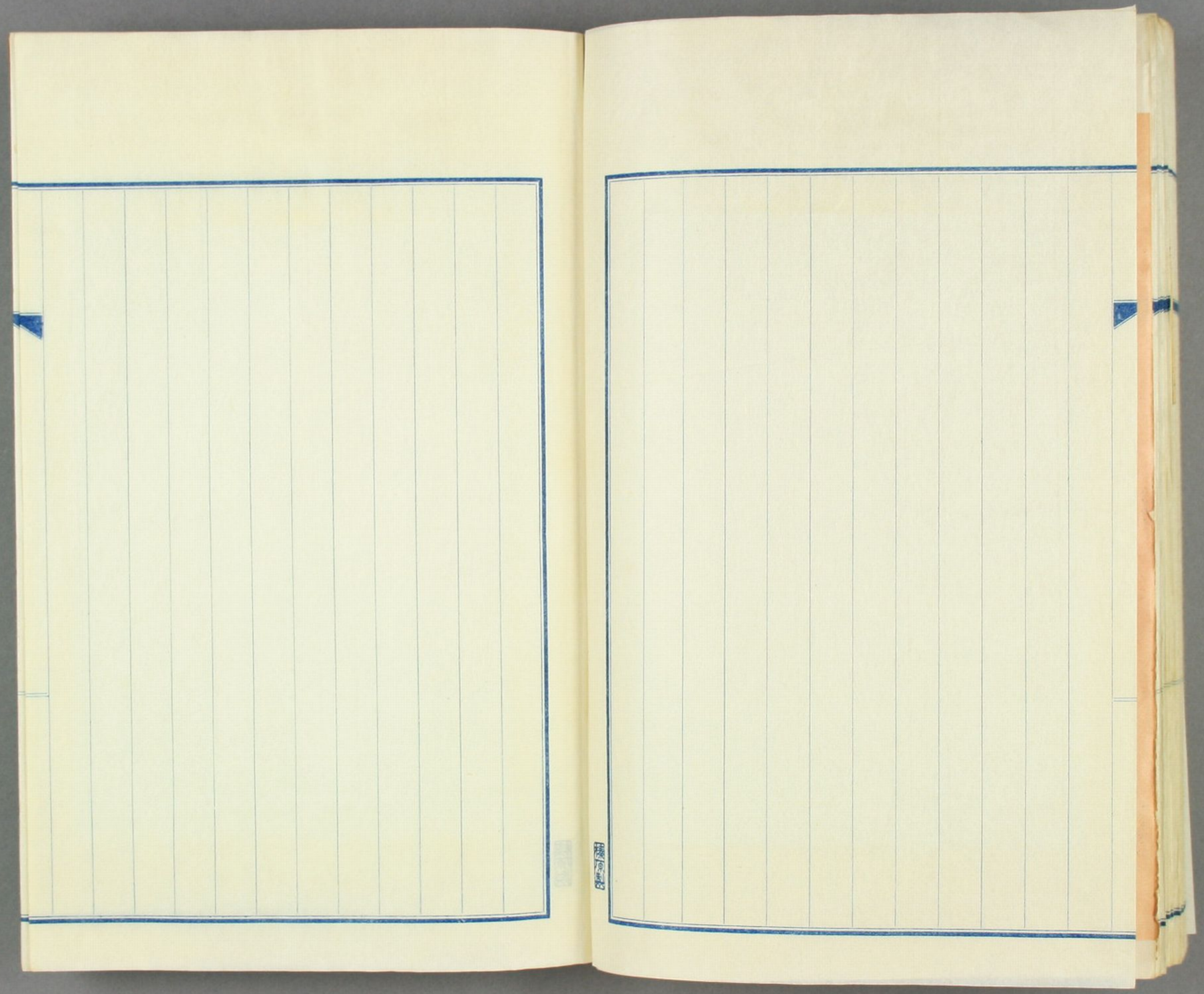
然るに明治三十八年我が國の製塩事業は官制の管理するところとなり、從つて塩田に於て濱燒とすること堅く禁じられ、全く名産濱燒の受難時代ともいふべき中絶の悲境に遭遇し、好食家の惜念止まず、不肖又郷土のためにその維持を念願とし幾多の辛酸と歳月を費し研究に專心するや、やうやくその製法に成就し、以前に優る濱燒の製品を得るにあたりこゝに於て、我が國水産界の泰斗にして魚族生理學上の學殖深かりし、故理學博士　岸上謙吉先生の御試驗を乞ひたるところ、美味佳良にして、保全十日間の絶對的證明と御奬勵を辱ふし、然して今日〝鯛の濱燒〟の全國に宣傳され、いたく諸賢の食膳に御賞賛を博しつゝあるものなり。

鯛

尾道
魚末
本店

濱燒屋





閲覧室